

聖劍と聖者の右腕

入山望

目次

聖剣と聖者の右腕……………P 3

時計仕掛けの魔術師……………P143

悪英雄……………P215

聖劍と聖者の右腕

第一章　せいけんのかくご

俺の右腕が斧で切断される。血しぶきが派手に舞い、部屋に無数にあるフラスコやビーカーを汚すが、部屋の主にして俺の右腕を切り落とした本人は全く気にした様子はない。

「悪いな、部屋汚しちゃった」

「いいのよ。気にしないで」

優しい顔で微笑む。一見すると天使にも見えるが、その女が魔女であることを俺は知っている。

紫色の長髪を血で濡らして、優しく微笑む彼女の名はアルマ・ケルスタ。寿命の縛りを超越し、すでに数百年生きているという噂だ。俺はまだ二〇年も生きていないので本当のところは知らない。

アルマは机の上に置いてあった、干からびてミイラ化した右腕——聖者の右腕を俺の肘の切断面にくつつける。麻酔のおかげで痛みはないが、ジンジンとして不思議な感じた。

麻酔は正しく調合しないと一生寝たきりになったり、感覚が戻らなくなったりする上、非常に高額だ。

そのため、王侯貴族が名医を呼んで使うもので、一般庶民が使う機会は滅多にない。

「じゃあ行くわよ。《結合》^{ジョイン}」

魔術師だけが使うことができる、力ある不思議な言葉——呪文により、俺の肘と聖者の右腕が結合される。

俺の血が巡り、干からびてミイラ化していた聖者の右腕が蘇る。

「一応安定したわね。しばらくは派手に動かさないように、この手術台は一晩貸してあげる」

「ああ、助かる」

実際、俺は凄まじい疲労感と倦怠感に包まれていた。出血多量の上に、干からびてミイラ化していた聖者の右腕を瑞々しく蘇らせるのにもかなりの血液を使っただろう。

「じゃあおやすみ。レイド」

アルマに礼を言った瞬間、俺の意識は睡魔の海に沈んでいった。

翌朝、殺人現場のような惨状の手術台で、血まみれの俺は目を覚ました。

服にも身体にも乾いて固まった血がカピカピにへばりついていて気持ち悪い。

「おはようレイド。調子はどう？」

アルマが奥の部屋から扉を開けて手術室（実験室かもしれない）に入ってくる。

調子はどうかと聞かれて俺は気づいた。いや、聞かれるまで気づかなかった。

右腕に違和感がない。

先祖とはいえ、赤の他人の腕を強引にくっつけたのだから、違和感や幻肢痛があつて当然のはずだ。なのに、それが無い。

俺は聖者の右腕をグルグルと手首を回したりして確かめる。肌の色が若干違うので、強引につないだことはまるわかりだが、驚くほど違和感はない。

「ああ、いいよ」

「そう。じゃあこれ、朝食」

そう言つてアルマは林檎を俺に向かって投げってくる。俺はあえて右手でキャッチした。

反応速度や距離感にも問題はない。

これなら、いける……。

俺はほくそ笑みながら、林檎にかぶりついた。

「とりあえずここを掃除するから、レイドは身体に付いた血を落としてきて」

「いや、掃除くらいは俺が——」

これは俺の願いで、俺が汚したものだから、掃除くらいは俺がやるのが筋だろう。だが、

アルマはクスリとほほ笑むと懐に仕舞っていた煙管を手に取り、呪文を唱えた。

ウオッシンク
「《洗淨》」

突然水が出てきて、血を洗い流す。だが、手術室は辺り一面水浸しになっていた。

ドライ
「《乾燥》」

アルマが新たな呪文を唱えると、まるで何日も経ったかのように、水が少しずつ引いていく。「魔術ってやつは何でもできるんだな」

「何でもできるわけじゃないわよ。それより、ここは終わったから、あなたは自分の身体に付いた血を落としてきて」

それも魔術でやってほしいと言おうかとも思ったが、確か魔術というものは魔力という謎の力が必要になるはずだ。それがなくなると魔術が使えなくなる。アルマ自身も何でもできるわけではないと言っていた。あまり多用させるのはよくないかもしれない。

「井戸で洗い流してくる。布をもらえるか？」

そう思い、俺は井戸に行くことにした。そうすると、アルマはクスリと笑う。

「その廊下を右に曲がると浴室だから、そこを使いなさい」

なんと、この家には浴室まであるらしい。浴室なんて、金がかかるし、水をためるのも火を

見るのも人が必要なので、両方持っている王侯貴族の家にしかないものだ。

いわれた通り廊下を右に曲がり、浴室と書かれた部屋へ入る。

確かにそこは浴室だった。だが、俺がイメージしていた王侯貴族の入る広い浴室とは少し違う。もう少しこじんまりしている。だが、決して貧相というわけではない。

アルマは一人暮らした。おそらく王侯貴族のように見栄を張って無駄にでかい浴室にしながらも、一人用でいいと考えたのだろう。

俺は服を脱ぎ、浴槽に張ってあったお湯に身体を沈ませる。俺が手術台で寝ている間に沸かしておいてくれたのだろう。さすがにこれは普通のお湯のようで、さっき見た魔術のように一瞬で身体が奇麗になることはなかった。

だが、お湯を沸かすのも本来なら重労働だ。アルマはおそらく魔術でやったのだろうが。

浴槽の隅に置いてあった石鹸を手に取り、それで血の付いた部分をこする。

もちろん、石鹸も一般庶民には手の届かないものだ。普通は水で濡らした布で身体を擦るのが精一杯だ。

俺は今、一生分の贅沢をしているのかもしれない。いや、きっとそうに違いない！ そう考えた俺は、血がついていない部分も熱心に洗った。ピカピカに擦り上げておいた。

石鹸を洗い流し、服は血まみれなので、置いてあった腰布を巻いて浴室から出ると、アルマが待っていた。

「服はどうする？」

「洗濯してもいいけど、新しい勇者様があんな服を着ていちゃ示しがつかないし、新調しましょうか」

そういうと、アルマは巻尺で俺の身体の採寸を始めた。

「採寸なら、服屋に行けばやってくれるんじゃないのか？」

「服屋まで裸で行くつもり？ それにどうせ服屋にはいかないわ」

そういうと、アルマは別の部屋に移動する。ついて行っていいものか迷うが、魔女の裁縫なんて見られる機会は二度とないだろう。

それに、どうせアルマは俺を殺せない。覚悟を決めて付いていくことにする。

部屋に移動すると、そこには糸のついていない糸巻き機があった。

「糸はどうするんだ？」

アルマは部屋の片隅に巣を張っていた蜘蛛を呼び寄せた。蜘蛛はまるでアルマになついているかのように指の先に乗る。

「この子からもらうのよ」

アルマが指を蜘蛛の尻につけて離すと、蜘蛛の尻からアルマの指に糸が引いていた。その糸を糸巻き機につなぎ、ゆっくりと回す。すると、少しずつ透明な細い糸が集まっていく。

小さな蜘蛛から俺が着れるサイズの服を作る分の糸を取るのだから、かなり長時間の作業になるかと思つたが、思いのほか早く糸巻き機いっぱい糸を取ることができた。

「思つたより早かつたな」

「この子はね、私の服を作るために品種改良した蜘蛛なのよ」

つまり、アルマの服も蜘蛛糸製ということだ。

確かに、アルマの服には不思議な光沢があり、高級感がある。

「蜘蛛の糸なんて、すぐに切れてしまうんじゃないか？」

子供のころ、蜘蛛の巣を木の枝で壊して遊んだのを思い出す。

「まあ、普通はね。でもこの子の糸は細くて丈夫だし。それに普通の蜘蛛だって、あの細さの糸の割にはかなりの強度を持っているのよ。それこそ、人間には作れないくらいにね」

まあ、作るのはアルマだし、文句を言うとな変な服にされかねないから、これ以上は言わないようにしよう。

ボビンが完成すると、足踏みミシンで服にしてい

白いシャツと青いズボンが完成した。

「あと、これね」

アルマは手拭いのような白い布を、着替えを終えた俺に手渡してきた。

「これは？」

「聖者の右腕を隠すための布よ。腕の色が途中から変わってたらバレるでしょ？」

「なるほど」

手拭いを聖者の右腕に巻き付け、色の変わり目を隠す。

「さて、これで準備はすべて整ったわね？」

俺はアルマの試すような視線をまっすぐに受け止める。

「ああ、行こう」

俺はその足で聖剣広場に向かった。聖剣広場は、先代勇者が魔王を討伐した後、聖剣を突き立てた場所を広場にしたものだ。

今もその場所に聖剣は突き立てられており、この聖剣を引き抜いた者が新たな勇者となる仕

来りだ。

「挑戦したいんだが」

俺は、聖劍の番兵兼未届け人に声をかける。

「どうぞ」

昔は聖劍に挑戦するには挑戦料が必要だったらしいが、あまりに誰も引き抜けないので、民衆に詐欺だと叩かれ、とうとう無料で誰でも挑戦できるようになった。

今回も見届け人はやる気なく答える。見届け人の仕事は聖劍を引き抜けた時になって初めて始まる。だが、誰も引き抜けない。番兵としての仕事もそもそも聖劍を移動させる術がないのでないに等しいし、仮に聖劍を盗む方法を編み出すような猛者がいたとしたら、雑兵である番兵にはどうにもできない。

だから番兵兼見届け人は役立たずで、いい左遷先になっているというのは、庶民にも有名な話だった。

そんなことはさておき、俺は聖劍の柄を握り、聖劍を引き抜く。

眩い光が溢れ、台座から切っ先が離れる。

通行人の視線を一身に浴びながら、俺は聖劍を天高く掲げ、名乗りを上げる。

これも、勇者になったというアピールだ。

「我が名はレイド・マーシャル！ 新たな勇者である!!」

ここで名前を覚えて貰えば、何かと便利……らしい。アルマの入れ知恵なので、本当のところは俺にはわからないが。

「おめでとうございます。レイド様。我々がご案内いたしますので、まずは王城で王に御謁見ください」

俺の挑戦を欠伸混じりに見ていた番兵兼見届け人も、急に下手に出てよっこいしょし始めた。

「分かった。行くぞ、アルマ」

アルマは俺が必ず聖剣を引き抜けると知っていたので、魔術師らしい高級そうなローブに身を包んでいる。

「アルマ？ まさか、アルマ・ケルスタ？ あの悪名高い魔女の？」

アルマの名を聞いた途端、急に顔を青ざめさせて震えだした。まあ無理もない。アルマは人間最強の魔術師だが、その名前はどちらかという悪名で轟いている。

アルマは人類最強の魔術師でありながら、王の言うことを聞かず、自由気ままに非人道的な実験を繰り返している。その対象は魔物だけでなく、人間も実験対象だ。

一度は王国から大規模な討伐隊も派遣されたが、全員返り討ちにされ、死体は人体実験に使用された。

以降、アルマは魔女と呼ばれるようになり、アルマの住む屋敷に近づく者はいなくなつた。

「なあに、ボクちゃん」

アルマは番兵兼未届け人に顔を近づけ、挑発的な態度をとる。番兵兼未届け人は四〇歳近く、もうボクちゃんなどと呼べる年齢ではないのだが、何百年も生きているアルマからしてみれば、ボクちゃんなのだろう。

「ひ、ひい！」

番兵兼未届け人は口から泡を吹きだして気絶した。いつの間にか俺が聖剣を引き抜くのを見ていた通行人も、今では遠巻きに様子を伺っている。

まあ、アルマが嫌われていても俺には協力的だし、アルマの協力なしで魔王を討伐する自信もないので連れていくが。

「アルマ」

一応反抗されない程度に軽く釘を刺しておき、王城に向けて歩を進める。

白亜の城と呼ぶに相応しい、漆喰で綺麗に塗られた王城にたどり着いた。

「何者だ！」

二人の門兵が槍をクロスさせ、門を閉ざす。

わざわざ話すのもめんどくさいので、門兵の鼻先に聖劍の切っ先を向ける。

「これは——聖劍!？」

「ということは……失礼しました。勇者様」

一人の門兵がすべて察したのか、道を開ける。

聖劍を肩に担いで城門をくぐる。

中に入ると、門兵が事情を説明してくれて、待合室に通される。

「アルマ、盗聴はされてないか？」

アルマはキョロキョロと辺りを見回したのち、耳を澄ませる。

「大丈夫ね。本職の仕事だったら見つけられないかもしれないけど」

ここは王城だ。金も持っているはずだから、一流の本職に仕事を任せられることできるだろう。

だが、もしも盗聴がバレれば、困るのは王国側だ。待合室に盗聴器を仕掛けていたという事実

がバレれば、王国は信用を失う。

それだけのリスクがあれば、俺なら盗聴器は仕掛けない。

「この聖剣、内包している力が強大な割に、出力が低い」

聖剣の力が強大なのは、引き抜いた瞬間に感じた。だが、今の聖剣の力は当初感じたものに比べれば、著しく弱々しい。

聖剣を机に置き、アルマに調べさせる。

「あ……」

アルマは何か気づいたようだ。言いづらそうに口を開いた。

「右腕だけしか勇者じゃないって見抜かれてるわね」

それはつまり、俺が聖者の右腕を身体にくっつけただけの、偽りの勇者だと聖剣に見抜かれているということだろう。

「そのせいで出力が落ちていると？」

「ええ」

「解決策は？」

「分らないわ」

「おい！」

聖者の右腕を俺の右腕に接合する提案を出したのはアルマだ。故に、これはアルマの責任となる。

当のアルマ本人はメモ帳に何事か書き込んでいる。おそらく、聖剣についての今回の収穫でもメモしているのだろう。

「まあ、一番簡単な方法は、あなたが本物の勇者と認められることね」

それは、アルマにとって一番簡単な方法であって、俺にとっては一番難しい方法だ。

それができなかったから、俺は自分の右腕を切り落としてまで勇者になったのだから。

「ほかの方法は？」

アルマはペンで頭を掻きながら答える。

「聖者の右腕との適合率が上がれば、自然と出力も上がると思うんだけどね」

それなら、普通に過ごしていれば聖者の右腕は馴染むはずだから、冒険を続けていけば魔王戦前にはかなりの出力になっていることだろう。

「そうか。ならいい」

俺たちの目的は魔王を倒すことだ。本物の勇者になることじゃない。俺の力が従来の勇者より低いのなら、従来の勇者よりも強い仲間を集めればいい。

そう俺が結論付けたとき、扉が三回ノックされた。

「勇者様、王との謁見の用意ができました」

使用人が呼びに来たらしい。

「分かった」

俺は聖剣を抱えて立ち上がり、扉を開ける。

使用人に案内され、謁見の間に通される。

近衛兵が部屋の両端にずらりと立っている。

「なあ、王との謁見に剣を持っているのは不味くないか？」

俺たちを案内してきた使用人に問いかける。

「ご心配なく。聖剣だけは例外です。それに、聖剣に選ばれた勇者様が、不敬を働くとは思っ

ておりません」

本当は選ばれてないのだが。

「国王様の御成り！」

甲高い声が響き、王が玉座に座る。俺は、使用人が跪いたので、慌てて同じように跪く。どうやら、この使用人が俺たちに礼儀作法の見本を見せてくれるらしい。アルマは礼儀作法が一

通りできるのか、使用人の動きを見る前に跪いていた。

アルマは国王に討伐隊を送られているから、何か思うところがあるんじゃないかと思っただけ、杞憂だったようだ。

「今代の勇者よ。名は何という？」

王がゆったりとした口調で答える。

「レイド・マーシャルです」

俺も、使用人に答えていいかと視線を送ってから答える。

「そこにいる女はレイドの仲間か？」

王がアルマに視線を送る。

「はい」

「名は何という？」

俺はアルマが答えるのだろうと思っただけ待っていると、使用人に肩を叩かれる。

「なんだ？」

「王との謁見では、勇者以外は王との会話を許されていません。王からの質問は、勇者が全て答えてください」

つまり、アルマへの質問も、俺が答えないといけないというわけか。めんどくさ。

「アルマ・ケルスタです」

俺がアルマの名を口にした瞬間、謁見の間がざわざわと騒がしくなる。

「アルマだ?!」

大臣たちがざわつきだし、近衛兵が一斉に抜剣する。俺も抜剣するか迷っていると、王が手を打った。

「静まれ」

王の鶴の一声により、謁見の間が水を打ったように静まり返る。

「アルマほどの魔術師が仲間とは、今回の勇者は頼もしいな」

王は満足そうに笑う。器が大きいのか、単に欲深いだけなのかは俺には分からない。

「ところで、二人だけでは仲間が少ないように思うのだが？」

王の言うことはもつともだ。人数が多ければ、それだけ役割分担ができる。例えば、野営の時の見張りも人数が多ければそれだけ一人当たりの睡眠時間を増やせる。

魔術の使用も、パーティーに魔術師一人なのと二人とでは使用できる回数が大きく変わってくる。

「はい、あと一〇二人ほど探そうかと思っております」

「そうか。あの者をここへ」

王は安心したように笑うと、右手を上げる。

謁見の間の扉が開いて、俺たちの後ろから人が出てくる。

白装束を着て、黄金色の錫杖を持った、桃色の髪と瞳を持った整った顔の女性だ。

「彼女はヤナ・ラーマ。今代の聖女だ」

聖女というのは、初代勇者のパーティーの一人で、聖職者だった人物のことだ。冒険の途中で勇者が死んだ際、自分の命と引き換えに勇者を蘇生させたという伝説から、聖女と呼ばれている。

その伝説以降、最も優れた女性聖職者に聖女の称号を与える風習ができた。

以降、勇者パーティーの中に聖女を入れるのはルールではないが、暗黙の了解となっている。

「彼女をパーティーに加えてくれるな？」

「はい、喜んで」

前述したように、聖女を勇者パーティーに入れるのは暗黙の了解だ。今代だけ聖女が勇者パーティーにいないと、今代の勇者と協会は仲が悪いのかなどと痛くもない腹を探られることにな

る。

なので、彼女を勇者パーティーに入れるのは必要なことだ。それに、回復役はどのみち必要になる。ならば、身元が保証され、腕のいい聖女を仲間に入れることは、間違っていないはずだ。

王は俺の返事を聞くと、指を鳴らして使用人に合図を送る。

俺の前に剣の鞘と中身の詰まった袋がお盆に乗ってやってくる。

「聖剣の鞘と金貨一〇〇枚を進呈する。魔王討伐、頼んだぞ」

「はい！」

王が玉座を離れた後に、三人で謁見の間を出る。

「これからどうする？」

アルマとヤナに聞く。

「出発の準備をするのがよろしいのではないのでしょうか？」

ヤナが丁寧な口調で言う。

「すぐに出発するならそうですね」

アルマも同意する。

「俺は故郷が遠くだから、家を出るときに戸締りも必要な道具の整理もやったが、アルマとヤ

ナは家が近いだろう？ 戸締りとか、出発の準備はいいのか？」

俺の必需品はリュックサックの中に入っている。地図やナイフなど、だれでも持っているものだけだが、この町までくる中で役立つ品々だ。

「私は王城に呼ばれた際に自室の整理は終わっております。必要なものは買いそろえると思つていたので、この錫杖以外は持つてきておりません」

確かに、聖職者だからと言つて冒険に慣れているわけではない。まして聖女ということは、小さいころから才能があり、蝶よ花よと愛でられて育てられたのだろう。

「両親への別れはいいのか？」

俺やアルマには縁のない話だが、ヤナはまだ両親が生きていてもおかしくない年だ。両親とのしばしの別れの挨拶なども、命がけの冒険に行くのだから必要だろう。

「私は捨て子で、幼いころから教会に育てられましたので、両親へ別れ挨拶をする必要はありません」

とんでもないことを何でもない顔でサラツというヤナ。

「じゃあ、このまま準備して出発ということでもいいか？」

「ええ」

「はっ」

全員が合意したので、そのまま武器屋に向かう。

この町に來た時に気付いたが、武器屋、防具屋、道具屋が町の出入り口のすぐそばに隣接しているのだ。

「なあヤナ。この町って何で武器屋と防具屋と道具屋が町はずれに隣接してるんだ？」

ヤナはその三店舗の向かいにある大きな建物を指さした。

「あの大きな建物が冒険者ギルドだからですね」

「どうということだ？」

アルマも会話に入れたほうがいいかと思つて、今度はアルマに聞く。

「町の中に冒険者みたいなならず者一歩手前な連中を入れたくないのよ。ちなみに冒険者ギルドは一階が酒場、二階が宿屋を兼ねているわ」

なるほど合点がいった。冒険者である以上、常に武器を持っていることだろう。町の中で他に武器を持つ職業なんて言うのは衛兵くらいものだ。そして、冒険者になる手続きは簡単だ。

ならず者一歩手前のような冒険者が街中で武器を持っていれば、市民は快く思わない。当然のことだ。

「なるほどね」

少ししよっぱい気分になった。

「俺は聖剣があるから武器はいい。二人は？」

アルマもヤナも杖を持っているから、いらないかもしいれない。

「私は自前の杖があるし、いざとなったら煙管でも魔術を発動できるからいらないわ」

「私もこの錫杖がありますから、必要ありません」

二人が要らないなら、武器屋はスルーしていいか。

次は防具屋だ。防具屋には俺も用事があるので入る。

「いらっしやい」

防具屋の中には所狭しと鎧が並べられ、盾が飾られていた。

「革鎧と丸盾を」

聖剣はバスタードソードだ。両手でも片手でも使える。だから、盾を持つ選択はありだと思っ。

金属鎧という選択肢もあったが、アルマやヤナを守ること考えなくてはいけない。そこで

動きやすい革鎧というわけだ。

「勇者様に盾や鎧は必要ないのでは？」

ヤナが鋭いところを突いてきた。歴代勇者の中には聖剣と腰布一枚で魔王討伐を成し遂げた勇者もいる。なぜそんなことができるのか、それは加護によるところが大きい。

聖剣は引き抜いた主を不思議な力の膜で覆い、守っているらしい。それが加護と呼ばれているもので、この加護は魔物の牙や鉄の剣くらいなら傷一つつかない代物らしい。

だが、俺は聖者の右腕を強引につないだだけの偽りの勇者だ。

加護もないわけではないようだが、著しく弱い。投石くらいは耐えられそうだが、これでは弓矢や魔物の牙爪には耐えられないだろう。故に、防具が必要なのだ。

だが、それを素直に話していいものか。俺はアルマとの会話を思い出す。

「いいレイド。聖職者を仲間にするなら、聖者の右腕のことは隠し通すのよ」

聖者の右腕は勇者の墓からこっそり盗み取ってきたものだ。バレればただでは済まない。それが聖剣と勇者を信仰する聖職者にバレたとなれば、その場で襲い掛かれかねない。

「でも、いつかバレるんじゃないか？」

「隠し通しなさい。魔王を討伐して無事帰ってこれたらセパレーション《分離》でジョイン《結合》した聖者の右腕

を切り離して、あなたの腕につけ戻して、聖者の右腕を先代勇者の墓に埋葬しなせるわ」

さてどう乗り切るか。

「加護があっても心配だから、一応革鎧くらいは持つておこうと思ってな。それにアルマやヤナを守るためにも丸盾は必要だろう」

パーティーには役割というものがある。ギルドでは冒険者をタンク、アタッカー、ヒーラー、サポーターの四つの役割に分けている。

このパーティーでいうと、俺がタンク、アルマがアタッカー、ヤナがヒーラーということになる。サポーターはいない。

仲間に敵の攻撃が行かないように一手に引き受けるのが俺の役目だ。それなのに盾を持つていなかったのでは守るものも守れない。

「なるほど、私たちのためにありがとうございます」

ヤナを丸め込み、革鎧と丸盾を購入し、試着室で着ける。

「二人は防具はどうする？」

アルマはローブを、ヤナは白装束を着ているので、鎧は無理だろう。それに魔術師や聖職者はあまり前に出ないので鎧をつけない。鎧をつけるのは前衛が多い。

「私は鎖帷子を買っておこうかしら」

アルマはローブの下に鎖帷子を買っておくようだ。確かに鎖帷子ならローブや白装束の下からでも着られるし、それなりの防御力も見込める。まあ、鎧に比べると防御力は落ちるが、それは利便性が上な分しようがないだろう。

「ヤナも買っておけ」

「は」

ヤナにも勧める。正装だからと断るかとも思ったが、意外と素直に応じた。冒険の危険性がある程度は認識しているようだ。

二人が試着室で着替えを終えて出てくるのを待ち、防具屋を後にする。

そのまま隣の道具屋に入る。

「準備で金を使うとしたらここが最後だろうから、欲しいものがあつたら言ってくれ」
道具屋は薬なども売っている。必要なものも多いだろう。

「水薬ポーションと解毒剤アンチドット、万能薬を三つずつくれ」

万能薬は少し値が張ったが、王からの支度金が多かったため、買えない額ではない。

地図は持っている。ナイフ、ローブ、ランタンもある。

「俺はこれで準備できたと思うが、どうだ？」

「そうね、いいんじゃないかしら」

「はい、問題ありません」

それぞれが自分の荷物を確認しながら言う。

「じゃあ、出発だ！」

俺たちは国境を踏み越え、魔物の領域へ足を踏み出した。

第二章 ぼうけんのはじめ

王国は人間側の最端に位置する国だ。故に王国の国境砦の門をくぐれば、そこから先は魔物の領域となる。

とはいえ、いきなり前人未到の地になるわけではない。過去には勇者が魔王を倒し、魔物の領域を人間の領域に塗り替えたこともあった。

そのときの建造物が壊されずに残っている場所も多々あるし、なにもいきなり常人では太刀打ちできない凶悪な魔物が出るわけではない。

最初に出てくる魔物は村人が棍棒を使って対処できるような魔物が多い。故に、門を出てもしばらくは人間が存在する。

そんな予備知識を思い出していると、俺たちの前に魔物が飛び出してきた。

水色の粘液状の体の中心に、赤い核を持った魔物。

「おっ、スライムだ」

「まあ、ありきたりね」

「私、魔物って初めて見ました」

出発していきなりの魔物との遭遇^{エンカウンター}。だが、俺も二人も冷静だった。なぜなら、このスライム

こそが前述した村人が棍棒で対処できる世界最弱の魔物なのだ。

さすがに初戦とはいえスライムに負けるような勇者では、魔王討伐など夢のまた夢だろう。

俺は静かに聖剣を抜き、スライムと対峙する。

さすがに二人も俺が勝つと思っっているのか、応援するでも戦闘に参加するでもなく俺とスライムに視線を向ける。

スライムが俺の敵意に気づいたのか、勢いよく地面を蹴り（足はないのだが）飛びつこうとしてきた。

俺はそれをカウンターで斬りつける。

粘液をたやすく切り裂いて核まで一刀両断できた。

聖剣に粘液がべったりついていていたが、俺が拭き取るのやだなあ……などと思っている間にジュワツと音を立てて粘液が蒸発した。

「聖剣は魔物の血や体液のせいで切れ味が落ちることはないそうです」

ヤナが解説してくれる。

「便利だな。メンテナンスの必要がないのか」

引き抜いた時と何ら変わらないかのように、綺麗なままの聖剣を鞘にしまう。

「ですが、聖剣は人間に対しては普通の剣と変わらないそうです」

「あくまで魔物に対して特攻ってことか」

元々、魔物を倒すための剣だし、仮に勇者が人間と敵対してもそれほどの脅威にならないための措置だろう。

そのままうつつすらと人の気配のする道を進んでいく。すると、いかにも魔物が潜んでいそうな洞穴があった。

「俺立ちの目的は魔物を倒すことではなく、魔王を倒すことだが……どうする？」

「無視して進みましょう。どうせこんなところにいる雑魚を倒しても実験材料にはできないわ」
アルマは即答だ。自分の利益のことしか考えていないのがまるわかりだが、実験第一というのはアルマらしいといえづらい。それに、アルマの研究で救われた人だって大勢いるはずだ。だから、俺はアルマを責めることはしなかった。

「倒しましょう。ここは国境からも近いですから、ここで倒しておけば人々のためになります」
ヤナはあくまで人々のために魔物は倒していくスタンスをとった。確かに、魔物が生存できているということは、人間が餌になっているか、魔物同士で共食しているかの二択になる。そして、これだけ人間の領域に近ければ、自分たちの同胞である魔物を倒すより、通りかかる人間を倒すほうが手軽で簡単だ。

「レイドの意見で決まるわね」

三人だから多数決ができる。俺の一票でこれからの旅の方針が決まるわけだが、俺の答えは最初から決まっていた。

「魔物は可能な限り倒して進もう」

アルマもヤナも意外そうな顔をした。アルマはわかるが、まだお互いのことをそこまで知らないヤナにまで意外そうな顔をされるのはなぜなんだろうか。

「理由は？ まさか人様のためにくなんて言わないわよね？」

「あなたには急ぐ理由があるんだから」と言外に言われているような気がした。

「俺たちは、魔物について知っていることが少ない。魔物が戦術をとるようなら、それを知りながら進むほうが魔王対策になるかもしれない」

それに、と俺は続ける。

「自分の命が掛かっているからと言って、他人を見殺しにするような奴にはなりたくない」

アルマがため息を吐く。

「勇者気取りもいいけど、目的を見失わないでね」

アルマが言外に「あなたは本物の勇者じゃないんだから」と俺にだけわかるように伝える。

「ああ」

俺たちは洞穴の中に足を踏み入れた。

「ヤナ、明かりを頼む」

アルマでも火は出せるだろうが、洞穴は酸素が薄い。酸素が薄い場所では火がつかないだけでなく、運が悪ければ自分たちまで酸欠で死ぬ恐れがある。ゆえに、聖職者の奇跡の定番だ。

「ホーリーライト
《聖光》」

ヤナの奇跡により、錫杖を中心に光が生まれる。すると、光に反応するかのよう洞窟の中から魔物が湧いてくる。

緑色の小さな身体、ボロい布で下半身を申し訳程度に覆い、粗末な武器を持っている。

「ゴブリンか」

スライムと同じ弱い魔物の定番だが、スライムと違いこちらは一度に出てくる数が多い。

俺一人ではすべて倒し切るのは難しい。だから、仲間頼る。

「ヤナはこのまま明かりを維持。アルマは火以外の魔術で攻撃！」

この洞穴に最初から明かりが灯されていなかったということは、ゴブリンは暗い場所でも物が見えるのだろう。明かりを消すのはこちらにとって不利でしかない。

前述したとおり、俺の役割はタンクだ。俺は盾を主体にゴブリンに立ち向かう。この狭い洞穴の中では聖剣は少し振り回しづらいし、今回に限って言えば俺は仲間の元に敵がいかないように守りつつ、アルマが攻撃しやすいように抑えていれればいい。

なぜなら、このパーティーのアタッカー、最高戦力は俺ではなく、アルマなのだから。

《《ライトニングスライク
雷 撃》》

俺が狭い洞穴内で抑えていたゴブリンを皮切りに、洞穴の中から続々と湧き出てきていたゴ

プリンたちが一撃で全滅させられる。俺は抑えていたゴブリンを見た。腹部に大きな穴が開いており、穴の周りが炭化していた。

「凄いな。なんだ今の魔術は」

「ライトニングストライク雷 撃」。雷属性の魔術で、一直線に障害物もろとも貫くわ」

さすがに何百年も生きて魔術の研究をしているだけあって、ゴブリン程度の魔物では何十匹集まろうとアルマの敵ではないらしい。

「ヤナもよくやってくれた」

陰の功労者であるヤナにも労いを忘れないようにする。

「これからどうしますか？」

ヤナが《ホリーライト聖光》の明かりを調節しながら近づいて聞いてくる。

「もう少し進めるか？」

時計は高級品なので、王侯貴族以外は持っていない。普段なら日の高さでどの程度の時刻か判断するのだが、今は洞穴の中だ。

「そうね、まだ野営の準備には早いんじゃないかしら」

アルマの腹時計を信じるとして、この洞穴の中をさらに奥に進むべきか、戻って道を進むべ

きか。おそらくゴブリンはさつき向かってきたので全部だろう。残っているとしたら、奴らが貯めたもの。宝か、はたまた人間の骨か。

「じゃあここを出て道に戻ろう」

俺たちは宝が目的でゴブリンを殺したわけじゃない。それに、ゴブリンが貯めた宝じゃそんなに高くは売れないだろう。わざわざ次の町まで持ち歩くのも面倒だ。

「アルマ、この先に生存者は？」

「ディテクション
《探知》」

アルマが魔術を使って調べる。だが、もし生存者がいたらどうする？ この先の旅をしばらく同行させて近くの町で保護してほしいところだが、この洞穴に拉致されているということはおそらく王国の国境から出てきた人間だろう。

この辺りを行き来する人間は騎士や戦士といった戦闘のプロではなく、ただの村人や商人が大半だ。もう数日行けば町があるが、そこまで守り切れる自信もない。町まで守りきれたとしても、今度は王国の国境まで戻ってこなければならぬ。今度はさらに魔物の領域の深くなので、護衛を雇うことになるだろう。だが、ゴブリンに襲われたということはおそらく一文無し。そこから見知らぬ町で稼ぐのが、どれだけ大変なことか。

「生存者はいないわね」

生存者がいないと聞いて、安心してしまった自分がいたのがショックでたまらなかった。見透かすようなヤナの視線が背中に刺さる。

「そうか、じゃあこの洞穴を出て、元の道に戻ろう」

そそくさと洞穴を出ていくのが嫌だったので、盾の具合を見るフリをしながら歩く。新品だった盾には表面に小さな傷ができていたが、盾というのは傷ができてなんぼのものだろう。

洞穴を出て空を見上げると、空はまだ赤く染まっただけではなかった。まだいけそうだ。

「さて、進むか」

しばらく進むと、上空から炎のブレスが降ってきた。

アルマは優秀な魔術師だ。攻撃に気づいていれば《抵抗》レジスタンスで魔術に抵抗できるだろうが、この時アルマは頭上からの攻撃に気づいていなかった。

「散開！」

アルマは自力で回避するだろうし、殺しても死なないだろうからヤナを片手で抱えて地面を転がる。

俺はただの戦士だ。アルマは魔術師だから近接戦が苦手なように、魔術を使えず、弓も持つ

ていない俺は上空への攻撃手段を持たない。

草むらに突っ込んで視線を切り、上を見上げると、皮膚の翼をもった灰色の竜がこちらを見下げていた。属に飛竜フイバリンと呼ばれる最下級の竜だ。

しかし、最下級とはいえど竜。弱い魔物の中では頂点に位置する魔物だ。

「ヤナ、アルマ無事か？」

小脇に抱えていたヤナを開放し、プレスをもろに受けたアルマを見る。

爆風が晴れ、アルマのいた場所には風の盾ができてアルマを守っていた。

「やってくるわね。《雷ライトニングストライク》」

アルマが魔術を使うが、飛竜フイバリンに容易く避けられる。アルマは《雷ライトニングストライク》を雷の魔術だと言っていた。

つまり、光速で放たれていることになる。飛竜（ワイバーン）だって竜とはいえ魔物。魔物とはいえ生物だ。光速で動いているとは考えにくい。

つまり、飛龍フイバリンはアルマの予備動作を見て避けたのだ。

「アルマ、必中の魔術はないのか！」

俺が戦闘に参加できない間にも、アルマと飛龍フイバリンの戦闘は白熱していた。

「あるにはあるけど、魔術の同時発動には時間がかかるし、手間もあるのよ」

もし、アルマが必中の魔術を使ったとしても、必中で攻撃するには次の攻撃魔術が必要になる。

魔術の連続発動はアルマに負担がかかると、そういうことなのだろう。

「なら、俺の聖劍に必中をかけてくれ」

俺は草むらから飛び出し、飛竜ワイバリンの背後を突く。

「必中は飛び道具じゃないと意味がないわよ？」

アルマの質問に俺は視線で返す。アルマはいつもの落ち着きを取り戻し、クスリと笑って見せた。俺としては「信じろ」とか「早くしろ」と言った視線だったのだが、アルマにはどう伝わったのだろう。

「《必中》」
ヒッティング●ザ●ターゲット

要望通りに聖劍に《必中》が付与される。俺はその聖劍を飛竜ワイバリンに向かって思いつき

り投擲した。

投げる動作が見られたのだろう。飛竜ワイバリンは素早い動作で躲すが、《必中》の効果に

より、飛竜ワイバリンに躲された聖劍はブーメランのようにありえない軌道で曲がり、油断していた……

いや、油断せずにこちらを注視していたがゆえに飛竜の背中に突き刺さる。

ヤナが何か言いたそうにしているのを尻目に、俺は痛みで高度が低くなった飛竜に飛び乗り、聖剣を捻る。

飛竜が悲鳴を上げ、墜落する。俺は素早く聖剣を引き抜いて、アルマの魔術で巻き添えにならない範囲まで逃げる。

「アルマ！」

名前を読んだだけで全てを理解したアルマが、魔術を発動させる。

「《爆撃》」

アルマの魔術により、飛竜を中心に凄まじい爆発が起こる。俺は咄嗟に伏せて爆風を回避するが、それでも顔面に熱い空気がぶつかってきて目を開けていられなかった。

爆風が納まったのを肌で感じ、目を開けると、飛竜は既に事切れていた。それでもなんとか形を保っている飛竜の死骸に近く。

「これでも原型を保っているなんて、凄いな飛竜」

アルマは少し消耗したのか、肩で息をしながら飛竜を見ている。

アルマが弱いわけではない。本来なら、飛竜は冒険者ではなく、騎士団が討伐するような魔

物だ。

それを三人で倒したのだから、誇っていいことだろう。

「すみません。私は何も活躍できませんでした」

草むらからヤナが這い出てきて、頭を下げる。

「いや、また何か機会があるだろう。その時は頼む」

欲を言えば最初の飛竜のブレスに気づいて障壁を張ってほしかったが、ヤナは戦闘の経験なんてないだろうし、理想を押し付けるのはよくない。もしかしたら旅を続けるうちにできるようになるかもしれないし。今はそれよりも大事なことがある。

「飛竜フライングが出てくるのはまだ先だと思っていたが……」

本来なら、ここはまだ村人が一人で出歩けるような、魔物の領域の入り口だ。もちろんそれなりに危険はあるし、魔物の生態系なのだからイレギュラーもあるだろう。

だが、タイミングが良すぎる。まるで俺たちが魔王討伐に動き出したから手近にいた強い魔物を動かしたかのようだ。

まあ、それは考えても答えが出るわけではない。

「素材を剥ぎ取るか」

スライムやゴブリンと違い、飛竜フイバクは普通の人間には狩れないそれなりに希少な素材だ。聖剣で鱗、牙、皮を剥ぎ取り、袋に入れる。

残ったのは、肉。ちょうどお腹もすいた。

「ここで野営にしようと思うが、どうだろう？」

「そうね、ちょうど食料もあるし、いいんじゃないかしら？」

「いいと思います」

満場一致ということ、ここで野営することになった。俺がテントを張り、アルマが石を組み合わせて竈を作り、ヤナが料理を担当する。

「テントは二つでいいか？」

男女別は当然として、アルマとヤナの中がどれほどまで進展したかはわからないが、そこまでは良くなっていないだろう。

「私は構わないわよ？」

アルマが自信たっぷりと言う。おそらく誰とでも仲良くできる自信があるというよりは、だれが一緒でも自分勝手にやるという自信だろう。

「私は三つがいいです」

ヤナは正直だ。

「じゃあ三つにするか」

別に手間が少し増えるだけだし、アルマと同じテントにして問題が起きて、仲が悪くなっても後々困る。

テントを張り終わると、食事を始める。今日のメニューは飛竜フイバリンの肉と、スープ、ドライフルーツだ。新鮮な野菜は旅には不向きなので、持ってきていない。もし新鮮な野菜が食べたいのなら、近くの町まで行くか、そこら辺の雑草を摘むかしかない。

まずは飛竜フイバリンの肉に齧り付く。聖剣で雑に斬って塩胡椒を振って焼いただけだが、美味い。

「美味しいな」

「そうね、美味しいわ」

日頃から豪華なものを食べているであろうアルマのお眼鏡にも叶ったらしい。

「アルマって日頃から良いものを食べているのか？」

「そうね。お金はあったから、一般庶民から見ると良いものを食べていたかもしれないわね」

ヤナもモグモグと飛竜フイバリンの肉を頬張っているが、聖女も何か特別なものを食べていたりするのだろうか。

「ヤナはどんな暮らしをしていたんだ？」

ヤナは食べるのを止め、口の中のものになくなってから話す。

「大体毎日がお祈りと勉強の日々でしたよ」

「いや、そういうんじゃないくて、聖女だからアルマみたいに良いもの食べてたのかな〜と思つて」

俺の質問に、再び肉にかぶりつこうとしていたヤナの手が止まる。

「教会の聖職者は皆平等です。どんな身分の人でも、皆同じものを食べます」

「そうなのか」

少し意外だった。

みんながお腹いっぱいになる頃には、飛竜ワイバの身体の半分の肉が失われていた。

「残った分、どうする？」

「ここに捨てておけば良いんじゃない？ きつと野生の魔物が食べに来るわよ」

「教会では、貴重な食料を無駄にしてはいけないという教えでしたが……」

ヤナも流石にこの量の肉を持ち歩くのは不可能だとわかっているらしい。言葉を濁した。

「止むを得ん。ここに捨てていくことにしよう」

その後、俺たちは別々のテントで眠りについた。

第三章まよなかのしかく

「レイド！ 起きなさいレイド！」

眠っていると、アルマが揺らしてくるので目が覚めた。

「なんだよ。見張りの交代はまだ先だろう……」

眼い目をこすって起き、テントを出ると、そこにはヤナが縄で拘束されていた。

「どういう状況？」

俺はアルマに説明を求めろ。

「この娘、あなたを暗殺しようとしてたのよ」

「私はそんなことしておりません！」

ヤナは容疑を真っ向から否定する。

「アルマは何でヤナが俺を暗殺しようとしてると思ったんだ？」

俺は裁判を開くことにした。もちろん俺が裁判長だ。

「なんでも何も、夕食のスープに睡眠薬を盛って、レイドを暗殺しようとテントを抜け出しているのを見たのよ！」

確かに、夕食を食べた直後に眠気が襲ってきたのも事実だ。

「なら、なんであなたは大丈夫なのですか！」

縛られたままのヤナが気丈に反論する。

「私に毒や薬の類は効かないのよ」

アルマが得意げに答える。アルマは何百年も生きている。その中で耐性を手に入れたというのはありえそうな話ではある。

「アルマは《ディテクション看破》の魔術は使えるか？」

「貴重な魔術を使うよりもいい方法があるわ」

アルマは荷物袋から酒瓶を取り出した。

「ちよっ、やめっ——」

嫌がるヤナに無理やり酒を飲ませる。

「酔えば口が軽くなるでしょ」

酒瓶一本分の酒を飲んだヤナは顔を真っ赤にしていた。酔っている証拠だ。

「こんなんでもうまくいくのか？」

しばらく待っていると、ヤナは縛られたままであるにもかかわらず、二本の足ですつくと立ちあがった。

「うおおおおお!!」

ヤナのイメージからは想像もつかない雄叫びを上げて俺に突進してくる。思いっきり頭突きが俺の腹に入るが、ヤナは体重が軽い。筋力もそこまではないので正直そこまで痛くはない。

「どうだあ？ 参ったかあこの大罪人啊!!」

聖職者に大罪人と呼ばれる謂れは一つしかない。

「ヤナ、お前まさか聖者の右腕のことを……」

「当然知っている。王様もだ。だが、偽りとはいえ聖剣を引き抜いた勇者に違いはない。処罰に困った王様は冒険の末に死んだことにするために私を送り込んだのだ！ この重大な任務に抜擢された私は優秀だ！ どうだ、凄いだらう!？」

そこまで言うと、ヤナは糸が切れた操り人形のように眠りに落ちた。

焚火を囲んでアルマと向かい合う。アルマの片隅には酒を飲んで気持ちよさそうに寝ている

縛られたままのヤナの姿があった。

「それで、これからどうするの？」

アルマが聞いてくるが、俺だってどうすればいいか分からない。王国に戻るには進みすぎた。それに、国王も聖者の右腕のことを知っているとすれば、王国に戻るのは悪手でしかない。

「このまま進むしかない……か」

アルマも俺と同じ考えに至ったようだ。

「アルマ一応聞いておくが、ヤナに呪いをかけて無理やり言うことを聞かせることはできるか？」

アルマは魔女だ。呪いの類は得意分野だろう。

「できなくはないけど、彼女は聖女だから、解除されるかもしれないし、耐性がある可能性もあるわね」

確かに、呪いの解除は聖職者の得意分野だ。

「素直に話して、分かってもらうしかないか」

翌朝、ヤナのうめき声で俺は目を覚ました。

「うるさいぞ、ヤナ」

テントから出ると、縄で拘束され、俺たちの安眠のために猿轡をされたヤナが芋虫のように地面を這いずっていた。逃げ出さないように縛っておいたのだが、このまま王国まで戻るつもりだったのだろうか。

何か言いたそうな顔だったので、猿轡をとってやる。

「どういうつもりですか！ なぜ私がこのような辱めを受けなければならないのです!？」

「お前が俺を始末しようと王から送られてきた刺客だからだ」

俺が昨日酔っ払ったヤナに聞いたことをそのまま告げる。

「なぜ、それをつ……!!」

ヤナは愕然とした顔で驚いた後、何やらぶつぶつとつぶやき始めた。

「まさか、王国内に内通者が……」

どうも話が噛み合っていない。まさか昨日自分で全部ゲロったことを忘れてるんじゃないだろうか。

「朝から騒がしいわね」

寝起きのアルマがテントから出てくる。

「ヤナまさか、昨日の夜のこと覚えてないのか？」

「昨日？ 何のことですか？」

やはり覚えていなかった。

俺は、昨日ヤナが俺を暗殺しようとしたこと、暗殺に失敗しアルマに捕まったこと、酒を飲まされて全て話したことを打ち明ける。

「まさか……そんな、私が打ち明けてしまうなんて……」

ヤナがガックリと地面に膝をつく。

「そこでだ。聞いてもらいたいことがある」

「あなたが何と言おうと、大罪人に情けをかけることはありません」

ヤナが冷たい声で言うのを無視して、俺は上半身裸になる。

「殺す前に私の身体を味わおうと言うわけですか？」

ヤナはゴミを見るような目で俺を見て、自身の身体を掻き抱くが、もちろん俺にそんなつもりはない。

「それは……」

ヤナが言葉を失う。

俺の上半身は蛇の刺青を入れたかのように黒い曲線が入っていた。

「刺青……いえ、呪いの類ですか」

ヤナは数瞬で見抜いた。さすが聖女というところだろう。

「俺は魔王に呪われていてな」

俺は辺境の小さな村で生まれた。そこは少し特殊な村で、先代勇者の末裔がひっそりと暮らす隠れ里だった。隠れていたのはもちろん、魔王に狙われるからだ。勇者の子孫だからといって聖劍を引き抜けるわけじゃない。だが、魔王からしてみればそんなことは関係なかったのだろう。

魔王の復活とともに、村は焼かれ、村の人々は皆殺しにされた。

唯一生き残った俺は、命からがら逃げ伸びたが、魔王の呪いを受け、ジワジワと命を削られている。

俺の昔話をヤナに話している最中、ヤナは意外にも静かに聞いていた。

「それが本当だとしたら、あなたは先祖の墓を荒らし、右腕を切り落としたということになり

ますが？」

「その通りだ。だが、俺も生きるために仕方なかったんだ。分かってくれとは言わない。だが、俺にも事情があったということは覚えておいてくれ」

言いたいことだけ伝え、俺は上着を着直す。テントに戻ろうとする俺の背中に、ヤナの声が響いた。

「私 はあなたを命がけで庇ったりはしませんから！」

ヤナがどんな顔をしているのか気になった俺は横目でちらりと見る。

ヤナは目を瞑って祈りを捧げているようだった。

テントを畳み、出発の準備をする。

「レイド、ちよっと」

アルマがレイドを木陰に引っ張っていく。

「なんだよ」

アルマが視線で誘導する。アルマの視線を追うと、その先にはヤナがいた。

「ちゃんと話したの？」

「ああ」

俺の理由を一方的に話したただけだが、話すべきことは話した。

「納得してくれた？」

「……いいや」

おそろく納得はしてくれていないだろう。

「連れて行って大丈夫なの？」

「分からないが、着いてきてはくれると思う」

命がけで庇うことはしないということは、この旅に同行してくれるということだろう。実際、

ヤナも身支度を整えている。

「そう、ならいいけど。くれぐれも後ろから刺されないようにね」

アルマに肩をたたかれ、励まされるが、俺はアルマも実験に失敗したら後ろから刺されるん

じゃないかと内心思っている。

これは、俺が仲間を信用していないってことなんだろう？ でもなあ、このメンバーだし

なあ……。

テントを片付け、身支度を整えた俺たちは、旅を再開することにした。スライムを片づけ、ゴブリンを一掃し、飛竜^{ワイバーン}を協力して倒すこと三日。俺たちは魔物の領域と人間の領域のちょうど中間に位置する街に到着していた。

「やっと着いたわね」

「疲れました」

珍しくアルマとヤナが弱音を吐いている。俺も同意だ。

ここまで、新しい魔物は出現しなかったものの、スライムやゴブリン、飛竜^{ワイバーン}の応酬を受け、まともに休むこともできなかった。

だが、ここは城壁に囲まれた町だ。宿もあるのでゆっくりとベッドで休むことができる。飛竜^{ワイバーン}の鱗と牙もたつぷりと剥ぎ取れた。いくらで売れるか楽しみだ。

城壁を超えた俺たちはまず宿をとった。今夜はゆっくり寝たいので、一人一部屋だ。

「じゃあ、荷物を置いたら俺の部屋に集合してくれ。今後の予定を話す」

「了解よ」

「分かりました」

部屋に入り、荷物をほどこいた俺は、ベッドに腰を落ち着けた。

「ふう……」

一息ついていると、ドアがノックされる。

「開いてるぞ。入ってきてくれ」

アルマとヤナがドアを開けて入ってきた。

「二人とも一緒とは珍しいな」

「私がレイドの部屋に来たら、扉の前にこの娘がいたのよ」

アルマがヤナを指さして答える。

「あなたと個室で二人きりなんて、何が起こるか分かりませんので」

まだヤナは俺のことを信じてくれない様子だが、ちゃんと会議に顔を出してくれるということは、魔王討伐に関してはそれなりに協力する気はあるのだろう。

この部屋には椅子が一つしかないので、俺が床に座り、アルマがベッドに腰かけ、ヤナが椅子に座る。ちなみに、最初はヤナにベッドを勧めたが「押し倒されそうなので、遠慮します」と断られた。なんでじゃ。

気を取り直して作戦会議を始める。

「単刀直入に言うと、仲間を増やそうと思う」

「そうね」

「賛成です」

前述したように、パーティーメンバーは四十人程度が望ましい。あまり大所帯になってもよくない。連携が複雑になるし、食料や資金、装備にも限りがある。

かといって少なければいいかというとそれも違う。野宿する際に、見張りを立てる必要がある場合、パーティーメンバーが多いほうが睡眠時間を多く確保できるし、一手一手で取れる選択肢も増える。

だが、三人はパーティーメンバーの平均から見ても少ない。もう少しくらい人数を増やしても問題ないだろう。

問題は、誰を加えるかだ。魔王討伐は名誉なこと、成功報酬も称号も思いのままだが、その分リスクがある。ハイリスクハイリターンなのは冒険者の常だが、そんなギャンブラー揃いな冒険者たちでさえ臆してしまうのが魔王討伐だ。

「とりあえず明日まで宿泊して、その間に募集をしましょうか」

ヤナの意見に俺とアルマは賛成し、パーティーメンバー募集の張り紙を作ることにした。

「ところで俺、字書けないけど二人は書けるのか？」

アルマが机に紙とインクと羽ペンを準備しているので、先に自己申告しておいた。

「いいわよ。私が書いてあげる」

アルマがヤナを退かして椅子に座り、机に向かう。サラサラと流れるような筆遣いで紙にペン先を滑らせるその姿は、とても美しく、さまになっているように感じた。

「できたわ」

アルマが自慢げに渡してくる紙には、解読不能な文字列がびっしりと書かれていた。

「これ何語だ？」

アルマが渡してきた紙を逆につき返す。アルマはしばらく眺めた後、得意げに語りだす。

「これは古代語ね。かつて栄えていたとされる古代文明で使われていた言語で、今の私の研究対象よ」

どうやら自分の研究している言語で書いてしまったらしい。俺は頭に手を当てながらアルマの古代語で書いたパーティーメンバー募集用紙をクシャクシャにしてごみ箱に投げ捨てた。

「というわけで、お前だけが頼りだ。ヤナ、頼む」

俺はアルマを退かしてヤナを椅子に座らせる。

「仕方ありませんね」

ヤナは新しい紙にインクを付けた羽ペンを滑らせる。そこには、王国語でちゃんとした募集要項が書かれていた。

「これでいいですか？」

「そう、これだよこれ！　ありがとうなヤナ」

ちょうどいい位置にヤナの頭があつたので、撫でようとすると、バシッと手で弾かれた。

「気安く触らないで下さい」

まだ懐いてはくれないらしい。

「じゃあ俺は冒険者ギルドの掲示板に貼ってくるから、二人は自由行動だ」

俺は部屋を出て、この町の冒険者ギルドに向かった。

第四章 あらたなるなかま

冒険者ギルドは宿屋の隣にあるので、どんなにこの町を知らなくても迷うことはない。

冒険者ギルドのドアを開けると、ゴロツキ達が俺のほうををじっと睨むが、人睨みすると興味をなくしたようにまた酒を飲んだり、賭けに興じたり、依頼の貼ってある掲示板を見たりし

ている。

俺は受付にパーティーメンバー応募用紙を持っていく。

「これを今日と明日の二日間、ギルドの掲示板に貼りだしてもらいたい」

受付嬢は内容を確認した後、料金を提示してきたので料金を払い、掲示板の一番見目に入る真ん中あたりに貼っておく。

そのままギルドを出ていこうとすると、ガシッと肩を掴まれた。

後ろを振り返ると、帽子を目深にかぶった女性が俺の肩を掴んでいた。

「何か用か？」

「魔王討伐に行くために勇者パーティーを募集しているんだってね」

「どうやら、貼りだしてすぐに内容を読み、飛びついてきたらしい。」

「そっだが」

女性はにやりと笑い、帽子の端を人差し指で持ち上げる。

「ちよūdょよかったね。あたしがパーティーメンバーになつてやるよ」

「そうか。じゃあ俺の仲間が宿泊している施設で面接をする。ついてきてくれ」
女性と隣の宿屋に移動する。

「早速希望者が見つかったぞ」

俺は自分のとつている部屋の扉を開ける。予想通りそこには出発前と同じ場所にアルマとヤナが座っていた。

「そう、幸先いいわね」

「まだ分かりませんよ。実力が伴っていないければ魔王討伐はできません」

アルマはポジティブというか樂觀的、ヤナはネガティブというか慎重な答えた。

「じゃあ面接を始めたんだが、いいかな？」

俺の後をついてきた女性に問いかける。

「ああ、いつでも構わないよ」

自信たっぷりというか、自分が落ちるときのことなんて、微塵も考えていない感じだ。

「俺は質問をする。アルマは書記を。ああ、ちゃんと王国語でな。ヤナは《看破（ディテクション）》の奇跡で嘘を吐いていないか見破ってくれ」

素早く支持を出し、ベッド腰掛ける。

「じゃあ自己紹介を頼む」

女性はふんぞり返って高らかに言う。

「ミンク・アレステル。職業はティマー。歳は十六。目標はあたしを馬鹿にしたやつらに、あたしと仲間たちの力を見せつけてやることだ。これからよろしく頼む」

ミンクは自信たっぷりに言う。まるでもう仲間になるのが決まっているかのようだ。自分が審査される側というのを理解しているのだろうか。

「じゃあ城壁の外に出て、実戦形式でミンクの実力を見せてもらおう」

「ああ、望むところだ」

どうやら、よほど自信があるらしい。

宿屋を出て城壁を超え、町の外の草原までやってきた。

「とりあえず俺が相手をする。全力でこい」

俺は聖剣を抜き放つ。

「ああ、それじゃいくよ！」

ミンクは右手に鞭を、左手に召喚石を取り出すと、召喚石を勢いよく地面に叩きつけた。召喚石が粉々に砕け散り、召喚石の中に封じ込められていた魔物が召喚される。

「来い、あたしの仲間たち！」

呼び出されたのは粘液状の身体に、赤い核を持つ魔物。スライムだ。魔物の中で一番弱い、村人が棍棒で倒せる、最も見慣れた魔物。だが、数が尋常ではない。砕けた召喚石からワラワラウジャウジャと出てきて、今では三〇匹を超えそうな勢いだ。

「なるほど、数で押す作戦か。だがー」

俺は聖剣を正面に構え、力を引き出す。俺も今までの戦闘で、かなり聖剣の力を引き出せるようになった。

聖剣が光り輝き、俺の魔力が聖なる力に変換される。

「ホーリーアタック
《聖撃》」

聖なる光によって、スライムが一気に浄化される。

「あああ！ あたしの仲間たちが!!」

ミンクが愕然とした顔で、膝を折る。

「物量作戦は良かったが、俺には効かない」

聖剣を地面に突き立て、少し格好つける。

「さて、次を見せてもらおうか。まさかこれで終わりじゃないだろう？」

ミンクの方を見ると、何やらブツブツと上の空でつぶやいていた。

「……くも」

「くも?」

「よくもあたしの仲間をおおおお!!」

ミンクは接近して鞭を振るってくる。だが、正直そこまで使い慣れているようには見えない。俺は聖劍に鞭を巻きつかせ、動きを封じてから足払いで地面に倒す。

「ぐあっ!」

鞭が巻きついたままの聖劍の切っ先をミンクの喉元に突きつける。

「そこまでだ」

「ひぐっ……ひくっ……」

ミンクは泣いていたが、それを追求するのは酷だろう。聖劍を喉元から離すと、ミンクは自力で立ち上がり、身体についた土を払う。

「鞭を返してくれ」

ミンクからの頼みに、俺は聖劍にぐるぐる巻きになっていた鞭を解き、まとめて渡す。

鞭をひったくるように受け取ったミンクは、そのまま城壁に消えた。

「まだ合否も伝えていないのに」

「自分でも分かっているのでしょう。合格はあり得ないと」

今回ばかりはヤナの意見に賛成だった。あれではこれからの厳しくなる魔物との戦いに着いていけないだろう。

だが、俺には気になることがあった。あの鞭が聖剣でも斬れなかったこととミンクがスライムしか召喚獣を使役していなかったことだ。聖剣で斬れないほどの高級品を持てるほど実力があるようにも、裕福なようにも見えなかったが。

俺たちも城壁を越え宿屋に戻ったが、俺の疑問は膨らむばかりだった。

翌朝、俺は再び冒険者ギルドを訪れていた。フードを目深にかぶり、俺とは分からないようにしてある。聖剣も布を巻いてあるから、俺が勇者だとバレる心配もないだろう。

怪しむ視線が突き刺さるので、一先ずテーブルに腰掛ける。しばらくすると、ミンクが冒険者ギルドにやってきた。

ギルド内を進むミンクに、テーブルに腰掛けたゴロツキが足を引っ掛ける。

「あぐっ!？」

ミンクは気付かず、モロに転けた。

「あゝあ、痛ってえな。ミンクお前また俺の足につまづきやがって」

ミンクは言い返すことなく、すつくと立ち上がる。

「おいテメエ、慰謝料よこせ」

ゴロツキの大きい手がミンクに金をせびるが、ミンクは無視して掲示板に向かおうとする。しかし、ゴロツキの大きな手がミンクの頭を掴む。

「聞いてんのか？ ああ？」

流石にそろそろ見過ごせないだろう。勇者の時間だ。

「やめないか」

俺はテーブルから立ち上がり、二人の間に割って入る。

「なんだ、お前が立て替えてくれるのか？」

見たところかなりの実力者のようだが、ギルドで燻っているということとは、素行が悪くて依頼を任せてもらえないのだろう。こういう腕が立つだけのゴロツキは各冒険者ギルドに一定数いる。

「いいだろう。ただし、俺に勝つたらだ」

ゴロツキの顔がニヤリと歪むのが見えた。こういう輩は必ず乗ってくる。

「外に行こうぜ」

冒険者ギルドから出た外の道で、俺とゴロツキは向かい合っていた。隅ではミンクが様子を見ていて、その周りに野次馬が集まってきている。

「行くぜ！」

先に動いたのはゴロツキだ。そもそも、まだ開始の合図を何にするのかも決めていないのだが、それが狙いだろう。先手を確実に取るためのイカサマギリギリの手だ。

見たところ、ゴロツキの職業は武闘家だろう。武器を持たず、自身の身体で戦う職業だ。武闘家と戦うときの定石は、近づかせないことだ。武闘家には遠距離攻撃の術がない。魔術や奇跡で遠距離から一方的に倒すのが必勝法だが、俺は魔術も奇跡も使えない。よって俺が攻撃するにも近づく必要がある。

ただし、俺の方が聖剣の分リーチが長い。俺はゴロツキの拳を躲し、勢いそのままに聖剣をゴロツキの首に叩き込む。ゴロツキはそのまま気絶した。

聖剣は鞘に収めたままの上、布を巻いてあるので、命を奪ったということはないだろう。

「助かったよ、ありがとな」

俺の勝利を見たミンクが礼を述べる。

「いいや、お前のスライムを全滅させてしまった詫びだ」

俺はフードを取り、顔を晒す。

「……なんだ勇者さんかい」

ミンクは肩を落とした。なんでだよ。

「失望しただろう？　こんなんじゃ勇者の仲間なんて夢のまた夢だよな……」

俺が見るに、ミンクは決して強くはない。だがそこまで弱いようにも見えない。問題はスライムしか使役していないことだろう。

「お前の話を聞かせてくれないか？」

俺たちはギルドに戻り、テーブルに着くと酒を注文し、ミンクの昔話を聞くことになった。

ミンクの父はかなり名の知れたティマーだった。ドラゴンをもティムすることができたという。ミンクの持つている鞭はそのドラゴンが死んだ際、その亡骸で作ったものらしい。ミンクもティマーを目指したが、そこまでの魔物はティムできず、唯一ティムできた魔物がスライムだった。落ち込んでティマーの道を諦めようかと悩んでいた時、父から励まされ、ティマーを目指し続けることにしたのだという。

正直、その父親もミンクがまだ子供だったからテイマーの道を諦めるのを止めたのだと思う。十六になつてもスライムしかタイムできず、それでもテイマーを目指していると知ったら流石にほかの職に就くように言うだろう。

何を言うべきか分からず、酒をちびちびと飲んで時間を稼ぐ。

「お前はまだテイマーでありたいのか？」

まず重要なのはそこだろう。過去に縛られて動けないのでは話にならない。

「もちろんだ」

ミンクの目は揺らいでいない。決意は固いか。

「なら、普通のテイマーになるのは諦めたほうがいいな」

ミンクの肩がビクンと震える。きつと俺がテイマーになるのをきっぱりやめろと言うと思つたのだろう。だが、俺が言いたいのはそうじゃない。

「基本的にテイマーはタイムした魔物の力で戦う。だが、ミンクがタイムできるのはスライムだ。だから——」

「ちよつ、ちよつと待つてよ」

俺が話し続けるのをミンクは強引に止める。

「なんだ？」

俺が言うと、ミンクは狼狽える。俺が怒っていると思っっているのだろう。

「なんでそこまでしてしてくれるんだよ？」

俺はできるだけ優しく答える。

「仲間のために力になるのは当然だ」

ミンクはきよとんと頭に？マークを浮かべた。

「着いてくるんだろ？ 魔王討伐」

「いつ、良いのか!？」

「仕方ないだろ」

あの冒険者のリーダー的存在であろうゴロツキからミンクを庇った時点で、この町の冒険者全員を敵に回したようなものだ。もうミンク以外の冒険者は着いてきてくれないだろう。俺はミンクを実践で役に立つレベルまで鍛えるしかなかった。

「ありがとうございます！ 師匠!!」

どうやら俺に弟子ができたらしい。

掲示板に貼ったパーティーメンバー募集要項を引っぺがして宿屋に戻る。

俺の部屋にミンクを入れ、両隣のアルマとヤナの部屋をノックする。

二人は俺からの合図だと理解し、すぐに俺の部屋に来てくれた。

「で？　なんでまたその娘な訳？」

アルマが不気味にほほ笑む。昔からこんなにもおどろおどろしい奴だったのだろうか。

「まさか仲間にする気じゃないですよね？」

ヤナも腰に手を当てていかにも怒ってますというポーズをとる。

「勝手に決めてすまない。責任は俺がとる」

俺は素直に頭を下げる。これは俺が勝手にしたこと、俺が解決するべきことだ。

「謝るだけならだれにでもできるわね」

「問題は具体的にどうやって責任を取るかですよね？」

二人が声をそろえて言う。二人ともこんなに仲が良かったのだろうか。

「しばらくこの町に留まってミンクの修業をするつもりだ」

「でも、その分魔王討伐が遅れてしまいますよ？」

ヤナの言うとおりだ。俺たちの最終目的は魔王討伐であって、ミンクを強くすることじゃな

い。

「人手不足のまま魔王討伐に向かっても、返り討ちに会うだけだ。ここでミンクを実戦レベルまで鍛えてから向かったほうが確実だ。その間、俺たちも十分に準備ができる」

俺が二人を説得していると、ミンクが俺を庇うように間に入り、いきなり土下座した。

「すんません。あたしのせいで迷惑かけてるのはわかっています。でも、師匠を責めないであげてください」

それを見て、アルマもヤナも流石に躊躇う。

「ミンクを強くするにあたって、二人にはやつてもらいたいことがある」

二人は諦めたようにため息をつくとき、ミンクに笑いかけ立ち上がらせる。

その日から、ミンクの特訓が始まった。

第五章 しあわせなひびは

俺とミンクは最初に手合わせした城壁を超えた先にある草原に来ていた。

俺は聖剣ではなく、武器屋で買ってきた刃を潰した安物の鉄剣を構える。

「まずは鞭の使い方を強化する。かかってこい」

「おっす、師匠！」

ミンクは鞭を構えて突撃する俺を迎え撃つ。縦横無尽に鞭がしなるが、俺は隙間を見つけ簡単に懐に入り、切っ先を喉元に向ける。

俺とミンクは倒木に腰かけて水を飲み休憩していた。

「鞭の利点は遠くからでも攻撃できる点。鞭の弱点は懐に入られるとどうしようもなくなる点だ。気をつけろ」

「おっす師匠！」

ミンクは俺の言ったことをメモしていた。

「レイド！」

「勇者様！」

怒鳴り声に驚きながら後ろを振り返ると、籠いっぱいのスライムを引き連れたアルマとヤナがいた。

「おう。二人ともお疲れさん」

「お疲れさんじゃないわよ（ですよ）!!」

二人ともスライムの粘液でベトベトだ。一步踏み出すたびにポタポタと服に染み込んだ粘液が落ちる。

「スライムを生け捕りにしろだなんて無茶なこと言つて」

「もう二度とやりませんからね！」

聖職者のヤナも流石にお怒りのようだ。まあ、ヤナは最初から怒りっぱかったような気がするが。

二人にスライムの生け捕りを頼んだのは、俺が全滅させてしまったミンクの召喚獣の補充のためだ。

「じゃあミンク、二人が生け捕りにしてくれたこのスライムたちをタイムしてくれ」

「おつす！」

ミンクは鞭を腰に巻いてしまうと、スライムに下から手を差し伸べる。

「……おいで」

その姿はまるで女神のようで、思わず見惚れていた。

次の瞬間、押し寄せてくるスライムにミンクが飲み込まれた。

「ミンク！」

俺はスライムを倒すべきか迷う。このスライムたちを倒しても、どちらにしるスライムをテイムする必要がある。ここで頑張ってもらったほうがミンクにとっては後々楽なのではないか。

「大丈夫ですよ？」

半透明のスライムたちにもみくちゃんにされながら、頭だけ出して俺に返答する。

「これはこの子たちが懐いてる証拠つすよ。前の子たちともよくやってたつす」

しばらくもみくちゃんにされると、ミンクが疲れ始めたのを理解したのか、スライムたちは大人しくミンクから離れ、召喚石に収まった。

「契約完了つす師匠！」

ベタバタで服が体に張り付いているミンクが微笑みながらこちらに近づいてくる。意外とスタイルいいんだなあと思っていると、胸部が寂しいヤナから冷たい視線を感じたので、タオルを投げ渡す。

「とりあえず風呂に入って着替えをしろ」

アルマとヤナの方にも今更だがタオルを渡しておく。

「お前らもな」

アルマが近づいてくると、俺の右腕に胸を押し付けてきた。

「ねえ、私のほうがスタイルいいと思わない？」

心を読まれたのか、それとも魔術を使わなくても分かるほど俺が鼻の下を伸ばしていたのか。

まあ、どっちにしてもアルマに興奮することはない。なぜなら、アルマは一〇〇歳を超える婆だからだ。

「師匠は渡さないっす！」

ミンクは俺の左腕に胸を押し付けて對抗してくる。

「両手に花ですね。ウフフフフフ」

ヤナが不気味な笑い声を発しながら錫杖を手に取って近づいてくる。

「お、おい待てヤナ——」

「あなたも濡れてください。《ホーリーウォーター聖水》」

俺の静止を聞かず、ヤナは奇跡を発動させ、俺は水浸しになった。

俺は宿屋の大浴場で体を洗っていた。すると、ドアを開けて誰かが入ってくる。

「師匠！」

「おわっ!？」

別の男性客かと思つて特に気にしなかったが、入つてきたのはミンクだった。慌てて股間を隠す。

「何の用だ！」

「お背中流させてくださいっす！」

一応ミンクはタオルで身体を隠しているが、タオルが水を吸つて色々と見えてはいけない部分が出てきている。

「他の客にバレたらどうする！」

前述したとおり、ここは宿屋の大浴場だ。ほかの男性客が入ってくる可能性もある。

「それは大丈夫っす。入つてくるときに清掃中の看板を掛けといたっす！」

それならしばらくは大丈夫かもしれないが、それでもミンクに背中を流してもらうわけにはいかない。

「大体、なんでそんなことになる!？」

「やっぱり仲を深めるには裸の付き合いが一番っす！ 死んだ親父ともよく風呂に入ったっす！」

「それはお前がまだ子供だった頃の話だろう!？」

「流石つす師匠！　なんで分かったんすか？」

ミンクはピュアというか、天然というか、頭が成長していないというか。

「ミンク！」

俺がどうするか迷っていると、ヤナが大浴場にやってきた。

「ミンク！　何をやっているのですか!!」

ヤナもタオル一枚だが、こちらは水を吸っていないので、透けてはいない。

「ヤナ姉さんも一緒に師匠の背中流すつすか？」

ミンクがそういうと、ヤナは俺に軽蔑するような視線を向けた。別に俺が強要したわけではないのだが。

「行きますよ。そんな男と一緒に風呂なんて、子供ができてしまいます」

ヤナはミンクの腕を引っ張って強引に女湯のほうへ連れていく。以外にもヤナに助けられたらしい。

俺は自分で身体を洗い、湯船に浸かり、風呂を出て、身体を拭き、新しい服に着替え、自室へ戻った。

今日はもう区切りもいいからミンクの修業は終わりにして、夕食までは自由時間にすると皆に話してある。

俺は聖剣の手入れをすることにした。ヤナには聖剣は手入れの必要がないといわれたが、戦闘の際に命を預けるわけだから、できる限りのことはしておきたい。ただの自己満足かもしれないが、それでもやれることはやっておきたい。

聖剣の手入れが終われば、次は今日買ったばかりの鉄剣の手入れだ。安物でも手入れをしておけば長く使い続けられる。それに、この鉄剣はミンクとの修行用を買ったものだが、もしかしたら聖剣を使えない場面があるかもしれない。そういうときにも役に立つ。

鉄剣の手入れが終われば、丸盾と革鎧の手入れだ。といっても、全て油を染み込ませた布で磨いたりするだけの単純なものだ。歪みを直したり、研ぎ直したりといったことは設備が必要だし、素人の俺にはできない。

装備の手入れを済ませたら、荷物のチェックもする。戦闘時は荷物は邪魔にならない場所に転がしておくが、基本的に荷物持ちは俺だ。荷物のチェックも俺の役割だろう。

荷物を全部出すと、中から飛竜フイバーンの鱗と牙が出てきた。そういえば売却しようと思ったのをすっかり忘れていた。俺が勝手に売却してもいいものだろうか。もしかしたらアルマやヤナが媒介

に使ったりするかもしれないし、夕食のときに聞いてから売却することにしよう。

持ち物のチェックも終わると、そろそろ夕食の時間だ。俺は一階にある食堂に移動した。

食堂に移動すると、何やら騒がしかった。一階に降りてみると、何やらヤナとこの町の冒険者が揉めているようだ。

「何かあったのか？」

ヤナが俺を見ると、説明するのを躊躇した。まだそこまで信頼されていないということか。

「ああん？ 誰だテメエ。関係ない奴は引っ込んでろ！」

ヤナに言い寄っている冒険者には見覚えがあった。ミンクに言いがかりをつけていたあのゴロツキだ。

「またお前か……」

「？ 何のことだ？」

ミンクを助けたとき、俺はフードを被って顔を隠していた。だから、ゴロツキからしてみれば俺の顔に見覚えはないのだろう。

「こいつは俺の連れなんだ。ちよっかいを出すのはやめてもらおうか」

ゴロツキはそれを聞くと、ニヤリと下卑た笑みを浮かべた。

「じゃあその嬢ちゃんを賭けて勝負だ。俺が勝ったらその嬢ちゃんを一晩貸してもらっぜ」

このゴロツキには一度勝っている。その時の勝負のダメージもごろつきには残っているはずだ。はつきり言つて負ける要素がない。

「いいだろう」

俺は快諾した。だが、俺の選択に黙っていないのはヤナだ。

「ちよつ、ちよつと待つてください！ 何を勝手に——」

俺はヤナの頭にポンと手を置く。

「俺を信じる」

ポカンとしたままのヤナを置き去りに、俺たちは宿屋を出ていく。

道路に縦に向かい合った俺たちは一気に距離を詰めた。今回は鞆をベルトに挟んであるの
で、ゴロツキには悪いが鞆のまま鈍器として使うわけにはいかない。

俺は峯打ちでゴロツキの首に聖剣を叩き込む。思いつきり泡を吹いて倒れているが、まあ大丈夫だろう。

「な、勝つただろ？」

ヤナは何だかモジモジしている。お礼を言いづらいのだろうか。

「礼ならいないぞ」

俺はそのまま宿屋に入ろうとしたが、ヤナが俺の服をつかんでいる。

「……ありがとうございます」

ヤナは小さく呟くと、俺を追い抜いて先に宿屋に入ってしまった。後ろから見えるヤナの耳が真っ赤に染まっている。まったく、素直じゃないんだから。

宿屋の食堂に戻ると、既にアルマとミンクが椅子に座って待っていた。

「遅かったわね」

「師匠、ヤナ姉さん、お待ちしてたっす！」

俺とヤナも椅子に座り、同じテーブルを囲む。

「待たせてしまつて済まない。早速食事しよう」

俺たちは料理に舌鼓を打った。特に美味かったのは新鮮な野菜だ。旅の途中では食べられない新鮮な野菜がこの町にはある。

「ミンク、新鮮な野菜は旅に出たらしばらく食べられないから、今のうちに嫌になるほど食べておけ」

俺は旅の過酷さを知らないミンクにアドバイスをしながら、自分もサラダを貪り食う。

食事をしながら飛竜フイバインの鱗と牙が荷物から出てきて、売却しようと思っていること。ヤナがゴロツキにナンパされていたところを、俺が決闘して助けたことなどを話しながら、飯を平らげた。

「さて、そろそろ寝るか」

「そうね」

「そうですね」

俺の提案に、アルマとヤナは賛同し席を立つが、ミンクは意外そうな顔をしている。

「皆さんもう寝るんすか？」

「ああ、明日も朝早くから修行だ。早く寝ろよ」

俺はミンクにそれだけ伝え、食堂を出て自室に戻ると、ベッドに寝転ぶ。今までの野宿では硬い地面か、草の伸び切った草原でしか寝られなかったからな。フカフカのベッドで寝られるなんて幸せだ。

就寝中にまたミンクやアルマがちよつかいをかけてくるかもしれないと思ったが、そんなことは杞憂だった。

翌朝、すつきりと目覚めた俺は、顔を洗い、着替えをしてから食堂に降りる。食堂のテーブルには、既にアルマ、ヤナ、ミンクが揃っていた。

「おはよう。俺が一番遅くなっちまったな」

俺のあいさつに、みんなそれぞれ返事を返してくれる。

「おはよう。その顔を見るによく眠れたようね」

アルマは俺を気遣ってくれる一言を添えて。

「おはようございます。リーダーなら一番に来たらどうですか？」

ヤナは少し棘のある一言を添えて。

「おはようございます師匠！」

ミンクは元氣いっぱいあいさつをしながら、空いている椅子を引いてくれる。

「じゃあ食事をしながら、今日の予定を話そうと思う」

俺たちは朝食を堪能した。今回の目玉は何といっても卵だろう。卵はすぐ駄目になってしま

うため、新鮮な卵は旅ではなかなか食べられない。燻製卵がせいぜいだ。

「今日は飛竜ワイバインの素材を売って、そのあとミンクの修行の続きだ」

全員の同意を得たので、俺は一度自室に戻り、飛竜ワイバインの素材を持ってくると、隣の冒険者ギルドへ持っていく。

「買取を頼みたい」

「はい、かしこまりました。これは……飛竜ワイバインの素材ですね」

ギルドの中にいた冒険者たちがざわつく。一応冒険者ギルド内を見渡すが、昨日二回もちよっかいを出してきたあのゴロツキはいなかった。流石にもう懲りたか。

素材を売却し終えた俺たちは、一度宿屋に荷物を置き、最低限の荷物だけを持って城壁を越え、魔物の領域に来ていた。

「今日はミンクがスライム以外の魔物をタイムできないか試すぞ」

ミンクはスライム以外の魔物をタイムできない。だが、例えばスライムより一段階上のゴ布林ならばどうか。一段階上がっただけでそこまでタイムが難しくなるとは思えない。というわけで、ゴブリンの足跡がある洞窟を探し出し、中に入る。

「ゴ布林がいても殺すなよ。ミンクはいつでもタイムできるようにしておいてくれ」

言うが早いのか、ゴブリンたちが集団で襲い掛かってくる。

俺は殺さないために、盾で受け止め、鉄剣の刀身の峰で打つ。

「ミンク！ ティムしろ!!」

後ろを振り返れない俺は、全力で叫ぶ。洞窟内で反響し、ワンワンと声が響く。だが、ちゃんとミンクには伝わったらしい。ミンクが前に出て、手を差し伸べる。

「……おいで」

スライムをティムした時のような、優しい、思わず手を取りたくなるような光景。しかし、ゴブリンは手を弾き、ミンクに飛びつく。服を引き裂かれ、ミンクの肌が露わになる。

「きゃあああああ!!」

「ミンク！」

俺は容赦なく鉄剣の刃でゴブリンを切り伏せ、ミンクを下げるが、俺が派手に動いたことで、戦線が崩壊してしまう。

「失敗だ、一旦下がれ！」

俺は出口に向かう足音を聞きながら、俺自身も下がる。

無事洞窟を脱出するが、獲物を見つけたゴブリンは下卑た笑みを浮かべながら追いかけてく

る。正直、広い草原で俺一人がみんなを守ることはできない。負傷したミンクを下げ、洞窟内で戦闘を継続するべきだった。完全に俺のミスだ。

「すまん。俺のミスだ」

俺は鉄剣から右腰に下げている聖剣に持ち替え、本気モードでいく。

「アルマは全体攻撃！ ヤナはミンクの治療！」

俺は聖剣で《ホーリーアタック聖撃》を放つが、ゴブリンの一番の脅威は数だ。一〇や二〇匹程度一気に殺しても、後から後から湧いてくる。だから、アルマの魔術に頼る。

「ファイアストーム火嵐」

炎の竜巻が草原に現れ、ゴブリンを呑み込んでいく。アルマが操作しているので、仲間である俺たちに危害が及ぶことはない。

俺たちが苦勞したゴブリンは、アルマの魔術によってももの数分で根絶やしにされた。

俺もヤナもミンクも、ボロボロの格好だったがその神秘的な光景に見とれていた。

奇跡でもおそろく同じことはできるだろう。だが、ヤナにはできない。それこそアルマのようにならぬ。一〇〇年も修行しない限り。改めてアルマの凄さがわかった瞬間だった。

第六章 こてさきのまほう

ミンクの服がボロボロになったので、ミンクにフードを着せ、一旦宿屋に戻る。

「結局、ゴブリンはタイムできなかつたか……」

ミンクが自室で着替えている間に、アルマとヤナと作戦会議をする。

「でも、そうなるとミンクはスライムだけで強くなるんじゃないといけないことになるわね」

最弱の魔物であるスライムだけを使役して強くなるなんてのは、蟻だけで像に勝つみたいなものだ。

「何か方法はあるの？」

現状、俺がミンクにしてやれるのは鞭を使った戦闘を強化してやることくらいだ。

そして、今回の戦闘で俺も実感したことがある。もっと強くならなければいけない。今のままでは仲間を守れない。

「アルマ、頼みがある」

「なに？」

アルマも予想はついているだろうが、俺はあえて頭を下げて頼む。

「俺に魔術を教えてください」

過去の勇者の中には、聖剣による剣技だけでなく、魔術や奇跡を併用して戦う者もいたという。

「魔術の修業は厳しいわよ」

アルマは腰に手を当て、真面目な顔で言う。

「ありがとう」

アルマに感謝を伝え、そのまま今度はヤナに頭を下げる。

「ヤナ、頼みがある」

「何ですか？」

「あなたまさか——」

アルマが止めようとするのを止め、強引に言葉を紡ぐ。

「俺に奇跡を教えてください」

ヤナの返事を聞く前に、アルマが慌てて止める。

「あなたまさか、賢者になるつもり!?」

賢者とは、魔術と奇跡が両方とも使える者のことだ。本来、魔術と奇跡は両立し得ない。言

うなれば光と闇だ。これを両方使える、本来なら存在しえない者たちを賢者という。

「そうだ」

何をすれば賢者になれる。つまり、魔術と奇跡を両立できるという明確な基準は存在しない。だが、ここには何百年も魔術を極めた者と、聖女といわれるまでに奇跡を極めた者。魔術と奇跡、両方のスペシャリストが揃っている。この二人に教えてもらっても駄目なら、俺は絶対に賢者にならないだろう。

「止めておきなさい。賢者なんてそう簡単になれるものじゃないわ。八〇年くらい前に賢者に会ったわ、滅茶苦茶強かったけど、それで以降賢者の話なんて聞かないわよ」

つまり、最後に賢者が誕生したのは八〇年前ということか。アルマは何百年も生きて目を光らせているからここ数百年で見落としがあつたとは思えない。

「確率が低いことはわかつてる。まして俺は偽りの勇者だ。でも、それでも頼む。教えてくれ」
頭を下げて目を瞑っている俺には、二人の表情は見えない。

「分かりました」

以外にも、最初に首を縦に振ったのはヤナだった。

「ちよっとヤナ!？」

アルマもヤナが了承したことに驚いている。

「偽りの勇者でも魔王を倒してもらわなければなりません。少しでも確率が上がるのなら良いでしょう」

ヤナは合理的というか、俺を物としか扱ってない感じがするが、今回はそれが幸いした。

俺はアルマの方を見る。

「……しようがないわね」

アルマも渋々という感じだが、教えてくれるようだ。

「ありがとう」

俺は三度二人に頭を下げた。

「お待たせしたっす！」

丁度ミンクも着替えが終わったらしい。

「ミンク、悪いがお前の修業、少し遅くなるかもしれない」

ミンクは文句を言うかと思つたが、やさしく俺に笑いかけてくれる。

「話は聞いてたっす。師匠も修業するんすよね？」

どうやらドア越しに聞こえていたらしい。

「ああ」

「なら、あたしも師匠と一緒に強くなるだけっす！」

ミンクはどこまでも前向きだった。せっかくだから話を戻して、ミンクの今日の修業の結果を食堂で食事を取りながら話し合う。

「結局、ミンクはゴブリンを使役できなかったな」

俺のその言葉に、ミンクは申し訳なさそうに肩を縮ませる。

「申し訳ないっす……」

俺はミンクの肩を叩く。

「しかしどうする？ 色々な種類の魔物を従えられるのがテイマーの強みの一つだ。このままだと、ミンクはスライムだけで戦うことになる」

誰かに案を求めるが、アルマもヤナも目を逸らす。

「まあ、ミンクの修業は一旦鞭による近接戦闘だけに限定して、レイドの賢者の修業に重きを置きましょう」

アルマの提案に、ミンクが頷く。ミンクがいいのならばいいと、俺もヤナも頷いた。

「じゃあ、午後からは俺の修業ってことでいいかな？」

全員の了承を得て、俺の賢者化計画がスタートした。

まずはアルマが基本的な魔術の基礎を覚えてくれる。魔術を室内で発動させるのは危険ということ、俺たちはいつもの草原に移動した。

「まずはこれを持って」

アルマが小さな石ころを俺に持たせる。

「これは？」

「魔術の才能があれば、その属性を覚えてくれる魔道具よ。魔力を込めてみて」

魔力を込めるのは聖剣を扱う内にできるようになった。それが俺が賢者になれると思った理由でもある。

石ころに魔力を込めると、石が突然発火した。

「熱い！」

慌てて石ころを放す。俺という魔力供給源から離れた石ころは発火が収まり、地面に落ちた。

「どうやら火の魔術に適正があるみたいね」

火の魔術は中々便利だ。攻撃力が高いし、明かり代わりになるし、野宿のとき薪に火をつけ

るときにも役立つ。まあ、便利じゃない魔術なんてないのだが。

「魔術は才能がないと使えないくなんて言う人がいるけど、正直初級の魔法なんて、魔術の才能さえあれば誰でも使えるわ」

魔術には既存の六属性がベースになっていることは俺も知っている。火、水、風、土、光、闇の六つだ。魔術師はこれを混ぜ合わせたりして強力な魔術を使う。

「じゃあ、俺は火属性の魔術以外も使えるのか？」

「初級に限れば使えるはずよ」

俺は両手を重ね、早速魔術を使ってみる。

「ファイアボール」
《《火球》》

しかし、プスプスと手から煙が出るだけで火の玉が出ない。

「そう簡単に魔術になるはずないでしょう」

アルマは地面に枝で図を描く。

「基本的に魔術は初級のボール。中級のウォール。上級のストームに分かれるわ。六属性それぞれに付随する魔術があるわね」

それを聞いて俺は疑問に思う。

「アルマの魔術はもつといろんなバリエーションがあったと思うが？」

「あれは私のオリジナル魔術よ」

魔術のことを知れば知るほど、改めてアルマの凄さが分かる。

「レイドは魔力を流すつてことは聖剣で練習してるはずだから、続けることね」

今日のアルマの授業はこれで終わり。続いてヤナの授業に移る。

「奇跡は神様の声さえ聞くことができれば誰にでも使えます。逆に言えば、それが才能ということですね」

「それで、なんなんだこの格好は？」

俺はヤナと似たような白装束に着替えさせられていた。宿屋まで帰るのも時間の無駄だったので、その草陰で着替えた。

「聖職者の修業服です。聖職者は身分や実力にかかわらず皆これを着ます」

ヤナの指示により、草原のど真ん中で座禅を組まされる。

「神様の声が聞こえたら、その声を口にするだけで奇跡は発動するはずですよ」

しばらく座禅をしていると、うすぼんやりと何か聞こえてくるような気がした。

「ホーリーウォール
《聖壁》」

目の前に光の壁が現れた。

「これは初級の奇跡なのか？」

俺が光の壁を突く。かなりの強度がありそうだが、もしこれで初級の奇跡なら、中級、上級の奇跡はどんな威力になるのだろう。

「奇跡には魔術のように初級、中級、上級の区別はありません。神様から賜った奇跡はすべてらく平等です」

つまり、多少の強弱はありそうだが、奇跡には階級が存在しないらしい。どちらかというところ、聖職者は皆平等ということで、階級を有耶無耶にしているように感じるが。そこはデリケートな部分だし、ヤナを怒らせたいわけでもないので黙っておく。

「奇跡は毎日の積み重ねが大事です。毎朝お祈りを欠かさないようにしてください」

そういうとヤナは膝をつき、お祈りの仕方を教えてくれる。

「ヤナは毎日してるのか？」

「はい。毎朝お祈りをしています」

ヤナの扱える奇跡の質、量。それは日々のたゆまぬ鍛錬のたまものなのかもしれない。

今日の奇跡の練習はここで終わり、夕食をいつも通り宿屋の食堂でとることにしようとしたのだが……。

「流石にそろそろ飽きてきたわね」

「確かに。不味くはないけど、もう何日も連続ですからね」

「あたしは皆さんが野宿してた時に食べてたものを食べてみたいっす」

人間とは罪なもので、皆宿屋の食堂の料理では不満を言うようになった。

「なら、せっかく飛竜フライングの素材も売れたことだし、たまには高いところで食べてみるか？」

今なら資金も潤沢にあることだし、たまには贅沢したっていいだろう。

「いいんじゃない」

「聖職者は質素な食事をしなければならぬのですが、まあ、旅にまで聖職者のルールを持ち込むのも堅苦しいですしね」

「だったらいい店を知ってるっす」

ミンクの案内で、町の中央にある大きなレストランまでやってきた。よくよく考えたら、今までこれだけ大きい町なのに、散策とかもせず、今まで町の入り口付近だけでひたすら修行

に明け暮れていたのだから、かなり頑張ったと思う。

「ここは高級な食材を贅沢に使った料理が食べられるんすよ。親父がまだ生きてたところに何度か食べにきたっす」

どうやらミンクにとって家族との思い出の場所らしい。

ミンクを先頭にドアを開けて入る。

「おお、ミンクちゃん。久しぶりだね！」

「ちわっす。仲間と一緒に食べにきたっす」

俺たちはテーブルに着くき、メニューを見ようとするが、メニュー表が見当たらなかった。

「メニューは？」

「初めて来た人に料理の名前だけ見せてもしょうがないってことで、メニューは置いてないっす。その代わり、この店は紹介制なので、紹介した人がオーダーをするか、食べたい食材を言えば、大体のものは作ってくれるっす」

なるほど、余程自信があるということか。

「なら、おすすめの料理を四つ」

「かしこまり！」

注文をしてしばらくたつと、いい匂いが漂ってきた。これは期待できそうだ。

「へいお待ち。飛竜のビーフシチューだよ」

それを聞いた瞬間、ミンク以外の三人が固まった。もちろん、俺も含めて。

「？ 皆さん、どうしたつすか？」

そういえばミンクには説明していなかった。飛竜は魔王討伐の旅でよく食べたのだ。確かに、

普通は飛竜は騎士団を編成して討伐するほどの強敵で、確かに肉も旨かったが。

「気にするな。じゃあ食べるか」

さすがに今更キャンセルもできないし、ここはミンクの良くしてもらっている店だ。不義理な真似はしたくない。諦めてビーフシチューに口をつける。

「——っ!？」

美味い。肉は歯で噛むというよりも舌に蕩ける様に口の中で溶けた。にもかかわらず、ちゃんと濃厚な肉々しさが口の中を駆け巡る。慌ててシチューも飲むと、こちらもコクがあり、かしそれでいてしつこくない。無限に食べ続けられる味だ。

「美味い！」

俺が感想を言えたのは、ビーフシチューの皿が空になってからだだった。

「最後のお客さんがミンクちゃんでよかったよ」

ポツリと店主が呟いたその言葉に、俺は首をかしげる。

「これだけ美味ければ客はこぞって来るんじゃないか？」

「お客さんには困ってないんだけど、食材がね……」

俺たちは四人で顔を見合わせる。何をすべきかはもう決まっていた。

「詳しく聞かせてもらおうか」

店主曰く、飛竜ワイバリンの肉が取れず、値段が高騰しているらしい。だが、パーティーで飛竜ワイバリンを狩れる俺たちなら助けられる。

「俺たちに任せろ」

「でも、お代が……」

店を閉める程の資金不足なら、俺たちに支払う報酬もないのだろう。

「分割でいい。もしくはこの店の食べ放題券」

「分かりました。よろしくお願いします」

店主が頭を下げたとき、俺たちも覚悟した。この超絶美味しい店を潰さないことを。

翌朝、飛竜ワイバリンの肉を求めて俺たちは魔物の領域に向いていた。ついでにミンクが飛竜ワイバリンをできるかも試す。ゴブリンをタイムできなかつた時点で無理だとは思いますが、試してみる価値はあるだろう。

「飛竜ワイバリン、いませんね」

しかし、ヤナの言う通り、どれだけ探しても飛竜ワイバリンは見つからなかった。普段は向こうからやってくるのに。

「なあアルマ。これってまさか、俺たちが飛竜狩りまくつたからいなくなつたつてことはないか？」

アルマは顎に手を当て、考え込む。

「そうね。もし魔王が私たちに飛竜ワイバリンをけしかけたのだとしたら、この辺りの飛竜ワイバリンがいなくなつたのも領けるわね」

飛竜ワイバリンがこの町からいなくなつた原因は俺たちだった。不味い。だとしたらあの店は俺たちが原因で潰れかけていることになる。絶対にミンクに知られるわけにはいかない。ミンクに気づかれずに、飛竜ワイバリンの肉を手に入れなければ。

「餌で釣るか」

俺は荷物から干し肉を取り出し、近くの枝をへし折り、地面に突き刺した枝に干し肉を刺す。枯れ枝を集め、枯草も少し集める。

「《着火》^{イグニッション}」

枯草に火種を放り込み、枯れ枝に火を移す。

「ちよつ、ちよつと！」

俺が誘き出すための焚火の用意をしていると、アルマに肩をつかまれた。本気で掴んでいるのか、結構痛い。

「何だよ？」

「さっきの魔術、いつの間に覚えたの!？」

さっきの魔術というのはどう考えても《着火》^{イグニッション}だろう。

「ああ、あれお前のオリジナル魔術なんだっけ？」

オリジナル魔術というのは、おそらく開発に時間や技術がかかるだけで、使用自体はそのままで難しくないのだろう。実際、《火球》^{ファイアボール}よりも簡単だ。それをアルマに伝えると、アルマはギョツとしていた。

「確かにその通りだけど、それに自力で気が付くだけで大したものよ」

「え、マジで！ 俺才能ある!？」

アルマからの拳骨が俺の頭に振り下ろされる。魔術師のくせにかなり痛い。普通、戦士と魔術師では筋力や耐久力にかなり違いがあるはずなので、そこまで痛くないはずなんだが。アルマは普通に戦士としてもやっていけると思う。剣が使えるのかは知らないが。

「調子に乗らない。魔術師なんて才能があつて当たり前の世界なんだから」

俺の作った罠に飛竜フレイグドラゴンが引つかかるかは分からないが、飛竜フレイグドラゴンは頭がいい。焚火をしていれば、冒険者がいると思つてやってくるはずだ。肉の匂いがすればなおさら。

しばらく草陰で潜んで見ていると、一匹の飛竜フレイグドラゴンが着陸してきた。

「今だ！ 攻撃開始！」

俺は一番に飛び出し、聖剣で翼を狙う。

「《火球》ファイアボール」

アルマが放つ《火球》ファイアボールは初級とは思えないほどの威力だ。やはり魔術は使つた魔術師の技量や魔力量によつて威力が変わるらしい。それでもわざわざ初級魔術を使ったのは、殺さないように手加減したのだろう。ミンクにタイムさせなければいけないからな。

俺は《火球》ファイアボールをモロに受けた飛竜フレイグドラゴンの翼に聖剣を突き立て、皮膜と手足を切り裂く。

「あとはタコ殴りだ！」

俺は聖劍で、アルマは魔術を温存し杖で、ヤナは錫杖で、ミンクは鞭で攻撃する。

飛竜を瀕死まで追い込んだ後、ミンクにタイムさせる。

「……おいで」

しかし、飛竜は顔を背けた。

「駄目か」

「まあ、ゴブリンもできなかったわけだし、普通に考えたら無茶よね」

「そもそもこれだけ痛めつけられているのにいうことを聞く気になるのでしょうか？」

「申し訳ないっす。せっかく生け捕りしてくれたのに」

四者四様の台詞を言いながら、飛竜にとどめを刺す。

「じゃあ解体するか」

俺が聖劍で飛竜の身体を適当に斬っていき、アルマとヤナが荷物にまとめていく。

「よし。じゃあ帰るか」

「待つてくださいます！」

飛竜の解体が終わり、帰るといふ時になってミンクが待ったをかけた。

「ミンクどうした？」

「骨も持って行った方がいいと思うっす」

「骨え？」

俺だけでなく、アルマとヤナも首をかしげる。俺たちにとつては骨なんて食べられないし、武器に加工するか他の魔物を誘き寄せるのに使うか。中にはアクセサリーに加工して売り、小遣いを稼ぐ冒険者もいるらしいが、俺達にはそんな暇はない。

「出汁をとるのに使うつて前に言つてた気がしたっす」

それを聞いて納得した。確かに料理には出汁が不可欠だ。それに、後から実は必要だったという事になつても面倒くさい。

「なら、出汁用に骨も少し持つていくか」

流石にそこまで大量には持つていけない。肉や皮だけでもかなりの量になるというのに、その上骨まで大量に持つていくことはできない。四人で運べる量には限界がある。

「重いわね」

「重いですわね」

「重いつす」

女子三人が苦言を漏らす。だが、俺だって重いし、そもそも普段から体を鍛えておけばこんなことにはならない。普段から俺に荷物持ちを一任させているからこういうことになるのだ。

三人の苦言を聞きながら、愚直に魔物の領域を進み、城壁を超え、レストランに入る。

「おお！ よかった。無事だったんですね!!」

店主が店から出てきて、俺たちを出迎える。

俺たちは飛竜ワイバインの肉やら皮やら骨やらを降ろし、椅子に腰掛ける。女子三人はぐったりとしていたが、日々鍛えていえる俺はまだ耐えられる。

「奥に運びます」

俺は店主と二人で飛竜ワイバインの素材を運ぶ。

「じゃあ、牙と鱗は俺たちが貰いますよ」

「どうぞどうぞ。おっ、骨も持ってきてくれたんですね。言い忘れていたので良かった」

ミンクに感謝しろ、店主。

俺も再び皆の座っているテーブルの椅子に腰かける。

「今日は疲れたわね」

「そうですね」

「そうっすね」

「これに懲りたら、最低限の筋トレはしておくことだな」

第七章 ねんえきのまもの

レストランの店主からの飛竜ワイルドの依頼から数日、俺とミンクの修業は順調に進んでいた。しかし結局、ミンクはスライム以外をタイムでできるようにならなかった。

「行くっすよ、師匠！」

「来い！」

今日もミンクと訓練していた。俺は聖剣ではなく鉄剣で戦う。

「行くっすよ、みんな！」

ミンクは一斉にスライムを解き放つ。俺は鉄剣でスライムを斬っていくが、元々スライムは斬撃や打撃に耐性がある。核を正確に狙わなければ、魔術付与のしてある剣や奇跡の付与してある剣、神の加護がかかっている聖剣以外では倒せない。

普段なら核を狙うことくらい造作もないが、五〇匹以上のスライムが一斉に襲い掛かってく

る以上、そんなことはしてられない。

だが、俺には魔術という新たな選択肢がある。

「《ファイアボール火球》」

鉄剣を右手で持ち、突き出した左手で放った魔術が、スライムを焼き払う。が、きりが無い。

基本的に初級魔術である《ファイアボール火球》で対象にできる魔物は一匹だ。アルマが使った上級魔術である《ファイアストーム火嵐》なら、標準した魔物を一気に対象にできる。が、下級魔術しか使えない俺には夢のまた夢だ。

ここは一旦距離を稼ごうとするが、足がやけに重くて動けない。見てみると、地面から静かに寄って来ていたスライムが足に纏わりついていた。

「これはっ——」

「逃がさないっすよ！ 師匠!!」

やられた。ミンクは正面から全スライムで突撃すると見せかけて、地面からも密かにスライムを進軍させていたのだ。俺の足にへばりつかせ、俺を逃がさないために。

「降参だ」

打つ手のない俺は、ミンクに降参を宣言した。スライムたちの進軍が止まり、ミンクのそこ

ろに潮が引いたように戻っていく。

「聖剣を使ってなかったとはいえ、スライムだけで勇者を倒しちゃうとはね」

「大したものですよ、ミンク。あなたなら聖剣を引き抜いて本物の勇者になれるかもしれないませんね」

二人がミンクをベタ褒めする。

「本物の勇者って？ まるで師匠が本物の勇者じゃないみたいじゃないですか」

それを聞いて、俺たちは顔を見合わせる。

『あ……』

ミンクには、俺が偽りの勇者だという話をしていないということ、みんな気づいた。

「ミンク、落ち着いて聞いてくれ」

ミンクにヤナに話したように、俺が偽りの勇者になった経緯を頭から爪先まで話した。それだけでは信じないかもしれないと、右腕の切断面も見せた。

基本的にこの世界の人間は勇者信仰者だ。ミンクも勇者信仰者なら、俺のしたことは許されないことで、自分の手で裁こうとするかもしれない。

「どんな過去があっても、師匠は師匠ですよ」

だが、そんな俺の不安を無視して、清々しい笑顔でミンクは言い切る。

「そうか……。安心した」

俺は右腕に布を巻き直しながら、密かに安心していた。やはり、今までよくしてくれていた人間に殺意を向けられるのは、嫌だ。

「大変だ！」

俺たちの仲が深まったのも束の間、町からカンカンと警鐘がなり、見張りが声を張り上げる。

「行くぞ！」

「ええ」

「はい」

「うっす」

俺たちは町の見張り台へ向かった。

「何があつた!？」

俺たちは見張り台をよじ登り、兵に声をかける。怪しむ視線を向けられたが、聖剣を見せると二つ返事で状況を説明してくれた。

「キングススライムが町に迫ってきています。スライムの下敷きになった場所は草木一本生えていません」

「どうやら、勇者の出番のようだ。」

俺は一人町を出て、聖剣を構えて立っていた。土煙を巻き上げてスライムが町に迫ってくる。この町のどんな建物よりも大きい、半透明の粘液の身体に核を持ったスライムが、とんでもない勢いでこちらに向かってくる。

だが、俺は勇者だ。逃げるわけにはいかない。気分を奮い立たせ、聖剣を掲げる。キングススライムと言ったらスライムの中では最強。飛竜ワイバーンよりも格上の相手だ。出し惜しみはせず、最初から最大威力の一撃を叩き込む。

「ホーリーアタック
《聖撃》」

聖剣を振り下ろすと同時に、聖なる力が極太の刃となってキングススライムへ飛んでいく。前述したように、スライムには斬撃が効きにくいのが、これは聖なる力の斬撃だ。魔物には致命傷となりうる。

だが、キングススライムは聖撃ホーリーアタックが直撃したにもかかわらず、以前と変わらない速度で町へと

向かってくる。よく見ると、ホリリアタック聖撃によって粘液が蒸発し若干身体が縮んでいるが、数秒後には核から粘液が補充され、元通りの大きさに戻った。

そう、キングスライムには再生能力がある。といっても、別にこれはキングスライムだけの能力ではなく、全スライムが核を破壊しない限り再生し続ける。

ではなぜキングスライムだけがそこまで強敵なのか。それは単純にその大きさにある。身体が大きく、核に攻撃が到達しにくい。あるいは粘液で威力を著しく削られる。

つまり、俺の最強の一撃が効かなかった時点で、少しずつ削っていくしかない。

「アルマ！ ヤナ！」

俺は見張り台に待機させている二人に向かって手を振る。これで俺の攻撃が通用しないことと、助力が必要なことが伝わるようになっていく。

すぐにアルマの魔術とヤナの奇跡がキングスライムに飛んでいく。それに合わせて俺ももう一度最大出力のホリリアタック聖撃を放つ。その全てがキングスライムに直撃し、キングスライムが半壊するが、届かない。どれだけ粘液を壊しても、その中心にある核が無事ならまたすぐに、ああこの説明をしている間に再生してしまった。

勇者にとって必要なのは力ではない。聖剣を引き抜くことでもない俺は思っている。勇者

にとつて必要なのは常に人々の希望であること。簡単に言えば「諦めない」ことだ。何度倒れても立ち向かう。それがヒーローにおけるもつとも重要なことだと思う。

だが、勇者である俺は諦めかけていた。最大出力の聖ホーリーアタック撃を二発連続で放つたことにより、腕は震え、聖剣を持ち上げるのもままならない。決して、この震えが恐怖によるものではないとここで強がっておく。

俺は所詮偽物だ。偽りの勇者だ。本物の勇者が苦戦するような、本物の強敵は倒せない。それがここで証明されたような気がして、視界が涙で滲む。

「師匠！」

俺が膝から崩れかけたその時、俺を誰かが後ろから支えてくれた。アルマとヤナは見張り台で魔術と奇跡を放っている。ということは、ここに來れる仲間はまだ一人。

「何をしに來た？ ミンク」

後ろから抱き着くようにして俺を支えるミンクに顔を見ずに問いかける。顔を見なかったのは、泣き顔を見られたくなかったというのと、敵に背中を見せない程度には、まだ俺に戦う意思があつたんだと思う。

「師匠は一人で抱え込みすぎっす」

ミンクが俺を支えたまま話しかける。

「師匠か困ってたら、私が助けるっす。アルマ姉さんも、ヤナ姉さんも、きつと助けてくれるっす」

「そんなことは分かっている。大体、これが抱え込み過ぎだっていうのなら、それはミンクの勘違いだ。勇者は前線に立って魔物の信仰を防ぐのが役目だ。俺がその役目を満足にこなせていないのは、俺が偽りの勇者だからだ」

ミンクの歯ぎしりの音が聞こえた。

「確かに師匠は偽りの勇者っす。でも、だったら本物の勇者と張り合うのは無理があるっす」
その通りだ。だが、誰かに直接そう言われると心にくる。っていうか何しに来たんだこいつ。俺の心を折りに来たのか。

「だから、もつと私たちに頼るべきっす。勇者の力で本物に敵わないなら、仲間の力で底上げすればいいんすよ」

俺は無意識に、ミンクの顔を見ていた。ミンクは俺の顔を見て、ニカツと笑う。

「私はスライムしかタイムできない駄目なテイマーっす。でも、逆にどんなスライムでもタイムできるとしたら？」

俺から離れ、俺を追い越し、ミンクは進む。

「止める。そんな憶測でお前を失うわけにはいかない」

俺は膝をつき、聖剣を手放し、ミンクに手を伸ばす。きつと見張り台の連中には、俺が惨めに見えたことだろう。きつとミンクが本物の勇者に見えたことだろう。

「大丈夫つすよ。あの子の声が聞こえるんで」

ミンクは走り出す。助走をつけ、勢いよくキングスライムの粘液にダイブした。当然だが、粘液の中には空気がない。

ミンクを取り込んだキングスライムが咆哮を上げる。本来、スライムには声帯がないので、声は上げられない筈なのだが。

次の瞬間、眩い光に辺りが包まれる。俺も左手で目を守りつつ、様子を見守る。

「師匠——！」

明るいミンクの声が聞こえ、光が収まる。そこには、キングスライムの頭の上で手を振るミンクの姿があった。

俺はきつと、苦笑いを浮かべていたと思う。

ミンクにキングスライムを召喚石に仕舞わせ、町に戻った。町の入り口には兵士をはじめ、たくさんの人たちが集まっていた。

「勇者様、助けてくださりありがとうございます！」

みんなが口々にその台詞を口にするが、俺は清々しい気持ちでミンクの背中を押した。

「俺は何もできませんでした。この町を救ったのはミンクです」

それを聞いて人々は口々に言いあう。

「ミンク？ あのスライムしかタイムできない駄目ティマーの？」

「勇者様に取り入ったんじゃないのか？」

俺はミンクの肩をポンと叩き、笑顔で言っただけ。

「見せてやれ」

ミンクはニパツと微笑み、軽く敬礼して言う。

「うっす！」

左手で召喚石を取り出すと、地面に叩き付ける。町中に突如現れたキングスライムに、人々が慌てふためいたのは言うまでもない。俺とミンクはそんな人々をキングスライムの頭上から見下ろし、拳を突き合わせていた。

俺たちが町にいとまた強力な魔物が町にやってくるかもしれないということで、翌日の朝にこの町を出立つすることにした。

『乾杯!!』

出立前の最後の食事ということで、レストランを貸し切っている。

「悪いなミンク、あまり時間が取れないで。別れの挨拶とかしたかっただろう?」

ミンクはこの町出身だ。いくら家族がいなくても、別れを済ませたい人ぐらいはいるだろう。

「問題ないっす。どうせ家には私しかいないし、唯一挨拶したかったこの店の親父さんにはいま挨拶できてるっす」

ミンクはそう言っつて酒を飲む。アルコールは普段魔物に嫌われるので飲まないそうだが、今日は特別な日なので飲んでいいる。

アルマは酒に強いので普段の食事から飲んでいいる。

ヤナは酒に弱いし酒癖が悪いので飲んでいない。

俺は普通に飲めるが、別に好きでもないし、ヤナに付き合っつて飲んでいない。

「師匠も飲みましょうよ。お注ぎするっす」

「いや、俺は……」

「たまにはいいじゃない、飲みましょうよ」

アルマに背中を押され、ミンクが俺のコップに酒を注ぐ。

たまにはいいかと思いい、酒に口を着ける。酒は高いものを求めればキリがないので、この酒はそこまで高い酒ではないが、美味しい。この土地独自の酒だろうか。

「ささ、ヤナ姉さんも」

ミンクがヤナにも酒を勧める。

「いえ、私は……」

「止めとけミンク。ヤナは酒癖が悪いから」

ヤナもそれは自覚しているのだろう。黙って水を飲む。こういう仲間外れにするのは気がひけるが、ここで暴れられても困る。

「まあいいじゃない。一口くらい」

アルマが自分のコップをヤナの前に持ってくる。

「そうですね。祝いの席ですし、一口くらいなら」

そう言つて、ヤナが酒に口をつける。

「ヒック……」

ヤナの顔が赤くなり、頭がぐわんぐわんと揺れる。

「お、おい。まさか……」

ヤナがガンツとコップをテーブルに叩き付ける。

「今回私全然活躍しなかったじゃないか！ チクショー!!」

駄目だった。ヤナは酒癖が悪いだけでなく、酒に弱かった。それにしても一口で酔うつて

……。

「いや、でもヤナは聖職者だから……」

俺がフォローを入れると、ヤナがギロリとこちらを睨んで近づいてきた。

「聖職者だから攻撃力が弱いと思つたら大間違いだつーの！」

聖職者は基本的に回復や防御がメインだ。攻撃手段がないわけではないが、パーティーを組むのなら、攻撃力の高い戦士や魔術師が攻撃役。聖職者は防御や回復要員になるのが鉄板だ。

「むっ。ちようどそこに魔物がいるな。見せてやろう。私の攻撃力を！」

そういうと、ヤナは両手を重ね、何もいない場所に向けて奇跡を放とうとする。

「止めろ！ 店が壊れる！」

俺が止めに入るが、一步遅かった。

「《ホーリーアタック聖撃》」

極太の光線がヤナの重ねた両手から放たれ、店の壁に大穴を開ける。

『あちゃー……』

「どうだ見たか！ あっはっはっはっは！」

俺たちが頭を押さえる中、ヤナは大笑いした後。バタンと倒れ、満足そうな顔で眠り始めた。

翌朝、俺たちは町を出て、魔王討伐の旅を再開した。

「いい町だったな」

「そうね」

「そうですね」

「当然です。あたしの生まれ育った町ですから」

俺たちは町を見渡せる丘から、街を一望し、感傷に浸っていた。

「それにしても昨日は楽しかったですね」

さりげないヤナの一言に、俺、アルマ、ミンクの三人はビクリと肩を震わせる。ヤナが倒れた後、店主にこっぴどく怒られ、壁の修理代も払うことになり、結局そのままお開きになったのだ。

「まあ、あれは俺たちも悪かったからな」

「そうね」

「あたしたちにも責任があるっす」

「？」

ヤナが何のことかわからないまま、俺たちはヤナのフォローをした。

魔族領に入ってしまったら、俺たちは魔物に遭遇した。ゴブリンと酷似しているが、身体が大きく、牙や角が生えていて、棍棒を持っている。オーガだ。

「俺が前に出る。アルマが攻撃、ヤナは防御と回復、ミンクはサポート」

俺は素早く指揮し、先頭に備える。

オーガが咆哮を上げ、空気が震え、肌がビリビリと痛む。それでも、俺は盾を正面に構えながら突っ込む。

「ホーリーライト
《聖光》」

ヤナの奇跡によって、辺りが眩い光に包まれる。その隙に俺はオーガの左足首を斬る。加えて、ミンクのスライムが右足を固定。これで本命の攻撃を躲せない。

「ボンバー
《爆撃》」

アルマの魔術により、オーガの身体が爆炎に包まれる。オーガは胸と顔に重度の火傷を負ったが、まだかろうじて生きている。

俺がオーガに飛びつき、聖剣を首に突き刺して止めを刺す。

「よし、連携も大分取れてきたな」

ミンクがパーティーに加入したことで、新しく連携を組みなおしたのだ。ミンクはサポーターということになった。サポーターとは、攻撃や防御等の直接戦闘に貢献する行動を行わず、仲間の攻撃や防御の補助を行うポジションだ。

一見すると戦闘に参加しないので不要なポジション、不遇なポジションなどと言われがちだが、いるといないとは大違いだ。腕のいいサポーターと一度でも組んだことがあれば、そのありがたみが分かるだろう。

オーガを解体し、焚火をして肉を焼く。

「不味い……」

オーガの肉は硬い上、味もよくない。そもそも、魔物とはいえ人型の生き物の肉を食べるのは抵抗がある。

「そう？ 確かに硬いけど、食べられないほどじゃないわ」

アルマは酒のつまみにオーガの肉をつまんでいた。そもそもアルマが食べ物を嫌ったところを見たことがない。意外と食べられれば気にしないタイプなのかもしれない。

「味は良くないですが、残すのは教義に反します」

聖職者であるヤナは不味いのを認めながらも、無理して食べていた。

「確かに硬いっすね」

ミンクは自分が食べるのを早々に諦め、自分のテイクしているスライムたちに分け与えていた。スライムは獲物を溶かして捕食するので、肉が硬かろうと関係ない。

魔族領に入っただけはオーガやワイバーンの単発的な攻撃が続いた。流石にスライムやゴブリンのような下級の魔物は少ないが、いないというわけではない。スライムは片っ端からミンクにテイクさせている。

すると、珍しい魔物に出くわした。

「デーモンか？」

身体が真っ黒で角が二本、蝙蝠のような皮膜の翼。俗にいうデーモンだ。

「勇者か？」

『つつ!?』

俺たちはそれぞれ武器を構え、身構える。今まで言葉を話す魔物はいなかった。そもそも、魔王は魔物の王なのだ。知能を持った魔物は数えるほど少なく、そして、必ずと言っていいほど強い。

「私は魔王様側近のスカル。貴様らに恨みはないが、ここで死んでもらう」

「名持ち！」

俺たちが旅をして初めての名持ちネームドモンズの魔物との遭遇だった。基本的に、魔物の名前は種族名であって、個体名ではない。名付ける者がいないし、必要もないのだ。逆に言えば、名持ちの魔物は、魔王が名前を与えるに足ると判断しただけの実力があるということだ。

俺は真っ先に飛び出し、ヤナがそれと同時に《ホーリーライト聖光》を放つ。いつものパターンだ。だが、今まで通りにはいかなかった。

「ふんっ!!」

スカルが鞘から引き抜いた剣を一振りすると、光が消え失せた。俺は武器のことはメンテナンスの仕方程度しか知らないが、あの剣はヤバい。一見するとただの錆びだらけの剣だが、その奥底には只ならぬ力が秘められている……気がする。

「アルマ、あの剣を鑑定しろ」

俺は、あえてスカル本体ではなく、剣の方を鑑定させた。アルマも俺がああ剣を危険視しているのに気付いたのか、黙って従う。

「アブレイザー
《鑑定》」

アルマは鑑定結果を言わなかった。

「結果は？」

焦れた俺が結果を催促すると、渋々言う。

「鑑定不能」

鑑定不能。つまり、アルマの魔術が抵抗レジストされたか、アルマの経験不足だ。だが、アルマはもう何百年も生きている。とつくに経験値なんてカンストしているだろう。つまりあの剣は「人間の理から外れている」ということだ。

突っ込んできたスカルの剣を、俺の聖剣が受け止める。二振りの剣はバチバチと火花を散ら

して反発しあう。

聖劍と互角の出力を出せる武器はそう多くない。というかない。聖劍は神が人間に与えた魔王を倒すための唯一の神器なのだから。

「その剣、一体なんだ？」

俺がその質問をぶつけると、スカルは笑った。正確には、俺はデーモンの表情なんて読み取れない。だから分からないのだが、このタイミングで顔の筋肉が動くことは笑ったのだと思う。

「自慢したいのは山々だが、生憎と魔王様に口止めされていてな」

お互いの剣と剣が打ち合う間、仲間たちが何もしていないわけではない。アルマは俺がスカルから離れるタイミングで魔術を撃てるように狙いを定めているし、ヤナは新たな奇跡の準備をして、発動タイミングを図っている。ミンクはスライムを地面伝いに這わせ、スカルの足に纏わり付かせている。

「邪魔な雑魚だな」

スカルが自分の足に纏わり付いたスライムを気にし始めた。その隙に、俺は一気にスカルから離れ、距離を開けると同時に叫ぶ。

「今だ！」

俺の合図で、アルマとヤナが動く。

「爆撃」

ボンバー
ホーリーアタック

「聖撃」

スカルは避けようとするが、ミンクのスライムが足に纏わり付いてそれを許さない。

「ちっ！」

スカルは剣を振り、魔術と奇跡の威力を相殺させようとするが、流石に両方は相殺させられないらしい。

「がっ、っは……!？」

アルマとヤナの合体攻撃を受け、スカルが吹き飛ばす。元々、ヤナの奇跡や聖剣は魔物に特攻がある。魔物であるスカルにヤナの奇跡は耐えられないだろう。

慎重に吹き飛ばしたスカルを追うと、胸から煙を出して大の字で倒れこんでいた。

「私の負けだな……」

スカルは震える右手で剣を握る。

「申し訳ございません。魔王様」

スカルは自分の左手首を剣で斬り付ける。青い血が手首から剣へ伝う。血を浴びた剣はボロボロと崩れ落ちてしまった。

おそろく、剣を俺たちに渡さないために、予め負けそうになったら剣を自壊させられるようにしておいたのだろう。

「敵ながらあっぱれだな」

「そうね」

「大した忠誠心です」

「あの剣惜しかったっすね」

俺たちは、スカルの墓を作り、黙祷を捧げた。

第八章 きりふだはひだり

スカルとの決戦を超え、俺たちはついに魔王城にたどり着いた。

「ここが魔王城か」

「ついに来たわね」

「不気味ですな」

「薄気味悪いっす」

魔王城といっても、人間のような建築された城ではなく、岩が初代魔王の魔術によって変形したものだ。魔王は代々この場所を根城にしている。

なんだか空の色も灰色だし、雲も暗雲が立ち込めている。

俺たちは、薄気味悪い魔王城の中を探索する。中には今まで現れた全種類の魔物がランダムで襲い掛かってくるらしい。だが、デーモンはいてもスカルのような名持ちネームドモンスターの魔物はいなかった。もしかしたら、名持ちネームドモンスターの魔物は一体しか作れないのかもしれない。

オーガやデーモンには苦戦したが、スライムはミンクがタイムし、ゴブリンは楽勝なので、休み休み魔王城を攻略していく。

魔王城は初代魔王の頃から存在している。仮に魔王と勇者の勝敗が五分五分だったとして、勇者は半分の確率で勝利している。なので魔王の玉座までたどり着き、帰ってきた勇者たちが残した魔王城の地図が存在している。

地図を頼りに魔王の間までたどり着いた。魔王の間の大きく重い扉を四人がかりで開ける。

「待っていたよ。勇者」

魔王の間の中から声が響く。俺を先頭に中に入る。部屋のつくりは人間の城の謁見の間と変わりない。

そして、人間であれば王座のある場所には、一人の青年が座っていた。

「お前が魔王か？」

青年は立ち上がり、派手なポーズで自己紹介を始める。

「僕の名はクロム。今代の魔王だ」

魔王なのだから、当然名前があるのだろう。それが自分で名乗っているだけなのか、それとも、誰かに名付けられたのかは分からないが。

「こちらが名乗ったんだから、君も名乗るべきなんじゃないかな？」

クロムは王座に座り直し、俺たちの名乗りを聞くつもりのように。確かに、勇者と魔王の戦いなら、神聖なものだし、敬意を払うべきなのかもしれない。何より、名乗りの間に魔術や奇跡の準備ができる。

「今代の勇者、レイド・マーシャルだ」

「アルマ・ケルスタよ」

「ヤナ・ラーマです」

「ミンク・アレステルっす」

クロムは俺たちの名乗りを満足そうに聞いていた。

「では、挨拶も済んだことだし始めようか」

その合図と同時に、俺はまっすぐクロムに走り出す。

「では、まずは肉弾戦と行こうか！」

クロムも俺に向かってくる。だが、あちらのこだわりなど知ったことではない。俺は構わず聖剣を抜き放つ。

俺の聖剣と、魔王の拳がぶつかり合う。聖剣がクロムの拳を切り裂く——はずだった。だが、俺の聖剣は拳とぶつかり、激しい火花を散らす。

「馬鹿な！」

聖剣は魔物に対して特攻だ。それは魔王だって例外じゃない。そもそも、聖剣だって立派な刃物だ。刃に指を添えれば人間だって指が切れる。俺もそうだ。

「妙だな」

魔王はより力を込める。すると、俺はいつも容易く吹き飛んだ。

「弱過ぎる。本当に勇者か？」

さすがは魔王。見抜いてやがる。俺は吹き飛んだ先の陥没した壁の中でそう思った。

「《回復》
リカバリー」

ヤナが回復の奇跡で俺を治療してくれる。

「《爆撃》
ボンバー」

「行くつす、スライムたち！」

アルマが魔術でクロムを攻撃し、ミンクが足止めをする。いや、おそらくアルマもクロムを近づけさせないために魔術を使っているのだろう。

「へえ、テイマーもいるのか。それにしても下級の魔物ばかりというか、スライムだけだけど」
アルマの《爆撃》ボンバーを片手で受け止め、クロムはミンクを品定めする。

「無傷。ありえないわ、私の魔術を受けて……」

「いや、聖剣で傷つかないんだから、魔術で傷つかないのも当然だ」

俺は口に付いた血を拭い、立ち上がって先頭に立つ。

「いや、それでもないよ」

クロムは右手を見せる。拳には刃物で切ったような浅い切り傷が、手の平には火傷の跡があった。確かに無傷というわけではないが、俺たちの全力をぶつけたにしては小さすぎる傷だ。

「連携で行くぞ！」

正面から戦って勝てないのなら、正面から戦わないようにすればいい。

ホーリーライト
「《聖光》」

ヤナの奇跡により、辺りが光に包まれる。レイドは剣で切り裂いたが、クロムは何もしない。何もできないのか。それとも、俺たちを侮っているのか。

その間に俺が飛び込み、クロムの足を斬りつける。オーガの時のように健を斬ればよかったのだが、まるで、身体に刃が入らない。

だが、片方の足はミンクのスライムで固定できた。俺は素早く離れ、それと同時にアルマが魔術を放つ。

ボンバードメント
「《砲撃》」

熱線がクロムを襲う。いつもの連携ならこれで俺がとどめを刺しに行つて終わり。だが、クロムはこれでは倒れないという確信があつた。だから、さらに追撃する。

ホーリーアタック
「《聖撃》」

ホーリーアタック
「《聖撃》」

俺とヤナのダブル《聖撃》ホーリーアタックが加わり、視界が白く染まる。

「ぜえ、はあ……」

俺は聖剣を地面に突き立て、身体を支える。本来なら、ヤナは防御、回復のために力を温存しなければならぬ。だが、今回ヤナは《聖撃》ホーリーアタックを使い、攻撃に参加することを選んだ。ここが勝負の際だと判断したのだろう。

俺も、アルマも、ヤナも、もう息を切らしていた。

「へえ、今のはよかったね。さすが勇者パーティーつてとこかな」

だが、クロムは悠々と立っていた。ただし、右腕は吹き飛んでいる。

「余裕だな。右腕が重傷、みたいだが？」

クロムはクスリと笑う。

「この戦いはね、元々生きるか死ぬかしかないんだ。右腕一本ぐらいなら必要経費だよ」

クロムは生きてこの戦いを乗り越えられれば十分なのだろう。思えば、ずっと右腕だけで、右腕を犠牲にするような戦い方をしていた気もする。

「ただ、こうなるともう肉弾戦は無理かな。じゃあ第二ラウンド」

魔王は左手をこちらに向ける。

「魔術戦といこうか」

そう、魔王はまだ幼かった俺に呪いをかけた。だから魔術が使えることは知っていた。なぜ使わないのか疑問だったが、力を残していたのか。

「じゃあ、アルマが使った魔術を使おうかな。《砲撃》」
ボンバートメント

極太の熱戦が俺たちに向けて放たれる。

「《砲撃》」
ボンバートメント

アルマも《砲撃》の魔術で迎え撃つが、威力が違う。徐々にアルマの《砲撃》が押され始める。

「《聖盾》」
ホーリーシールド

ヤナの奇跡によって俺たちの前に聖なる盾のバリアが張られる。今までギリギリのところまで踏ん張っていたアルマの《砲撃》がここにきて完全に押し負けた。

すごい熱波が顔を襲う。俺は右腕で顔を覆って耐えるが、その際に右腕に巻いていた布が解けた。

右腕と右肘の繋ぎ目が露わになる。それを見て、クロムは目を開かせる。《砲撃》を撃つのも止めた。

「へえ。君、勇者にしては弱いと思っただけど、勇者ですらなかったんだ」

クロムは肩を震わせて笑う。だが、面白くて笑うというよりは、もう笑うしかないという笑い方だ。

「《加速》」

クロムが消え、突然俺の目の前に現れる。俺は咄嗟に聖劍で自分を庇う。予想通り、クロムが俺に向けて拳を放つ。

俺は再び壁に叩き付けられる。

「《扉》」

クロムは左腕を魔術によって現れた虚空へと突っ込み、一振りの剣を抜き放つ。赤い刀身に黒い魔力を纏った不気味な剣だ。

「《鑑定》」

アルマはおれが言うよりも早く《鑑定》を使った。当たり前のことだが、魔術を使うには魔力を使うしかない。つまり《鑑定》の分も魔力を消費する。それでも、使うべきだと判断したのだろう。

「結果は？」

「……鑑定不能」

鑑定不能。その鑑定結果を、俺は最近聞いたことがある。スカルが持っていたあの剣と同じだ。人類最強の魔術師であるアルマが鑑定不能な武器が、この世界にそう何個もあるとは思えない。

「僕が鍛えた剣だ。僕はこれを聖剣と対になる剣——魔剣と名付けた」

クロムは剣を構えると、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

「君にはもう手加減はしない。魔王として、本気で戦ってあげるよ」

ここに至るの本気宣言。俺もアルマもヤナも、もう限界だ。動けるのは。

「させないっす！」

ミンクはスライムたちを差し向け、自分は鞭で攻撃する。

「邪魔だよ」

クロムは魔剣を一振りする。プチリと音がして、聖剣でも切れなかった竜の革から作られた

ミンクの鞭が切れた。

「うそ……」

鞭は長さか極めて重要だ。短くなれば威力が損なわれる。なにより、あの鞭は父親の形見だ。

ミンクが精神面が心配だ。

膝をつくミンクの横をクロムは悠々と通り過ぎる。

「アルマ、ヤナを守れ」

俺は立ち上がり、クロムと対峙する。クロムの姿が掻き消える。俺は急所だけを守る。

痛みが走る。クロムの狙いは俺の首ではなく、右腕だった。右肘から先、聖者の右腕が切断される。ちゃんと加護は発動していたのに、加護ごと断ち切られた。

ここまでか……。俺が諦めかけたその時、白い布切れが俺の視界を横切る。

そこからは、全てがスローモーションに見えた。

俺をうヤナ。ヤナは俺を庇ったりはしないと云っていた。にもかかわらず今俺を庇おうとしている。

俺は直観に従い、左手を聖剣に伸ばす。聖女であるヤナが認めたのだ。俺にだってできるはずだ。

聖剣を握り、ヤナと魔剣の間に聖剣を滑り込ませる。

「ほう……」

クロムはニヤリと笑い、ヤナは信じられないものを見たような顔で振り向く。

「レイド、あなた……」

初めて勇者様ではなくレイドと呼んでくれたな。まあ、本物の勇者になったのに今更名前呼びというのもどうかと思うが。

「ヤナ、下がってろ」

「せめて……」リカバリ《回復》

ヤナが俺の右肘にリカバリ《回復》をかけると、今まで放っておいた流血が止まった。

「まずはおめでとう。新たな勇者」

「ありがとう。魔王」

互いに左腕一本で剣を構え、向かい合う。最初に仕掛けたのはクロムの方。姿が掻き消えた。だが、俺にはその動きがしつかりと見えていた。聖剣で受け止める。

どうやら、勇者になったことで加護の出力が上がっているようだ。

俺とクロムは互いに斬りあうが、互いに有効打を与えられない。

俺たちは示し合わせたかのように一旦距離を置く。

「次で決める」

「ああ、僕もだ」

俺たちは最高の一撃をぶつけあった。地面は陥没し、壁はひび割れ、空気は揺れる。

このまま聖劍と魔劍で戦っていたのでは決着はつかないだろう。だから、俺はクロムの魔劍を聖劍と引き換えに力づくで弾き、拳を握りしめてクロムの顔面に叩き込む。勇者の加護が一〇〇パーセントの出力で発動している上に、俺の腕力も乗った拳はクロムの顔を簡単に壊した。

「悪いな。こっちも命がけなんだな」

きつとクロムは聖劍と魔劍で勝負したかっただけだ。それを分かっていた上で、踏み躪った。

「ははは……自分から聖劍を手放すとは、今回の勇者はとんだ問題児だな」

「ああ、先代勇者の右腕を切り落とした偽りの勇者だ。とんだ問題児だろう？」

クロムは笑いながら体が少しずつ灰になり、風がクロムの灰を攫っていく。

「……終わったか」

俺は聖劍を回収し、地面に突き刺さったままの魔劍に手を伸ばす。人間が触ると悪影響があったりするかもしれないが、加護があるし、どのみちこのままにするわけにはいかない。このままにしておけば、必ず次代の魔王が悪用するだろう。そうならないために王国で封印措置を施さなければ。

最終章 あらたなるたびじ

王国に帰還した俺たちは、世界を救った救世の勇者として迎えられた。富も名声も思いのまま。

「本当に良いのか？ そんな褒美で」

「はい」

俺は王との謁見の際に褒美に欲しいものを問われたので、あるものを要求した。

アルマの家に入り、切断された右肘に俺の右腕をくっつけてもらう。

「ふう、ようやくひと心地ついたぜ」

「バレずに済んでよかったわね」

「ちゃんと聖者の右腕は先代勇者様のお墓に戻してくださいね」

「なんか今までが見慣れてるから変な気分っす」

俺の右腕が元に戻った後は、皆で最後の祝杯をあげた。今日で勇者パーティーは解散。この後は王国で高待遇で新たな仕事をするか、魔王討伐の報酬でひっそりと暮らすか。

「みんなはこれからどうするんだ？」

「私は今まで通り魔術の研究に勤しむわ。まだまだ魔王に通用しなかったし」

「私は聖女としてこの国と宗教を守っていきます。この旅の記録もつけなければいけません」

「あたしは町に戻って冒険者を続けるっす。キングスライムがいればどんな魔物でもイチコロっす」

皆で酒を飲み、豪華な料理に舌鼓を打った。まあ、流石に懲りたのか、誰もヤナに酒を飲まそうとはしなかったし、ヤナ自身も気を付けていたが。

翌朝、俺は聖劍を腰に下げて国境の門へ向かっていた。

俺が国王に貰った褒美は「旅」だ。本来、魔王討伐が終了した勇者は王国の宗教の象徴として国内で活動するそうだが、俺は偽りの勇者。例え本物になったとしても、祭り上げられる資格はないし、今回のことで自分の限界も見えた。

「行くのね」

「あなたが帰ってくるまで、この国は私が守って見せます」

「あたしももっと冒険して強くなるっす」

出発時刻を告げていなかったのに全員揃うとは、これが一緒に旅をした仲間ってやつなのか
な。

「じゃあみんな、また会おうぜ」

俺は国境の門を潜り、新たな旅に出た。

時計仕掛けの魔術師

序章 父親の思い出

時輪守の父、時輪想は魔術師だった。

いつも難しい本を読んで頭を捻り、魔術の実験に明け暮れていた。

子が父の仕事に興味を持つのはよくあることだ。

まだ幼かった守も、想が家にいない時を見計らっては部屋に忍び込み、本棚にある魔術の本や、机の上の実験道具で遊んでいた。

いつか自分も魔術師になるのだ、なれるのだと信じて疑わなかった。

だが、守は八歳になっても魔術の才能は目覚めなかった。

魔術は生まれつきの才能が大部分を占める学問だ。魔力が少なければ一度の魔術使用量は減り、頭が悪ければ魔術書を解読できず、魔術の最奥に辿り着くことはできない。

想が子供を作ったのも、愛し合ったからではなく、自分の魔術を子孫に継承するためとというのが一番大きかった。

結果、想は家族を捨て、家を出た。母は絶望し、守にあたったが、守はまだ諦めなかった。まず守が考えたのは、才能を他の何かで穴埋めする方法だ。

守は身体を鍛えた。「健全な精神は健全な肉体に宿る」と考えたためだ。

それから、十年の月日が経った。

第一章 十八歳の誕生日

ぶ厚い本が丁寧な整頓された本棚に囲まれた小さな部屋で、十八歳になった守は上半身裸で腕立て伏せをしていた。

「はぁ……はぁ……」

今日のノルマをクリアすると、滝のように流れ出る汗をタオルで拭く。

十年間の厳しいトレーニングによって、守の身体は引き締まり、無駄な脂肪はなく、それでいて筋肉質に仕上がっていた。

守はいつも通り、一冊の魔道書を本棚から取り出すと、右手に本を持ち、左手を突き出して魔道書に書いてある文章を唱える。

それは、色々な言語がちや混ぜになった不思議な文章だった。実際、守にもどういう意味なのか理解できていない。だが、これが初級の魔道書なので仕方がない。

最後の文章を唱え終わる。これで、もしも魔術師の素質があれば、魔力が自分の素質に合った形で放出される——のだが、守の突き出した左手からは、特に何も変化がない。

「はあ……」

守は魔道書を閉じ、本棚に収める。

(親父が出て行って十年。身体だけ大きくなって、魔力は一向に上がらない)

悔しさに歯がみするが、守は物に当たったりはしない。それは無駄なことだと知っているからだ。

それでは母親と同じになると、知っているからだ。

想が家を出て行ってから、程なくして母親も出て行ってしまった。

それからは、一人でなんとかやって来た。

毎月銀行に振り込まれる謎の資金で家賃、生活用品などを揃え、近所の人に教えて貰って料理もマスターした。

その上で、魔術の勉強を怠らず、学校にも通い、身体まで鍛えたのだから、守の努力は凄まじいものだった。

だが、守を支えた言葉のお陰で、守はそれを苦と思うことなく生きてきた。

「努力はどれだけでも足りない」

それは想の口癖だった。

魔術の最奥に到達するためには、何十年も、それこそ死ぬまで弛まぬ努力が必要だ。しかし、一生に近い努力をしても、最奥に至れる者は皆無だ。

ではどうするか？

答えは簡単。弟子や子孫に夢を託すのだ。

自身の研究成果を本や資料、最近ならパソコンデータとして残している者もいるかもしれない。より慎重な者は暗号化して、子孫に残す。

たとえ自分が至れなくても、自分の子が、それが無理でもその孫が——そうやって魔術師の家系は出来上がっていく。

しかし、守は次に繋げることができなかった。魔術の才能がなかったのだ。

別に、守に魔術の才能がなかったからといって、その子供にも魔術の才能が遺伝しない訳ではない。

だが、想は早々と諦めた。

「くっ……！」

昔のことを思い出し、悔しさ、情けなさで水の入ったペットボトルをグシャリと潰す。そんな時、呼び鈴が鳴った。

「誰だ？ こんな朝早くに……」

このままの格好では不味いと思い、適当にTシャツを着てドアを開ける。

そこには荷物だけが置かれ、配達員などはいなかった。

「これは……」

そこにあつた奇妙な札が何重にも貼られたダンボールには見覚えがあつた。

想が魔術の研究に必要な物を海外から届けて貰うときに使っていた札だ。

勝手に開いて中身が出てきたりしないように、魔術的な封印を施してあるのだ。

「何で今更俺のところ……」

渋々ダンボールを家に上げる。もしかしたら守の魔術研究に役立つ物かもしれないからだ。

玄関でそのまま封を切り、中身を開ける。嚴重に守られた中に入っていたのは、時計だつた。

古いタイプの腕時計だ。ベルトの革を見るに、かなりの骨董品と思われる。

「何だこれ？」

ダンボールをひっくり返すと、メモ用紙が一枚出てきた。

そこには住所が書かれていた。

(ここにいけば何か分かるかもしれない)

書かれた住所にあったのは一軒家だった。少し古くさいが、別段特筆すべき点はない。

(ここに一体何があるんだ……?)

呼び鈴を鳴らすと鍵を開ける音がした。しかし、少し待っても重たそうなドアが開く様子はない。

「ドアを開けて入ってきて」

「……?’

家主からの声に、ドアノブに手をかけ、ドアを開ける。

そこにいたのは、中学生くらいの女の子だった。真っ白な髪は伸び放題で、服はジャージ。風呂にももう何日も入っていないのか、少し汗臭い。

「何よ」

少女の言葉に、当初の目的を思い出す。

「あの、これ……」

ポケットに入っていた腕時計を見せると、少女の目の色が変わった。

「時計仕掛けの魔術師……」

少女が呟くように何か言ったが、小さくて守には聞き取れない。

「へ？」

「あなた、これを何処で？」

「想……親父が送ってきて、こここの住所と一緒に」

「想って、時輪想？」

「親父を知ってるんですか？」

その言葉を聞いて、少女は何かを確信したような表情へと変わる。

「自己紹介がまだだったわね？」

「あ、はい」

「私の名前は犬飼羊。《本》の魔術師」

それを聞いて守は愕然とする。

（こんな小さな娘が魔術師なのに、もうすぐ大人の俺はなにをしているんだっ!!）

「で、あなたは？」

それを聞いて守は正気に戻る。

「時輪守。魔術師を目指してます」

「守。この腕時計のことを説明しておくわ。私の部屋に来なさい」

(呼び捨て……。俺の方が年上なのに。いや、でも相手は魔術師だし、見た目通りの年齢じゃないのかも……)

複雑な思いを胸に、階段を上がって二階へ向かう。

二階にある部屋は一つだけだった。

「うわぁ……」

その部屋を見た感想は、まるで……いや、正真正銘魔術師の部屋という感じだった。

部屋を囲むように置かれた本棚には古臭い分厚い本が並び、窓際にある机には羽ペンと羊皮紙を丸めた物が置かれている。そのほかに、ちゃんとしたボールペンやシャープペンといった、普通のペンや紙も置かれていた。

羊が部屋に唯一ある椅子に腰掛け、足を組む。スタイルのいい大人の女性がやればドキツとするような色っぽい動作だが、幼児体型の羊がやっても全くドキツとしなかった。

「さて、あなたにこれの説明をしないとね」

そう言つて腕時計を机に置く。

「これは時計仕掛けの魔術師という魔道具なのよ」

確かに、骨董品の中には希に大昔の魔術師が完成させた魔道具が紛れ込むことがある。そういった物を様々な骨董品の中から発掘して、研究するのも魔術師の研究の一つだ。

「なら、何で羊の家に直接送らなかつたんだ？」

「ここからは私の推測だけど、あなたに渡すためだと思う」

「？」

「私には二つの選択肢がある。一つは時計仕掛けの魔術師を分析、研究し、資料を残した後に破壊する」

魔道具の中には危険な物や、現代の魔術師には扱えない物も存在する。そういった物が悪用されるのを防ぐために、資料だけを残して破壊してしまうのも一つの手だ。

「その魔道具には、どんな力があるんだ？」

「ただの人間を魔術師にできる唯一無二の魔道具」

その言葉を聞いた途端、守は時計仕掛けの魔術師に手を伸ばしていた。

それは、守が求めてやまない物だったからだ。

だが、時計仕掛けの魔術師は羊の手に攫われる。

「駄目よ」

「何故!? それがあれば俺は魔術師になれるのに!!」

途端に、羊の目が冷たくなる。それは、まさに冷酷非常な魔術師のそれだった。

「なんの代償もない奇跡は存在しない。詳しくは分からないけど、時計仕掛けの魔術師にも何かしらの代償があるわ。それでも、あなたはこれを欲するの?」

守は躊躇なく答える。

「欲しい!!」

羊の目から冷たさが消える。

「そう……」

時計仕掛けの魔術師を守に荒っぽく投げ渡す。それを守は優しく受け取った。

「さつき、私には二つの選択肢があると言ったわね? これが二つ目の選択肢。あなたに時計仕掛けの魔術師を渡して、あなたを魔術師にする」

守は緊張で震える手を押さえながら、時計仕掛けの魔術師を左手首に巻き付ける。

「その代わり、あなたの進歩状況と共に時計仕掛けの魔術師の研究もさせてもらうわ」
「じゃあ、おまえが魔術を教えてくれるのか?」

「今まで十年やって駄目だったんでしょう？ もう独学じゃ無理って事よ」

守は言い返すことができなかった。事実であったし、確かに独学で魔術師になった者は少ない。

「よろしくお願いします」

守は潔く頭を下げる。

「良い心がけね。これからよろしく、守」

第二章 時の魔術師

羊が最初に行ったことは、時計仕掛けの魔術師の説明だった。

「この魔道具は自分の心臓の鼓動と時計の秒針のタイミングを完全に合わせることで、魔力を生み出すことができるわ」

守も鈍くはない。今の説明で羊が言いたいことは理解できたつもりだ。

普通の魔術師は自分の魔力を使う。だが、時計仕掛けの魔術師を使えば、これからも時計仕掛けの魔術師ありきの魔術しか使えないということだ。

しかも、自身の心臓の鼓動と時計の秒針のタイミングを完璧に合わせるといふ離れ業を

しなければならぬ。

つまり、普通の魔術師とは鍛錬のしかたが違うということだ。

「それと、魔術属性についてだけど——」

魔術属性とは、いわばどの魔術を一番得意としているかによって、二つ名を付けるということだ。この二つ名は割と重要で、魔術師として他の魔術師に名乗る際「〇〇の魔術師」というように名乗ることになる。

「時計仕掛けの魔術師を使う場合、強制的に魔術属性は《時》になるわ」

つまり、守はほぼ《時》にまつわる魔術しか使えなくなるということだ。しかも、それが向きか不向きかも分からずに。

「どうせこのままやつても魔術師になれたかどうか分からないんだ。《時》の魔術師。かつこいいじゃないか！」

羊は呆れたように鼻を鳴らす。

「じゃあ、時計仕掛けの魔術師に魔力を流して。それであなたが所有者として登録されるはずよ」

言われるままに、守は時計仕掛けの魔術師に魔力を流す。

今まで止まっていた時計仕掛けの魔術師の針が、チクタクと動き出した。

「よしー！」

「おめでとう。《時》の魔術師、時輪守」

羊も軽い拍手で祝福する。

「じゃあ早速だけど、あなたが私の弟子になるための条件を伝えるわ」

（条件があるのか……。まあ、当然か）

守は生唾を飲み込む。一体どんな厳しい弟子入り試験があるのか、恐怖と同時に期待に胸を膨らませる。

「守、家事はできるかしら？」

「は？」

いつ試験が始まっても良いように身構えていた守の肩から力が抜ける。思わず間の抜けた声が口から出た。

「まあ、ずっと一人暮らしだったから、それなりには」

「そう。なら合格」

「????？」

ますます訳が分からなくなる。なぜ家事ができれば合格なのだろうか。家事に關係する特訓でもするのだろうか。

「家事と魔術となんの關係があるんだ？」

「ん？ ないわよ？」

「じゃあ、何で家事ができるかどうかなんて気にするんだよ」

「私に弟子入りする条件が、私の身の回りの世話をする事だからよ」

守は呆れかえった。要するに、自分の家政婦を兼ねて弟子にしてくれるということか。

「私のような一流の魔術師の弟子に無料でなれるのよ？ 家政婦ぐらいなりなさい」

ここでNOといえれば時計仕掛けの魔術師は記録を取った上で破壊され、守の魔術師になる道は閉ざされてしまう。ここでの選択は二つに一つだ。

守は頭を掻きながらあくまで嫌々という感じが出るように言う。

「分かったよ。身の回りの世話、やってやろうじゃねえか」

羊は満面の笑みで言う。

「ええ、損はさせないわ」

その笑顔に、不覚にもドキリとしてしまう守であった。

「おまえ、歳はいくつだ？」

「十五歳」

答えを聞いたとき、守は何故か納得してしまった。

（俺が覚えたこの感情は恋愛感情ではない、母性愛だ）

守は微笑みながら羊の頭を撫でる。

「な、何すんのよ！」

嫌がる羊は暴れるが、十年間毎日のように筋トレに励み、鍛え抜かれた守の腕から逃れることはできない。

やがて、憎たらしそうな顔をしながらも、羊はされるがままになる。

「さて、じゃあ早速準備に行かないとな」

「準備って？」

「とりあえず一旦家に戻って、魔術の特訓用の道具とかを持ってこようと思ってな」

すると、羊がポンと手を打つ。

「じゃあ、着替え一式と日用品も持ってきなさい」

「？ 何で？」

羊はビシッと守を指さして言う。

「いちいち行ったり来たりしてちゃ面倒でしょ。住み込みで働かせてあげるわ」

確かにそれは効率が良いだろう。だがそれは、効率だけを見た場合だ。流石に守も十五歳の少女に欲情したりはしないと自分を信じたいが……。

「……じゃあそうさせてもらおうかな」

僅かな逡巡の後、守は自分を信じることにした。

こうして、守の弟子兼家政婦としての生活が始まった。

第三章 守の一日

守の朝は早い。朝起きてすぐに、日課の筋トレをして目を完全に覚ます。

その次は、朝食の準備をする。手を抜きすぎると怒られるが、本気で作った物も朝には重いと怒られる。程々が重要なのだ。

今日はベーコンエッグとサラダ、ヨーグルトにした。

料理を作り終わったら羊を起こしに向かう。

「師匠、朝だ。起きろ」

「ん。分かったわ」

羊は朝が弱いのではなく、夜中まで魔術の鍛錬や研究で起きているため、朝起きれないのだ。ちなみに守は、肉体を健康に保つには睡眠も重要だと考えているので、夜はしっかりと眠るようにしている。

羊が起きれば、着替えを置いて部屋を出て行く。最初羊は守に「面倒だから着替えさせて」と言ってきたが、犯罪の臭いがしたので流石に勘弁してもらった。

おぼつかない足取りで階段を降り、リビングのテーブルへ。半開きの目で料理を視認し、スプーンで適当に掬って食べる。

そもそも、羊はもう何年も一人でこの屋敷に住んでいるのだ。その間、食料はどうしていたか？

それを考えれば、料理なんてものは、羊にとっては「不味くなければ良い」のだ。

「なあ、師匠」

「なに守」

守がこの屋敷に来て少し経つ。その間、ずっと気になっていたことを口にした。

「学校、行かねえのか？」

羊は十五歳。普通なら中学三年生。受験生として高校入試に挑む年齢だ。

だが、羊が外に出たところを守は見ることがなかった。

「私は魔術師よ？ 何でそんなところに行かなくちゃ行けないわけ？」

「でも、魔術師でも社会生活は大事だろう？」

昔は魔術師という職業も存在したが、このご時世、そんな職業は存在しない。

加えて、魔術師でも想のように所帯を持つ場合もある。そんなとき、「職業は魔術師」と言っている顔をする女性は滅多にいない。

ようするに魔術師は裏の顔。表の顔が必要なのだ。

「大体、どうやって稼いでんだよ？」

羊は食べていた朝食をゴクリと飲み込んで席を立つ。

「そうね。もう家政婦の生活にも慣れてきたみたいだし、そろそろ魔術師の訓練もしましうか」

守は内心喜んだ。

守は魔術師になるためにこんなやりたくもない家政婦をやらされているのだ。守にしてみれば、ようやくここから本番だ。

やって来たのは屋敷の庭だった。

「この前も言ったけど、守の特訓は普通の魔術師のものじゃない。異端の特訓よ」「分かってる」

守もたとえどんな辛く過酷な修行でも耐えてみせるという覚悟を込めて頷く。

「そう。じゃあまずは、心拍数を時計仕掛けの魔術師と同調させる訓練よ」

前述の通り、時計仕掛けの魔術師は振動の鼓動と同調させることによつて魔力を生み出す。それは守も覚えていた。

「そこに坐禅を組んで座りなさい。精神統一よ。それができたら呼吸法を少しずつ調節しながら時計仕掛けの魔術師と心臓の鼓動を同調させるの」

精神統一は守も筋トレの後に行つてゐるためすんなりとできた。しかし、どれだけ呼吸法を変えても時計仕掛けの魔術師は魔力を生み出さない。

「人間の心拍数は平均一・六秒。それをきっかり一秒に調整するの」
つまり、遅くしては駄目なのだ。少くだけ速くする必要がある。

（心拍数を速くするなら、呼吸を速くすれば——）

守が呼吸法を変えると、時計仕掛けの魔術師から魔力が溢れ出た。

「第一段階クリアね。及第点だね」

「よしー！」

しかし、守が集中を止めた途端に魔力は消えてしまう。

「心臓の鼓動と時計仕掛けの魔術師との同調で魔力が生まれる。これがどういふことか分かる？」

守は考える。

（おれが集中を解いた途端魔力は消えた。そして、魔力が消えれば魔法は使えない……）

「俺は、戦闘中も心臓の心拍数をコントロールし続ける必要がある？」

「そういうこと」

羊は正解と指を鳴らして言うが、これは簡単なことではない。戦闘になれば走り回ることもあるだろうし、怪我をすることもあるだろう。危険を回避するためには咄嗟に魔術を使わなければいけないこともあるだろう。その際も、常に心臓の鼓動を意識し続けなければならぬということだ。

「無理だろ。そんなの……」

平常時の今でさえ成功したのはたったの一瞬なのだ。動きながらなんて無理に決まって

る。「じゃあどうする？ 諦める？」

羊が挑発的に笑うが、守は首を横に振る。

「いいや、冗談じゃない」

羊はもう答えを知っていたかのようにフンと鼻を鳴らす。

「じゃあ、今日の修行はここまで」

「え？」

時計を見る（時計仕掛けの魔術師マジは普通の時計としても使用できる）と、まだ一時間と少々しか経っていなかった。

「俺はまだやれるぞー！」

足を止めた羊が、はあとためいきを吐く。

「私の研究もあるのよ。守にばかり構ってられないわ」

そう言って屋敷の中に入って行ってしまおう。

守は逡巡した後、羊と共に屋敷の中に入った。

羊と共に向かったのは羊の私室だ。私室と言っても、最初に守を通した二階の部屋だ。いかにも魔術師の研究室という感じの部屋で、生活感のある物はベッド以外何一つ置かれ

ていない。

「何で着いてくるのよ？」

「他の魔術師の研究なんて中々見られるものじゃないからな。それに、見るのも勉強だ」

羊はため息を吐いた。

「好きにしなさい」

本来なら、魔術師の研究は他の誰にも見せられるものではない。だが、師弟だけは別だ。魔術師が弟子を取ったということは、自分の研究を受け継がせるという意味だからだ。全て見せておかなければ弟子が師匠の研究の続きをしようとして失敗するかもしれない。そうなれば師匠の実験の成果は無駄になる。それを防ぐために羊も守の同居を提案したのだ。羊がパンと手を鳴らすと、本棚から数冊の本が羊の元へ飛んでくる。

羊が机に座りながらパチンと指を鳴らすと、パラパラと一斉にページが捲れて、羊の読みたかったページが現れる。

その姿は、まさしく魔術師と呼ぶに相応しいものだった。

「凄く……」

守は無意識に呟く。

羊は務めて冷静に、羽ペンにインクを付けて羊皮紙に文字を走らせていく。

「師匠はなんの研究をしてるんだ？」

魔術師には、それぞれ「研究テーマ」というものが存在する。文字通り、何を研究するか決めるものだ。

「守。あなた本の本質はなんだと思う？」

それはつまり「本はなんのために生まれたのか？」という問いだ。答えは千差万別だろうし、正解はないかもしれない。それでも、羊の中には羊なりの「答え」があるらしかった。「確か、本の最初は洞窟の絵。それから粘土板に変わって、木の板を繋げたものへ。今みたいな紙の本ができたのはエジプトだったか？」

「あら、詳しいじゃない」

魔術書なども読む都合上、守もそれくらいは知っている。

守が考え倦ねていると、時間切れとばかりに羊が正解を言う。

「本はね、記録を貯蔵するために存在するのよ」

もっともらしい理由だと守は思った。

「じゃあ、記録の貯蔵はなんのためにすると思う？」

考え倦ねた末に守は答える。

「未来の人間に自分達のことを伝えるために？」

羊は羽ペンを自分の顎に持つて行きながら唸る。

「当たらずしも遠からずね」

羽ペンのインクが切れ、再びインクを羽ペンの先に付ける。

「答えは、未来で過去に起きたような最悪が再び起きたとき、それを回避するため。」

つまり羊は私室に来て初めて守を見ながら言う。

「本は未来予知のためにあると思うの」

つまり羊は、「過去は未来の為にある」というのだ。

美しい考え方だと守も思う。

「それで、結局師匠の研究は何なんだよ？」

「あら、言ったでしょう？ 未来予知よ」

確かに未来予知ができれば便利だろう。だが、それは《本》の領分から些か外れている

ように守は思う。

「《占》の魔術師とかに任せれば良いだろう？」

「あら、そんな神頼みと私の研究を一緒にしないで欲しいわね」

羊は羽ペンを置き、自分の胸に右手を持つてくる。

「私はあくまで人間の力で未来予知をしたいのよ。神頼みなんて、魔術師の本質から外れているわ」

確かにその通りだと守も思う。

古来魔術師とは天災を回避、あるいは操作するために生まれた。早い話が、神様に憧れて生まれたのが魔術師なのだ。その魔術師が神頼みでは、原点回帰も良いところだ。

「ってことは、ここにあるのも貴重な本なのか？」

この部屋には、壁に沿って本棚が置かれており、その本棚の中にも所狭しと本が並べられている。中には本棚に入りきららずに床に積まれている本もある。

「まあ、中には貴重な本の写しもあるわね。例えば……」

羊が指を鳴らすと、ハードカバーの分厚い本がゆっくりと羊の元へ飛んでくる。

「これは死海文書の写しね」

「？」

死海文書といえば、予言の書の代名詞だ。いまま研究が進められるいると聞く。少なく

とも、素人が本屋で買えるような代物ではないだろう。

「他にも予言の書と呼ばれている本は大体写本があるわ」

守にはこの本棚にある全ての本が宝の山に見えた。

「……この本を使って、どうやって未来予知をするんだ？」

「予言の書と一言で言っても、その殆どは眉唾よ」

それはそうだろうと守も思う。もしも予言の書が一〇〇パーセント的中していたら、態々未来予知なんて研究をする必要がない。ノストラダムスの大予言しかり、二〇〇〇年問題しかり、予言は大体外れるものだ。

「だから、数多の予言の書から共通する部分だけを抜き取っていくのよ。そうすると、必然的に信憑性が上がるでしょ？」

偶然は三つ重なれば必然となるという言葉もある。異なる時代、異なる文明、異なる地域で書かれた予言の書の内容が重なるということは、その予言が当たる確率が上がるということに他ならない。

「気の遠くなるような作業だな」

様々な言語を操り、様々な予言の書を集めなければならない。言語を覚えるところから

やろうとすれば、途方もない時間が掛かるだろう。

「守も魔術師になるなら覚悟しなさい。魔術師の研究なんて数代重ねたのに失敗するくらいなことまでザラよ」

それから数時間に渡って、羊の研究は続いた。その間、守は部屋にある本を読み耽っていた。

気付けばもう良い時間だ。

(そろそろ昼飯の用意しないとな)

パターンと本を閉じ、羊に声をかける。

「師匠。昼飯何がいい？」

羊は特に気にした風もなく適当に言う。

「何でも良いわよ」

作る側としては「何でも良い」や「おすすめ」や「適当に」が一番困るのだ。何を作れば良いかも分からない。

(俺が食いたい物でいいか……)

守は一人暮らしの時は、昼飯はもつぱら麺類だった。

(スパゲッティでも作るか……)

そう思い立ち、部屋から出て行く。

守は習慣的に、スパゲッティと言えばミートソースが主流だ。スパゲッティの中で一番上手いと思っている。

ミートソーススパゲッティ二人前を作り終わると、羊を部屋へ迎えに行く。

「師匠、昼飯ができたぞ」

「そう」

羊は羽ペンを置き、羊皮紙を丸めて部屋の隅に置く。

リビングでミートソーススパゲッティを食べ、皿を洗い終わると、午後から晩飯の準備までは自由時間だ。

守は自由時間でも魔術師としての鍛錬を欠かさない。と言っても、魔術師でない守ができる魔術師としての鍛錬は限られる。

普通の魔術師の鍛錬は見聞を広めるために魔術書を読んだり、魔力コントロールの鍛錬なのだろうが、守はそもそも魔力を自分で放出できない。

だから、守流の訓練をする。

とにかく身体を鍛えるのだ。

守は「健全な精神は健全な肉体に宿る」という言葉を信じている。健全な肉体に健全な精神が宿るのならば、魔力さえも宿るかもしれない。

故に、守は身体を鍛える。

それが、時計仕掛けの魔術師を使うことになった自分には意味のない事だと知っ
ていても。

(やっぱり身体を鍛えないと落ち着かないな……)

十年間続けた習慣は中々治らないらしい。

筋トレが終われば、次は時計仕掛けの魔術師を使った特訓だ。坐禅を組み、心拍数を

コントロールする。

心臓の鼓動と秒針が重なるとき、魔力が迸る。

だが、それも一瞬。

約一秒で魔力は消え去った。

守はそれを繰り返す。

魔力が発生するのが心臓の鼓動と秒針が重なる一秒だけなら、心臓の鼓動と秒針を二回

連続で重ねればいい。そうすれば、二秒間魔術が使える。

ひたすらそれを繰り返す。

そうしているうちに数時間が過ぎ、既に時計は五時を回っていた。

(そろそろ晩飯の準備をしておくか……)

汗だくになった自分の身体をタオルで拭きながら脱衣所へと向かう。

こんな汗だくの身体で料理を作るのは御免だと思い、シャワーを浴びる。

洗濯済みの服に着替え、羊の部屋へ向かう。

羊はまだ魔術の研究の真つ最中だった。

「師匠、今日の晩飯何がいい?」

「何でもいいわ」

昼飯の時の答えから、今回もそう言われるのは分かっていた。羊はあまり食に頓着しないタイプの人間なのだ。

(カレーでいいか……)

守も一人暮らしが長かったとはいえ、そこまで料理が得意なわけでもない。作れる料理は限られる。

カレーは何を入れても結構上手くできると聞いて、まだ一人暮らしを始めたばかりの頃によく食べた料理だ。

とはいえ、守も食にこだわるタイプではないので、隠し味や寝かせなど凝ったことはしない。

辛口は辛くて味が分からないし、甘口は甘ったるくて途中で気持ち悪くなるので、守はカレーは中辛派だ。

カレーを継ぎ足す人はジャガイモを入れないらしいが、守は毎日カレーは流石に嫌なので、継ぎ足しはせず、ジャガイモも入れる派だ。

こうして、何の変哲もないカレーができた。

皿に盛り付け、食べられる準備をしてから羊を呼びに行く。

「師匠、晩飯ができたぞ」

「分かったわ」

ベッドに寝転んで本を読んでいた羊は、本をめくるページを止め、本を閉じてリビングへ向かう。

守は流し目で羊が読んでいた本のタイトルを見る。「白馬の王子と麗しの姫君」という

タイトルの本を。

(どんだけ難しい本読んでるのかと思いきや、以外と少女趣味なんだな……)

守は、羊は《本》の魔術師だから、難しい本ばかり読んで息が詰まっていると思っただのだが、思い違いだったらしい。

「なあ、師匠」

「なに？」

カレーを食べるながら、守は羊に問い掛ける。普通なら「お行儀が悪い」と怒られるところだが、羊はそういうことを気にしない。

「師匠は何で《本》を選んだんだ？」

魔術師は一つの属性を選ぶが、素質が一つしかないなんてことは滅多にない。魔術師になれる素質があるのなら、数個の属性の中から一つを選ぶことが出来るはずだ。

羊はその中から《本》を選んだ事になる。

「なに？ 今更《時》の魔術師を降りたいなんて言っても聞かないわよ？」

カレーを特に感想も言わず、味も気にせずモシヤモシヤと食べる。

「いや、ただ単に気になってさ」

カレーを食べ終えると、スプーンを置き、羊は語り出した。

「私には友達がいなくてね。本だけが友達だったわ」

守は口を挟まず、黙って聞いていた。

「ま、一言で言うくと本が好きだったのね。それだけよ」

そう言うと、食器を流し台に持って行き、口を濯いで二階の私室へと向かう。これでの話は終わりということなのだろう。

守は自分の食器も流し台に持って行くと、スポンジに洗剤を滲ませ、食器を洗い始める。

黙々と食器を洗い、ピカピカになった食器を乾燥機に均等に並べ、乾かす。

これで食事の片付けは終わり。残る仕事は……。

浴槽を磨き、湯を張っておく。

(一応知らせておいた方が良いか?)

守としては温めのお湯にゆったり浸かるのが好きなのだが、熱めのお湯に浸かるのが好きな人もいるだろう。

「師匠、風呂が沸いたぞ」

羊はベッドでファンシーな本の続きを読んでいた。

「そう。じゃあ頂こうかしら」

そう言つて脱衣所へ向かう。

(さて、俺はどうしようかな……)

脱衣所と風呂場には近づかない方が良さだろう。そうなるとやれることは限られる。

(自室でのんびりするか……)

そう思い立ち、自室で魔術書片手にうんうん唸る。

元々、魔術書というのは暗号文で書かれている場合が多い。

では、誰に宛てた暗号文か？

それは、同じ研究を共有する未来の子孫に宛ててだ。

だから、魔力の波長やキーワード、血などが鍵となっている場合が多い。

では、何故世間に魔術書が出回っているのか？

それは、過去の解読された魔術書が模写され、出回っているからだ。

加えて、あえて魔術師を増やすために、簡単な魔術を載せた指南書を作っている魔術師

も存在する。

守のような魔術師を志す者が読んでるのはそれだ。

と言つても、守のような才能のない魔術師には、その「簡単な」指南書ですら難解なのだ……。

しばらく魔術書を読んでいると、扉が開いた。

「おい、ノックくらい——」

そう言つて横目流しに守が見たものは。

一糸纏わぬ全裸の羊だった。

「師匠！ アンタちよつとは羞恥心持てよ!!」

風呂上がりのため、身体は紅潮しており、長い髪は濡れそぼり、やけに色っぽい。

「ちゃんと待機してなさいよ。身体を拭いて、髪を乾かしてもらおうと思つてたのにいいんだもの」

目を手で隠しながら、守は必死に言い返す。

「俺は断つただろ!!」

裸のまま、羊は不用心に守に近づく。

「それは私と一緒に風呂に入つて身体を洗うことでしょ？ 身体くらい拭いてくれても良いじゃない、召使いなんだから」

「家政婦だろ!？」

しばしの間答の末、身体は自分で拭き、着替えをした後、髪は守が乾かすという結果に落ち着いた。

(シャンプーの良い匂いがする……)

髪を乾かしながら、守は心拍数が上がらないように必死に抑える。

「守」

羊が真面目そうな表情と口調で言う。

「明日から特訓よ」

「? おう」

その特訓の過酷さを、このときの守はまだ知らないのであった。

第四章 特訓

守が起きると、その日は珍しく羊が起きていた。

「珍しいな。こんな早くに」

しかも、自分で紅茶を煎れてカップを出し、飲んでいるのだ。

(いつもは俺より遅く起きて、俺より早く寝るから、頼まれたことなかったけど、ちゃんと自分でできるんだな)

守が感心していると、羊がおかしなことを言い出した。

「守、今から特訓よ」

「今から？ いや、飯を食ってからでも——」

そう言おうとした守は、羊の目を見た瞬間に言葉が引つ込んだ。

目元が赤く腫れていたのだ。

「師匠、まさか寝てないのか？」

「よくあることよ」

魔術師としては一人前とはいえ、羊はまだ十五歳だ。ちゃんと寝ないと発育が悪くなる。

だが、羊は有無を言わせぬ雰囲気で二冊の本を持って外に出た。

「着いてきなさい」

仕方なく黙って着いていく。

外には不自然な程に誰もいなかった。

キョロキョロと辺りを見渡すが、道の先にも、通行人どころか車もない。

(なんだこれ。どうなっているんだ……)

困惑する守に、羊がその答えを言う。

「凄いでしよう。人払いの結界。町一つ覆うのに丸一晩かかったけど」

どうやら町の人たちは、羊の張った結界のせいで町からいなくなってしまったらしい。

だが、守からしてみれば、それは魔術師の領分から外れている行いに見えた。

「こんなことをして、騒ぎになったらどうするんだ!？」

「大丈夫よ。私の師匠……《心の魔術師》に頼んで、精神的な結界も張ったから、誰もここに入れないことを不思議に思わないわ」

それでもまだ疑問は残る。

「何のためにそんなことを……」

羊は二冊の本を浮かせ、守に言う。

「特訓。守には今から私と戦ってもらおうわ」

模擬戦。確かに魔術師は決闘することも珍しくはない。故に、その訓練をするのも不思議ではない。

議ではない。

「エリアはこの町内。私を倒せば勝ち。一日経っても私を倒せなければ守の負けよ」

だが、昨日は基礎的な時計仕掛けの魔術師の訓練だったのに、なぜ今日は急に実戦訓練なんてするのか。守には分からなかった。

だが、この訓練は間違いなく「自分」のためになる。

（俺のためになることなら、殺し合いだってやってやる。たとえ自分より格上の魔術師が相手でも！）

守の目を見た羊は、フツと笑みを浮かべた。

「覚悟は決まったようね。じゃあ——スタート！」

言うと同時に二冊の本が守に向かって飛び込んでくる。

《本》の魔術師の攻撃力は決して高くない。魔術師全員の総合評価で見ればかなり低位だろう。

だが、それでも素人同然の守よりは強い。

しかも、高速で飛んでくるのはハードカバーの本。頭に喰らえば気絶は必至。

それでも、守はあえて距離を詰めた。

（俺が距離を離せば、もうこれ以上近くにはこれない。近距離の今しか勝算はない！）

一冊目の本が高速で守の頬を掠め、二冊目の本が上半身に意識を裂いた守の脛を狙う。

だが、その瞬間に守の鼓動と時計仕掛けの魔術師の秒針のタイミングが重なる。時間を止め、二冊目の本を飛び越えて羊に向かう。

同時に時間停止が解け、二冊目の本が一秒前に守の脛のあった場所を通過する。

「へえ。上手く時計仕掛けの魔術師を使っているじゃない」

思わず羊も感想を述べてしまうほど、タイミングも持続時間も完璧。守の努力が分かる魔術だ。

だが、付け焼き刃の努力は才能には叶わない。

——ゴッ！

凄まじい音がして、守の頭に本が直撃する。頬を掠めた一冊目の本が、Uターンして守の頭を打ったのだ。

（流石《本》の魔術師。本に関することは完璧か……だが——）

——カチッ。

——ドクン。

付け焼き刃の努力では才能には勝てない。だが、才能の限界はあるが、努力による限界はない。

守の心臓の鼓動と時計仕掛けの魔術師の秒針が重なり、再び守の周りに魔力が迸る。

まだ守は《時》の魔術師としては未熟だ。一秒間だけしか魔術を使えない。だが、それは、一秒間だけならば《時》の魔術師としての力を振るえるということだ。

自分に魔術をかけ、自分の身体を一秒前に戻す。

頭を下げ、先程守の頭を打った一冊目の本を走りながら回避する。

その姿に、羊は舌を巻いていた。

(ありえない！あの不意打ちの攻撃を、まるで知っていたみたいだ。躲すなんて!!) その隙に守は距離を詰める。

「しまっ——」

守は羊を押し倒し、地面に押し付ける。その際、羊の頭を左手でカバーすることも忘れない。

数秒の沈黙の後、羊は自分が負けたことを悟った。

「守。あなた、魔術の才能はないのに、戦闘の才能はあったのね」

「師匠。あんた、魔術の才能はあるのに、戦闘の才能はないんだな」

守が羊を解放すると、羊は服に付いた埃を払いながら立ち上がる。

「師匠。何でそんなに急いでるんだ？」

羊は数秒の沈黙の末、腹を括ったように話し始める。

「私が守を魔術師にしたのは、善意からじゃないわ」

「時計仕掛けの魔術師を解析するためだろう？」

「それももう終わっているのよ」

「？」

もう解析が終わっているというのは、この数日間で解析が終わったというわけではないだろうと守は考えた。時計仕掛けの魔術師は天才魔技師が作った魔道具だ。そうそう簡単に解析ができるわけがない。

「師匠が俺の家に時計仕掛けの魔術師を送ったのか？」

「いいえ。それをあなたに託したのは《心》の魔術師。私の師匠よ」

それでも納得はつ出来ない。守は魔術の才能がない。そんな人間に、解析が終わっているとはいえ、貴重な魔道具を、しかも郵送で送るとは思えない。

「何のために？」

「世界を救うために」

羊の真剣な目が過剰な表現ではないことを物語っている。

「詳しく聞かせてくれ」

場所が変わって羊の屋敷のリビングに来ていた。守がお茶を煎れ、羊が優雅にそれを飲む。「で、世界のために俺を魔術師にしたってのは？」

「一ヶ月前、私の『未来を予測』する研究が実を結び、世界の危機を予測したわ」

守は自分の煎れた茶を飲みながら、羊は続ける。

「その結果、二ヶ月後に世界は滅ぶと予測されたわ」

守は、机に思い切り手を叩き付ける。

「ちよつと待てよ！ その時点で二ヶ月後ってことは——」

「そう、あと一ヶ月よ」

それが羊が守の修行を急いだ理由なのだろう。だが、まだ疑問は残る。

「何で急に急いだんだよ。昨日はあんなにのんびりしてたのに……」

羊は言いにくそうに守に言う。

「予定が変わったのよ。本当なら私の師匠である《心》の魔術師が協力してくれるはずだったんだけど、海外から帰ってくるのが遅れそうなの」

このタイミングで遅れるということは、敵勢力の妨害によるものと考えた方が自然だろう。「それで、その《心》の魔術師の代役を俺にさせようか？」

羊は逃げも隠れもせず、椅子から立ち上がり、素直に頭を下げた。

「ごめんなさい。あなたを危険に巻き込んで」

守は度肝を抜かれた。羊の方が魔術師として格上で、師匠なのだ。いくら年下とはいえ、頭を下げるのは屈辱的だろう。

「頭を上げてくれ、師匠」

羊はゆっくりと頭を上げる。

「やってくれる？」

守は頭をガシガシと掻きまわしながら、渋々という感じで言う。

「俺がやらないと世界が滅ぶんだらう？　じゃあやるしかないじゃないか」

「守なら、そう言ってくれと信じていたわ」

羊がニツパリと笑みを浮かべながら言う。

その姿を見て、守は自分の顔が赤く染まったことに気付いていた。

慌てて目を逸らす。

「どうしたの守？ 顔が赤いわよ」

「い、いや。ちょっと疲れたかもしれない。今日の修行はこれで終わりでもいいか？」

「え、ええ。今日はもう十分よ。また明日ね」

そう言つて、羊は自室への階段を上がつていく。

守は自分で煎れたお茶を飲み干すと、無言で洗い物を始めた。

第五章 星宮真滅

守が夕食の準備をしていると、羊が紙束を数枚持つて階段から降りてきた。

「どうした？ まだ飯できてないけど」

「守、夕飯の準備が終わつたら聞いて欲しいことがあるの」

先程の話の続きだろうと思ひ、守はテキパキと準備を進め、夕食の準備を終える。

「で、さっきの話の続きだろ？」

「そうよ」

クリップで束ねた紙束を机に置き、守がそれを受け取る。

「詳しいことはそこに書いてあるけど、一応軽く説明するわ」

守は一ページ目をめくる。そこには、一人の人物の名前と顔写真、ざっくりとした経歴などが載っていた。

「敵は星宮真滅。《星》の魔術師よ」

紙束を見ると、妙に真滅の事ばかりがピックアップされているようだった。

「他の敵は？」

「いないわ」

「は？」

守の紙束をめくる手が止まる。

「私達の敵は星宮真滅ただ一人」

守は耳を疑った。

羊一人対真滅一人ならば、戦闘能力の低い羊が危険視するのも分かる。だが、羊の師匠である《心》の魔術師も一緒に行動しているはずだ。そして、顔も名前も知らないが《心》の魔術師は羊の師匠であるという話だった。それなりに強いはずだ。

「二対一。俺を入れれば三対一。そんなに強い相手なのか？ この真滅っているのは」
「違うわ」

「？」

「私達は魔術師教会というところに所属しているんだけど、その魔術師教会に所属する魔術師約一万人対真滅一人の戦争よ」

紙束を取り落とす。魔術師の戦いというものがどういものなのか守は知らない。だが、魔術師教会にも強い魔術師は大勢いるはずだ。それをふまえた上で一万対一ということは、それだけ真滅を警戒しているということだ。

「真滅に勝算はあるのか？」

勝算がなければこんなことはしないだろうが、それでも聞かずにはいられなかった。

「真滅の手には時計仕掛けの惑星があるわ」

それが何なのか守は知らないが、それと似た名前の魔道具を守は知っている。

無意識に守は自分の左手首に着いている時計仕掛けの魔術師を見た。

「時計仕掛けの魔術師は人間を魔術師にする為の魔道具だったけど、時計仕掛けの惑星は違うわ」

羊は真剣な目で言う。

「あれは、魔術師を神にする為の魔道具よ」

星宮真滅のページが終わると、時計仕掛けの惑星のページがあった。

それは、簡単に言えばただ所有者の魔力を貯蔵する道具と言うことだった。

「そこまで強そうな魔道具じゃないが？」

「そうね。でも、魔力の限界という枷がなくなった魔術師に不可能はないわ」

魔術師には、それぞれ得意な魔術というものがある。たとえば羊であれば《本》、守であれば《時》だ。だがそれは、最も効率的に魔力を魔術に変換できるからその属性を選んだに過ぎない。

魔力効率を度外視すれば、魔術師に操れない魔術はない。

「それに、真滅の《星》の魔術は厄介だわ」

真滅のページに《星》についての記述があった。

「この惑星全てが真滅のテリトリー。場所さえ分かれば、いつでも宇宙から流星を降らせて町ごと消し去れるわ」

《心》の魔術師が張った結界は、守の為の人払いであると同時に、真滅に勘付かれない為の対策でもあったというわけだ。

「でも、そんな凄い魔術師が、なんで魔術師教会の敵に回るんだ？」

魔術師教会は魔術師を守るための組織だ。だが、階級が存在する。基本は年功序列だが、希に生まれる優秀な魔術師は、一足飛びにその階段を駆け上がる。

真滅ほどの魔術師であれば、ヴィップ待遇も夢ではない。

「真滅はね。優秀すぎたのよ」

紙束の最初に真滅のざっくりとした経歴があると前述したが、そこに書いてあるのはほんの一行。「管理区画出身、後に隔離区画へ輸送」という言葉だけだった。

「あまりに強すぎる魔術師が生まれた場合、その子供は管理区画という魔術師教会が管理する場所に移されるわ」

管理区画という名前からも分かるとおり、魔術師を管理する区画。おそらくそこまで良い暮らしはできないだろう。

「その管理区画で魔術を危険なことに使用してはいけないとか、簡単な刷り込みをされるんだけどね。その刷り込みが上手くいかなかった魔術師が隔離されるのが隔離区画」

ようするに、「おまえは悪いことしそうだから、予め牢屋に入れておく」ということだ。

「人権侵害じゃねえか！」

守は机を叩き付け、勢いよく立ち上がる。

「こんなことされたんじゃ、魔術師教会に恨みを持ってもしようがねえよ！」

守の必死の叫びを、羊は冷たい目で受け止めた。

「何言ってるの守。魔術師になった時点で、私達に人権はないわ」

お茶を一口飲み、喉を潤すと、羊は語り出す。

「昔、《石》の魔術師がいました。彼は宝石を自由自在に生み出すことができました。彼はそれを両親に自慢しました。どうなったと思う？」

宝石を生み出す人間。そのまま宝石を生み出し続け、一生両親の食い扶持になり続けるのならまだ良い方。最悪、そのことを知られた第三者に奪われる危険まである。

「どうなったんだ？」

「彼をめぐって戦争が起きたわ。もちろん、彼の意志とは関係なく」

それを黙って聞いていた守の元に一冊の本がゆっくりと飛んでくる。タイトルは「魔術師教会」。

「彼は自分のせいで戦争が起き、国が滅んだのを悲しみ、自分と同じような思いをする魔術師がいないように魔術師を人間から保護する組織、魔術師教会を作ったの」

本のページがめくられ、一人の人物の顔写真のページで止まる。

「それが魔術師教会の始まり」

彼の名は《石》の魔術師、ストーン・ワイズマン。

守は何も言うことが出来なかった。誰が正しいのかも分からない。魔術師教会が正しいのかも、間違っているのかも守には判断できない。

「真滅はこの世から魔術師を消し去るつもりよ」

うつむく守に羊は話しかける。

「魔術師はあなたの夢だったのでしょうか？」

守にはそれが、悪魔の誘惑に思えた。

「誰かの為でなくて良いわ。あなた自身のために、力を貸して、《時》の魔術師、時輪守」
魔術師の使う魔法は、悪魔を召喚し、その悪魔から習ったという説がある。

「分かった」

羊は無表情で涙を流し続ける守を優しく抱きしめた。

第六章 決戦の日

それから一ヶ月間。守は一日も怠ることなく修行を続けた。羊との実戦訓練も羊の操る

本の量が増え、より一対多を想定したものになっていく。

そして、決戦の日がやってきた。

羊の予言の書に従い、守と羊は結界の中心まで移動する。

「本当にここに来るのか？」

「他の魔術師がここまで追い込んでくれる手はずになっているわ。それに、この町一帯に罠も仕掛けてある。ここで待つのが私達にとって最も得策だわ」

つまり、最初からここを決戦の地にするつもりだったのだろう。

その時、空から隕石が降ってきた。

「始まったわね」

羊が小さく呟く。間違いなく真滅の攻撃だろう。それは分かる。だが、問題は――。

(こんなもん、どうやって避けるんだ……)

「防ぐ」という選択肢は最初から頭から抜け落ちていた。

守の魔術は数秒しか発動できないため、隕石の落下を数秒止める程度のことしか出来ない。それでは、結局のところ問題の先延ばしにしかならない。

羊の魔術も知識という面では役に立つが、攻撃や防御といった戦闘面ではあまり役に立

たない。

過去に栄華を飾っていた恐竜が滅びたのは、隕石が衝突したからだという説が最も有力であるが、そのクレーターの直径はおよそ一〇〜一五キロメートル程度だとされている。

たったそれだけの規模の衝突で、世界中、人間よりも多くの大陸に栄えていた恐竜が絶滅するのだ。あの隕石一つで、この町一つ位なら、簡単に消し飛ばしてしまうことだろう。（真滅は、この町ごと、俺たちを消し飛ばすつもりだ……）

停止していた思考が濁流のように押し寄せる。だが、妙案は浮かばなかった。自分で解決できない問題が起きた際、最も人間がすることは——他人に押し付けることだ。

「どうするんだ師匠！ このままじゃ、この町もろとも俺たちも死ぬぞ!!」

羊は隕石に手を重ねるように、空へと手を伸ばす。

「守るにはまだ見せたことなかったわね」

うわごとのように羊が呟くが、不思議とその声には落ち着きがあった。

「見せてあげるわ。《本》の魔術師の力を」

その言葉がトリガーになったかのように、本が羊の家はもちろん、図書館、民家……ありとあらゆる場所から空へと集まってくる。それこそ、空を埋め尽くすほどに。

(何だこの量……。この町の本だけじゃない、世界中の本が集まって来てる……。のか?)

数秒もしない間に、空を覆う本が七重に出来上がった。

「これでも止まらないなら、諦めるしかないわね」

本と言うのは紙でできているという性質上、火に弱い。そして、隕石は大気圏突入の際に、高熱で焼かれる。

まず、最初の本の盾は勢いよく燃え尽きた。効果が出始めたのは二層目の盾から。

そして、二層目の本が隕石を受け止めている間に、一層目の本の中で無事だったものを新たに八層目の盾として再利用する。

それを繰り返し、十枚目の盾が破壊されたとき、隕石が止まった。

「……成功だ」

守るが呆然と呟くが、羊は身体を反転させて走り出す。

「守！ あなたも走りなさい!!」

「え？ でも、隕石はもう——」

「落ちてくるわ!」

守が上を見上げると、上空で本が瓦解し、支えていた威力を失った隕石もろとも落

ちてくるところだった。

これにはたまらず、守も身体を百八十度反転させて勢いよく走り出す。

「何で魔術を解いた!?」

「ずっと維持できるわけじゃないでしょう! 魔力が持たないわ!!」

隕石の威力と言うのは、加速によるところが大きい。一旦止めた上に隕石自体は小さいため、そこまでの威力にはならないだろうが、それでも真下にいけば危険だ。

しかし、対真滅用に用意したトラップが二人を簡単に遠くへは逃がしてくれない。

(こうなりゃ一か八かやるしかないか——)

隕石はもう眼前まで迫っていた。

「師匠、こっちへ!」

有無を言わず、守が羊を庇うように抱きしめる。

心臓の鼓動と時計仕掛けの魔術師の秒針を同調させ、自分の身体をその時間の状態のまま固定する。これによって守の身体は魔術を維持し続ける限り、どんな変化も受け付けられない。老化すらも。

隕石が衝突——ではなく墜落し、辺りに粉塵が舞う。

「ゲホ、ゲホ！ 守、大丈夫？」

羊が口を押さえながら守の腕の中から這い出て辺りを見回す。威力を殺したと言っても、本来町一つ消し去れるレベルの隕石だ。その半分以下でもかなりの被害が出る。

（住民を避難させるとして正解だったわね……）

羊が被害を計算していると、守が動き出した。

「師匠。どうやら無事だったみたいだな」

「ええ。あなたのおかげでね」

魔術を解除し、羊を解放する。

「それにしても、真滅はどこにいるんだろうな？」

守が何気なく呟く。

「え？」

「だって、この隕石を落としたりってことは、自分は巻き添えになる場所にはいないってことだろう？」

それを聞いて、羊は思考を巡らせる。

（近くにはいない。本当にそう？）

高位の魔術師は、自分の魔術を抵抗レジストすることができるとは魔術師の間では有名な話だ。もし仮に、真滅もそれができるとしたら？

真滅は隕石に注意を集中させ、接近している可能性がある。

「守、真滅は近くまで来てるかも——」

「正解」

砂煙の向こうから、真滅の拳が守の顔面に入り、守は吹き飛んだ。

「守！」

羊は守の心配をしながらも、真滅から視線を外さず、距離を取る。

「まさかあの隕石を防ぐとはな。やるじゃねえか」

羊は吹き飛ばされた守を視界の隅で確認しながら、真滅を分析する。

（装備品の中で魔道具は一つだけ。ということは、あれが——）

羊の視線に真滅が気付き、左手首に付けられた腕輪を掲げる。

「こいつが気になるか？」

腕輪に小さな地球儀が鎖で繋がれたその魔道具こそが——

「時計仕掛けの惑星」
クロックワークブラネット

守が後方から真滅に迫るが、華麗に避ける。

「へえ、回復が速いな。《癒》の魔術師か？」

真滅が軽口を叩くが、守の左手に巻かれている古めかしい時計を見て目つきが変わる。

「《時》の魔術師、時輪守だ」

先程の真滅の攻撃で守が無事だったのは、隕石を止めた時と同様の魔術を使用したからだ。

衝撃とは早い話が「原子の振動」である。たとえば、顔を拳で殴られたのなら、顔の原子が揺れたということだ。ならば、顔の原子の時を止めてしまえば、衝撃を殺せるのではないか？ というコンセプトで考案されたのがこの魔術だった。

「そうか、お前が《時計仕掛けの魔術師》の所有者か」

真滅が言い終わるのを合図に、お互いに踏み込む。

「ぐはっ！」

「ぐはっ！」

クロスカウンターの要領でそれぞれの頬に拳がめり込む。

初撃が互角ということは、おそらくは互いのトータルしたステータスも似たようなもの

だろうと羊は分析した。

（——つまり、守を勝たすのが私の役目）

羊は隕石を防いでも尚無事だった本を二冊宙に浮かせ、守が戦いやすいように援護し、真滅が戦いにくいように牽制する。

（流石に二対一だとキツイか……）

すぐに真滅が劣勢になる。

（こうなりゃ、一か八か、使つか）

何を思ったか、真滅はビルから飛び降りる。

守たちが現在戦闘をしているこのビルは、真滅の姿を一早く確認するために陣取ったこの町で一番背の高いビルだ。人が飛び降りて無事で済むはずがない。それどころか、命があるはずがない。

だが、真滅は《星》の魔術師。この星に関する魔術もいくつか使える。

真滅は空中で二つの魔術を使用した。

一つは自分が助かるように、自分が落ちる地面を柔らかくする魔術。

そしてもう一つは、《時計仕掛けの惑星》クロックワークプラネットに貯蔵した魔力全てを使って行使する、この

星の魔力を消滅させる魔術だ。

空中で魔術を行使したため、守や羊が介入できなかつたことが幸いし、真滅の魔術は成功した。

この星に住む全ての魔術師は魔力を抜かれ、今後その魔力が回復することは二度とない。直前に真滅が行使した、地面を柔らかくする魔術が、この世界で行使された、最後の魔術となった。

第七章 魔術の守護者

一方、状況を把握できていない守と羊はビルの屋上にいた。

「真滅を追う！ 本を浮かせて階段状にしてくれ！」

羊は指先一つで本を階段状に——できなかつた。

「まさか、もう——」

羊の魔術が遅いのに業を煮やした守は、自分の魔術を使うことにした。

「俺が行く！」

勢いよくビルから飛び降りる。

「……。ええ、あとは任せたわ。守」

羊は自分の無力を悟ると、祈るように手を合わせた。

守の魔術は数秒しか持たない。故に、羊の様に自由自在に、好きなだけ魔術を乱用することはできない。

故に、タイミングが非常に重要となる。

(ここでそろそろか……)

体感にして数秒の自由落下もそろそろ地面が近づいてきていた。

守はバクバクと活動する心臓を日頃の訓練で落ち着かせ、時計仕掛けの魔術師と同調させる。

自由落下が地面に墜落する寸前でピタリと止まり、加速を殺す。

魔術は一瞬で心臓の鼓動が乱れたことでキャンセルされるが、加速を殺しておいたおかげで階段から足を滑らせた程度の衝撃で済む。そして、その衝撃すらも真滅の地面を柔らかくする魔術の影響でゼロとなる。

地面に着いた守は、真滅を探す。

(どこに隠れた？ まさかもう魔術で遠くまで——)

裏を読もうとする守の後頭部に瓦礫の破片が直撃する。

血が滴るが、時間遡行によって頭部の状態を数秒前まで再生させ、何事もなかったように守は瓦礫を投げ付けた真滅を見た。

「そこか」

守が一直線に真滅の元へ向かう。

真滅は瓦礫を投擲し続けるが、最初の一撃は位置が特定されていなかった上、不意打ちだったから当たったにすぎない。

守は瓦礫が自分に当たる直前に瓦礫の時間を止め、軽々と避けていく。

さほど苦勞せず真滅の元へ辿り着くと、真滅は戦意を喪失したのか、へたりとその場に座り込んだ。

「何故魔術を使わない？」

訝しむ守に、真滅は失笑しながら言う。

「この世から魔力を消し去ったからな。もうこの世に魔術師はいない」

守は羊が魔術を使えなかったのを思い出す。

だが、そうなると疑問が残る。

「なぜ、俺は魔術が使える？」

真滅は包み隠さず全て教えた。

「お前が使えるわけじゃない。時計仕掛けの魔術師が使えるんだ。それはクロックワークフラネット時計仕掛けの惑星と同じ作者が作った人間を魔術師にする魔道具だ。俺はこの世から魔力を消し去る魔術を使った。だが、時計仕掛けの魔術師は魔力をゼロから生み出すことができる。俺がこの町に来たのも時計仕掛けの魔術師を破壊して、この世から本当の意味で魔術師を滅ぼす為だ」

守は、逡巡する。この世で魔術が使えるのは守だけになった。つまり、この状況を打開できるのは守だけだ。そして、守にはその方法が一つだけある。

守は昔のことを思い出していた。まだ、無邪気に自分が魔術師になれるのだと信じて疑わなかった頃のことを――

「フッ」

「どうした？ 絶望したか？ それとも自分が世界でただ一人の魔術師になって優越感でも生まれたか？」

守は真滅の問いに、時計仕掛けの魔術師を胸の前に持つてくることで示す。

「そうか……」

真滅は諦めたように目を閉じる。その可能性があったから、真滅は時計仕掛けの魔術師を回収する為だけに計画を遅らせてまでこの町にやって来たのだ。

全ては時計仕掛けの魔術師の回収に失敗した真滅の失態だ。

「俺は——魔術を守る」

守は時間遡行を開始した。

普段、守が数秒しか魔術を使えないのは、心臓への負担を最小限に抑えるためだ。逆に、心臓への負担を度外視すれば、もう少し時間を延ばすこともできる。

今回の時間遡行は、真滅が時計仕掛けの惑星を使う前まで戻ることになる。

真滅がビルから落ちようとする少し前。守は真滅がビルから落ちようとするのが分かつ

ているので、一目散にビルの端へと駆け出すと、そのまま真滅ごとビルから落ちる。

これが守の最後の力。

既に心臓は限界を超えて鼓動を停止している。真滅をビルから落とせるだけの余力があったこと自体が奇跡なのだ。

真滅は魔術を発動する間もなくグチャグチャの肉塊に変わり、真滅を下敷きにして落下した守の死体は原形を保っていた。

ビルの端に備え付けられている階段を駆け下り、羊が守の亡骸にしがみつく。

「守……ごめん……ごめんね……」

大粒の涙を流しながら、泣きじゃくっている羊の前に、一人の男が現れた。

「別れは済んだか？」

涙を拭うと、羊はキッとその男を睨み付ける。

「お久しぶりですね、師匠」

その男は、羊の師匠にして、守の父——《心》の魔術師、時輪想であった。

「あなたが遅れてきたせいで、守は——」

想は煙草をくわえると、慣れた手つきで火をつける。

「俺の能力は戦闘向きじゃない。そして、俺の能力は、対象と面識があれば、遠隔からでも発動できる。ここまで言えばお前なら分かるだろう？」

当初、羊は守を戦力として参戦させるのを躊躇っていた。守はまだ未熟な上、魔術師教会とまだ深い係わりがない。何も知らない組織の為に、命を賭けたくはないだろう。

だが、想が急遽合流できなくなった為、渋々守を巻き込んだのだ。

「本当は、合流できないなんて嘘だったんですね」

羊は本を浮かせる。それを見て、想は煙を吐いた。

「別にお前一人で立ち向かってもよかったですね？ 何故それをしなかった？」

羊の動きがピクリと止まる。想の口がニヤリと吊り上がった。

「教えてやろうか？ 自分が死ぬのが怖かったからだ。たとえ守を殺すことになったとしても、自分が傷つくのが嫌だった。まあ、お前は後衛だし、一対一には向いてないからな。こうして魔術師の世も守られた。結果オーライじゃないの」

羊の本が飛んでくるが、想はヒラリと躲す。

「だがまあ、助けてやってもいい」

「え？」

守の方を見て、鼓動を確認するが、間違いなく心臓は停止している。

「もう助かりませんよ。心臓が止まって——」

「俺は心の魔術師だ。もう一度心臓を動かすこともできるかもしれないぞ？」

昔、心臓には心が宿るとされ、心と言う意味の「heart」とそのまま名付けられた。確かに心の魔術師との親和性は高いだろう。

「その代わり、後日守と二人で魔術師教会の本部まで来い」

「分かりました。守を蘇生させてください」

想が手をかざすと、守へと膨大な魔力が流れ、心臓を強引に動かす。やがて、その動きが染み着いてしまえば、元通り心臓は勝手に動くようになるだろう。

「師匠……真滅は……？」

守が目覚め、開口一番に羊に聞く。

「倒したわ。あなたが倒したのよ」

羊が想の方に視線を向けると、そこには一本の煙草の吸い殻が残されているだけだった。

終章 眞実は影にあり

寂れたバーに一人の老人が座り、酒を飲んでいた。

「待たせたな、ワイズマン」

「構わんよ、久々に弟子と息子に会ったのだろう？」

バーに想がやってきて、ワイズマンと呼ばれた老人の隣のカウンターへ座る。

「元氣そうだったよ」

想の答えにワイズマンは爽快に笑う。

「弟子には皮肉を言い、息子とは一言も交わしておらん癖に、よく言うわい」

それを聞いて、ポケットから煙草を出そうとした想の手が止まる。

「見たたのか」

「当然よ。魔術師教会の危機、創設者であるこの儂が見届けんでは済まんじやろう？」

酒を一口飲んで唇を潤し、ワイズマンは真剣な口調で想に尋ねる。

「で、どうじゃった？ お主の心臓の様子は？」

煙草に火をつけながら想は言う。

「ああ、あのバカ息子、我が物顔で使つてやがったよ」

「カカカツ！ そりゃあそうじゃろう、自分のものだと思つておるのじゃから」

また酒を一口飲み、真剣な口調に切り替えてワイズマンは聞く。

「本当に、何も説明しなくてよいのか？ このままでは恨まれ損じゃぞ」

煙草の煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出しながら想は言う。

「別に感謝される為にやったわけじゃないし、親が子を助けるのは当たり前だろう？」

想の答えに満足したのか、ワイズマンは飲みかけの酒のグラスをを想に譲り、紙幣を何枚か置くと、身体がピキピキと石になり、やがて碎け散った。

想はグラスに口をつけ、酒を飲む。

「あんたも大概だよ。こんなどこの馬の骨とも知らぬおっさんに賢者の石を渡しちまうんだからな」

想はかつて自身の心臓があつた場所に手を当て、呟くとグラスの口をつける。

「いい酒飲んでんじゃねえか、ワイズマン」

悪英雄

第一章 鉄腕

真夜中の舗装された道を、パーカーに身を包んだ男が走っていた。

筋骨隆々という言葉が相応しい、ガタイの良い大男だ。

その男に向かって、暗がりから突然、空き缶が投げ付けられた。中々の速度だったが、男はそちらを見ることなく躲す。

「誰だ？」

歩みを止め、落ち着いた態度で暗がりを見る男。

暗がりから、乾いた笑い声が響いた。

「連続殺人鬼、テツワンだな？」

暗がりからの声に、男——テツワンはピクリと眉を動かす。

「そういうお前は誰だ!？」

落ち着いた態度が乱れ、焦ったようにテツワンは暗がりにも問う。

暗がりから明るい場所に出てきた男の顔をテツワンは知っていた。

「なんだ、同業者か」

「お前らと一緒にするなよ」

嫌悪感を隠すことなく、暗がりから出てきた男はテツワンを睨む。

「一緒だろう？ 連続殺人鬼、トモグイ」

暗がりから出てきた男——トモグイは拳を構える。ボクサーのような構え方だ。

「なら、俺の目的も分かるな？」

テツワンは失笑を隠そうともせずに、拳を構える。トモグイと同じ、ボクサーの構えだ。

「ああ。お前は俺を殺しに来たんだろう？」

ニヤリとした笑みを貼り付けたまま、トモグイは攻撃を開始した。

「その通り！」

素早くテツワンの懐に潜り込むと、テツワンの腹に拳を打ち込んだ。

だが、テツワンの強靱な腹筋に邪魔されて、まるで手応えがない。

(内臓まで攻撃が届かない……)

そして、今度はテツワンの攻撃だ。

一歩引き、思い切り振り絞った拳をトモグイに打ち込む。

トモグイはバックステップで回避するが、トモグイのいた地面は、アスファルトである

にもかかわらず砕けていた。

(なるほど、まさしくテツワン。だが、勝算はある！)

再びテツワンの拳がトモグイに向かって振り下ろされるが、トモグイはギリギリで躲すと、その腕を掴み、柔道の要領で逆方向にへし折った。

「ぐあ、あ、あ、つつ!?!」

テツワンが右腕を抱えて蹲るが、トモグイはニヤニヤした笑みを浮かべてテツワンを見下ろす。

「ハハハハハハッ！ ご自慢の腕が壊れちまったなあ!!」

蹲ったままのテツワンを蹴り飛ばし、勝利に酔う。

(クソッ！ 片腕じゃ……)

右肘を逆方向に曲げられ、戦意喪失したテツワンは逃げる算段を考えていた。

(俺の方が身体はデカいんだ。全力で走れば逃げ切れる！)

そう決めると、素早く体勢を整える。

「動くな」

トモグイは拳銃を構えてテツワンに銃口を向ける。

テツワンは思考を加速させ、一瞬で自身の行動を決めなければならない。

（今までの殺人で、トモグイが相手の使う武器以外を使ったことはない。そして、俺の武器は拳。つまり、トモグイは銃を使えない！）

そう結論付けると、一目散に走りだす。

銃声が響き、テツワンの足を弾丸が貫通する。そのままテツワンは地面に倒れた。

「お前、自分のルールを破ったのか？」

テツワンの戸惑う声に対して、トモグイは冷徹に答える。

「俺は英雄だ。向かってくる兵には敬意を表すが、逃げる弱者には容赦しない」

トモグイはそう言うと、硝煙が消えた拳銃を上着の内ポケットに仕舞う。

「さて、続けようか」

ポキポキと指を鳴らしながらトモグイはテツワンに近づく。

「い、嫌だ……助けてくれ。誰か——」

テツワンが叫ぼうとしたところで、トモグイがテツワンの顎を蹴り上げる。

「お前も連続殺人鬼だろう？ 民間人に助けを求めるようなみっともないことするなよ」

トモグイは気絶したテツワンの上に馬乗りになると、顔面に拳を振り下ろす。

「がはっ!!」

テツワンが起きるが、続けて振り下ろされた拳によって再び意識が飛ぶ。ただひたすらに、死ぬまでそれを繰り返す。

テツワンの死を確認したトモグイは、そのままテツワンの死体を人目につかない場所まで引きずっていく。

そして、二人の人物にメールを送った。

数分後。待っていた人物の一人が姿を見せる。

「お待たせしました」

「いいや、早くて驚いてるくらいだ」

黒髪を肩口で切り揃えたまだ幼い少女だった。厚手のコートを着てスタイルを隠しているが、おそらく華奢な身体つきなのだろう。彼女の引いてきたトランクが大きく、さらに彼女の小柄さを強調していた。

「で、ハコビヤ。この死体売れそうか？」

ハコビヤと呼ばれた少女は臆することなくテツワンの死体に歩み寄る。

「顔と右手は潰れてますから売れませんが、臓器にはほとんど損傷がありません。それに、良い身体つきですから高値で売れますよ」

そう言うのと、ハコビヤはトランクから小型の鋸を取り出すと、テツワンの死体の腹を切り開き、内臓をトランクに入れる。

「殺す前に呼んでくれれば、脳と心臓も新鮮な状態で売れたのに……」

テツワンを解体しながら、ハコビヤは残念そうに言う。

「悪いな。お前を危険に晒したくなかったんだ」

トモグイのその言葉に、ハコビヤの心拍数は急上昇した。

「え？ それって」

「お前、弱いだろ？」

（ああ、そうか。私は戦力として見られてないんだ……）

少し残念に思うが、実際ハコビヤは戦闘が得意ではない。戦闘も武器や装備頼りになるだろう。

そんなことを思っている間も、ハコビヤによるテツワンの解体は止まることなく進み、

残ったのは売れないと判断された頭と右腕だけになった。

「毎度あり〜」

「ああ」

トモグイは金銭を受け取らない。トモグイが殺人鬼を殺す為に買う装備と物々交換の約束なのだ。

ハコビヤは若くして商売人だ。おそらくトモグイが損をしているはずだが、トモグイは気にしていない。

「あ、そうだ。これはサービスです」

ハコビヤはそう言うと、一発の銃弾をトモグイに投げ渡す。

（俺が撃った弾数を知ってるってことは、見てたんだな）

「サンキュー」

トモグイはハコビヤから受け取った銃弾を早速自分の拳銃に入れた。

「その銃も買い換えた方が良くんじゃないですか？」

トモグイの愛用している拳銃はニューナンブM60という回転式拳銃だ。

オートマチック自動式拳銃が存在するこの時代に、そんな旧式を使っている銃使いはトモグイぐらいだ

ろう。

「これは俺が警察官時代から愛用してる銃なんぞでな。変える気はねえよ」

ニューナンブM60は通常の回転式拳銃とは違い、装弾数が五発しかない。つまり、連射性能が低いのだ。

世界一平和な国と言われている日本の警察官が使うには十分かもしれないが、連続殺人鬼であるトモグイが使うには些か不十分だろう。

「まあ、無理強いはしません」

無理強いはしないとハコビヤは言ったが、本当は無理やりにも変えさせたかった。だが、それをすればトモグイは怒るだろう。

別の拳銃を渡してもニューナンブM60を使い続けるだろうし、ニューナンブM60を取り上げて別の銃を渡そうとすれば、それこそ撃たれかねない。

(その銃で勝ち続けられればいいんですけどね……)

今は無理を通す時ではないということだ。

「それじゃ、私はこれで」

「ああ、助かった」

トモグイはテツワンの顔とにらめっこをしながら、もう一人の待ち人を待っていた。

「やあ、お待たせしたかな？」

帽子を目深に被り、金髪の髪を隠す長身の優男がトモグイに笑いかける。

「お前の方が先に来ると思ってたんだがな。オトサタ」

オトサタと呼ばれた男は、トモグイがにらめっこしていたテツワンの頭を掴むと、自分の顔の前に持つてくる。

「へえ、ハコビヤの方が先に来たのかい？」

オトサタがお道化るのを、トモグイは鋭い目をして牽制した。

「お前なら、俺がテツワンと闘っていた時、ハコビヤがどこにいたのか知ってるんじゃないのか？」

やがて、興味を失ったのか、テツワンの頭をポイと放り投げる。

「ああ、知ってるよ。でも、教える気はない」

(彼女の恋路の邪魔すると後が怖いからね)

オトサタは、トモグイの戦闘をハコビヤが見ていたのを知っている。だが、それをタダ

で教えるのは、情報屋としてありえなかった。

「……そうか」

トモグイの方もそんな必要のない情報を買う気はなかった。

「で、何が聞きたい？」

「連続殺人鬼、クビガリの情報」

オトサタは、ピクリと眉を動かす。

「これはまた、大物狙いだね」

トモグイは連続殺人鬼しか殺さない。故に、相手は常に同格か格上が相手になるのだ。

「狙えない相手じゃないさ」

（まあ確かに、今の君なら勝機はあるか……）

オトサタも、大事な商売相手を下手に減らすようなことはしたくない。特に、トモグイは常連客なのだ。

「連続殺人鬼、クビガリ。歳は六〇〜七〇。武器は日本刀。殺害方法は首を一撃で刎ねる。

今までの殺害人数は三人」

トモグイは、オトサタが言ったことを素早くメモする。

「なるほど、なら日本刀が必要になるな」

スマホを操作し、ハコビヤにメールを送る。

「報酬に、俺の情報を流しといてくれ」

「ああ、それはもちろん」

オトサタもトモグイから金銭を受け取っていない。トモグイの個人情報売ると物々交換なのだ。

情報屋は情報の鮮度と正確さ、そしてそれ以上に、信用がものをいう世界だ。本来なら、客の情報を流すのはルール違反だが、トモグイは報酬代わりにそれを許していた。

トモグイは、民間人を危険に晒さない。その上で、連続殺人鬼を殺す。いわゆる義賊なのだ。

それ故にファンも多く、トモグイの情報が欲しいという人は多かったので、オトサタもありがたかった。

「それにしてもトモグイは金銭欲がないね」

トモグイは連続殺人鬼としてはほとんど出費していないが、同時に収入もない。元警察官ということで、多少の貯金はあるが、何十年も暮らせるものでもなかった。

「いつ死ぬか分からないからな。無駄な金があっても、相続人もいないしな」

トモグイには家族がいなかった。両親はトモグイが連続殺人鬼になったのを悲しんで自殺した。

（もう少し生きていれば、俺が英雄になった姿を見せられたんだがな……）

トモグイも、両親と確執があったわけではない。むしろ、母とはかなり仲が良かった。（悪人を殺しているのだから、俺のやっていることは正義だろう）

故に、トモグイには両親の自殺した理由が分からなかった。

翌日、トモグイは自分の部屋で荷物を待っていた。

大量の書類が山積みになった机で、トモグイはパソコンを使っていた。

見ているのはトモグイに関する書き込みサイトだ。

そこにはトモグイを英雄と崇める者も、ただの連続殺人鬼だと罵る者もいた。

（やはり活躍が足りないか、万人に受け入れられるには、民間人の被害を出すわけにはいかないしな……）

考え事をしていると、呼び鈴が鳴る。

「来たか」

ドアを開けると、ハコビヤが立っていた。

「意外だな。三下に任せると思ってたよ」

「いえ、貴重なものですから」

（せっかくトモグイさんの家にお邪魔できるチャンス、逃してなるものですか！）

トモグイは玄関でハコビヤの持ってきた包みを開け始めた。

「ちよつと、こんなところで——」

「大丈夫、横造刀だと思われるさ」

まずは刀身を確認する。日本刀は美術品としての価値が高いため、拵えなども立派なものだが、トモグイは全くの無関心であった。

ちなみに、ハコビヤはトモグイの為に、一番いい日本刀を用意していた。

（刃毀れ、歪み、錆、その他異常なし……大丈夫だな）

実際に耐えられることを確認すると、素早く刀身を鞘に仕舞う。

「ご苦労。じゃあな」

「あ、はい……」

トモグイはドアを閉め、自分の家に入る。

ちなみに、トモグイはハコビヤにお茶すら出していない。

「まったく、常識のない人です……」

ハコビヤはトボトボと帰っていった。

一方、トモグイはドアスクープからハコビヤが帰るのを覗き見ていた。

(ハコビヤに家を知られたし、引越すべきか?)

別にトモグイはハコビヤを疑っているわけではない。ただ、信用していないだけだ。

ハコビヤを家に入れず、玄関先で検品を済ませたのもそういう理由だった。

「さてと……」

ハコビヤはスマホを操作し、オトサタへ電話をかける。

『やあトモグイ。昨日ぶりだね』

「いきなりだが質問だ。クビガリはいつ動く?」

『ちよっと待ってね』

パラパラとページをめくる音が電話越しに聞こえてくる。

『ちようど今夜動くかもよ?』

トモグイはニヤリと笑みを浮かべ、オトサタに指示を出す。

「詳しい情報をくれ」

第二章 首狩り

深夜、トモグイはクビガリが現れる場所まで移動し、隠れていた。

その場所は小さな公園だ。

（本当にこんな場所に現れるのか？）

オトサタが一体どこから情報を集めてくるのかトモグイは知らないが、オトサタの情報が偽りだったことは今のところない。

しばらく待っていると、日本刀を持った和服の老人が姿を見せた。

（あいつがクビガリで間違いなさそうだな）

出て行こうとすると、先に全速力でクビガリに向かって行く集団があった。

（警察か？）

連続殺人鬼が多いこの世界にも当然警察はある。だが、連続殺人が可能な連中は、大体

警察から隠れるのが上手いか、逆に警察を敵に回しても問題ない奴らと言うわけだ。

トモグイは素早く警察官の人数を数え、武装を確認する。

（全員で五人。武装は拳銃が一丁と警棒）

普段通りの武装ではあったが、それで勝てるほど、連続殺人鬼は甘くない。

「発砲許可も出ている。殺す気で行け！」

一番先頭にいた警察官が拳銃を構えるが、その場所はもうクビガリの間合いの内側だ。発砲する前に警察官の首が落ちる。

「うわっ!？」

ほかの四人が慌てて銃を構えるが、引金を引く前に首が飛ぶ。

クビガリは日本刀を血振りすると、トモグイの方を向いた。

「そこにいる者、出てこい」

「バレてたか」

トモグイは観念して出て行く。

「ほう。刀持ちか！」

トモグイが握っているのが刀だと分かると、クビガリは嬉しそうな表情を浮かべた。

「別に普段から使ってるわけじゃねえよ。あんたに合わせただけさ」

「ということは、お主がトモグイじゃな？」

「ああ、その通りさ！」

トモグイが鞘から刀身を引き抜き、踏み込もうとしたところで、首筋に強烈な寒気が走る。

直感に任せて刀を振ると、ガキン！ と金属音がしてクビガリの刃がトモグイの眼前で止まる。

示現流には「一の太刀を疑わず」「二の太刀要らず」という言葉がある。これは一撃で仕留めるという意気込みだ。

「ほお。お主、中々やるのお」

（さつきクビガリの技を見て助かった）

一旦距離を取ろうとするが、トモグイが下がれば下がるほど、クビガリは距離を詰めてくる。

「お主、さては素人じゃな」

「いいや、剣道初段だよ！」

思い切り刀を振ると、クビガリは大きく下がった。

「剣道は叩く剣。日本刀は引く剣じゃから、少し勝手が違うぞ」

「ご高説をどうも」

トモグイは警察官時代に空手、柔道、剣道で初段を貰っていた。

「どれ。儂に合わせてくれた礼に、見せてやるかな」

クビガリは、居合の構えをとった。

示現流の名手、中村半次郎は軒先から落ちる水滴が地面に落ちる前に、これを三度斬ることができたという。

トモグイは一の太刀を避け、二の太刀を刀で受けた。だが、ここまで。

三の太刀がトモグイの腹部に入る。

「ほお。今のを防ぐか」

（全然防ぎきれてねえよ……）

刀を右手で握り、左手で腹部を押さえて止血する。

刃が腹部に当たり、これをクビガリが引く瞬間、腰を回転させることで刃の動きに合わせ、致命傷を避けたが、それでも斬られたことに変わりはない。

(さつきのご高説が役に立つたぜ……)

腹部の血が止まり、トモグイは刀を両手持ちに戻した。

「奥義を見せてくれた礼だ。俺も見せてやるぜ」

トモグイは刀を構えたかと思うと、居合の姿勢をとる。

一の太刀がクビガリの刀と打ち合い、二の太刀が避けられる。

三の太刀は再現できなかつたが、それはまさしく先程クビガリが見せた剣技に他ならぬい。

「チツ、やつぱり付け焼き刃じゃ駄目か」

トモグイは刀を肩でトントンと遊ばせながら、悪態を憑いた。

だが、クビガリからしてみれば気が気ではない。自分が何十年もかけてやつと習得した技を、少し齧っただけの人間に初見で再現されたのだから。

(どういふことだ？ 一度見ただけで再現したのか!?)

それは、トモグイの才能と言つていいもの。相手の技、技術を盗み、自分のものとする能力。

これによつて、トモグイは今まで相手の連続殺人鬼を同じ武装で殺すことができたので

ある。

これによって、クビガリはトモグイに対し、安易に技を出せなくなってしまったのである。

「……いいだろう。認めてやる」

クビガリは再び居合の姿勢をとる。

「また居合か？ 打ち合う気があんのか!？」

「お前はもう、儂の剣を見ることは出来ん」

「はあ？ 何を言っ——」

ゾクリ——とトモグイの首筋に鳥肌が立つ。トモグイの経験上、これは命の危機が訪れているということだ。

トモグイは直感に任せ、刀を首に持っていきつつ頭を下げる。

トモグイの頭上で金属音が響き、トモグイの刀とクビガリの振るった刀が衝突する。

（見えなかった……。今のは感覚で避けただけだ）

「ほう、流石だな」

クビガリはトモグイへ賞賛の言葉を贈るが、トモグイは内心冷や汗を垂らしていた。も

ちろん、クビガリには悟られないようにしていたが。

「確か、示現流にあったな、不可視の魔剣——雲耀」

「知っていたか」

雲耀とは示現流における剣速の単位である。二万分の一秒。真面目に計算すればおよそ〇・〇〇〇〇五秒のことを言い、稲妻と同じ速さであることから名付けられた。そして、これを習得できるものは一握りだけであり、習得できなかったものは、二度と剣を握れない程に身体を壊す。

「なんでそんな一流の剣士が、人斬りなんて始めたんだ？」

トモグイがそう問うと、クビガリは鼻で笑う。

「考えたことはないか？ 自分の技は本当に人を斬れるのかと。自分の技は武器を持った人間相手に通じるのかと」

剣術は、元を辿れば戦場で生き抜くための技である。つまり、対人間を想定して作られたということだ。

だが、科学技術は進歩し、銃という最強の対人間兵器が生まれた。それにより剣術は趣味や武術に追いやられ、戦闘術ではなくなった。

だが、クビガリは剣術を極め、拳銃に勝った。

「話は終わりじゃ。そろそろ決めるぞ」

「ああ、そうだな」

お互いに居合の構えをとる。

純粹な剣技の勝負になれば、トモグイに勝ち目はない。だから、そこでは戦わない。

トモグイの首に刃が迫るがトモグイはそれを直感で察すると、身体を捻じり、自分が刀を出すのに支障が出ない程度に傾けると同時に刀をクビガリの首に向ける。

これにより、自身の剣速は落とさぬまま、相手の刃との距離を離せる。

トモグイの首に刃が触れるが、その時には既にクビガリの首は宙を舞っていた。

「見事」

クビガリの飛んだ首が最後に放った言葉であった。

前述したとおり、示現流には「一の太刀を疑わず」「二の太刀要らず」という言葉がある。

残ったクビガリの身体は、トモグイに向かって倒れ込んできた。

前述したとおり、日本刀は引くことで斬る剣である。

そして、その刃は今、トモグイの首に当たっている。

シュパッ！ と音を立てて、トモグイの首が切れた。

「痛つてえ!!」

解説するまでもなく、首は人体の急所である。太い血管が集まっている首は、僅かに傷ついただけでもかなりの大量出血となる。

トモグイは慌ててハンカチを首に当て、止血しようとするが、そんなものでは首の出血は止まらない。

トモグイはいざという時の為に持っていた薬箱から、止血剤を飲む。

(血が止まったら縫合しないと不味いな……助けを呼ぶか)

トモグイは朦朧とした頭でスマホを取り出し、電話帳を見る。現在、トモグイの電話帳に名前が載っているのは二名のみ。ハコビヤとオトサタだけだ。

(……ハコビヤだな)

ハコビヤなら医療キットも素早く用意できる可能性が高い。

ハコビヤに電話をかけると、ワンコールで繋がった。

「ハコビヤ、悪いんだが——」

『喋らないでください』

ハコビヤは全力疾走しているようで、息も絶え絶えであった。

『医療キットも持ってます。急ぎますね』

それだけ言うと、ハコビヤは一方的に電話を切った。

(また見てたのか)

トモグイは上着を脱ぎ、真つ赤に染まったハンカチの代わりに首に押し付け、縛る。

横になろうと、近くにあつた滑り台に寝ころんだ。

血が足りなくなると人は眠くなるものだ。トモグイの思考も睡魔の海に沈んだ。

トモグイが眠つてからどのくらいの時間が経つただろうか。

「トモグイさん！ 起きて下さい!!」

「ん？ ああ、ハコビヤか」

ハコビヤはすごい剣幕でトモグイに迫る。

「何で寝てるんですか！ 死んだかと思つたじゃないですか!」

ハコビヤはトモグイの肩を掴むとガクガクと揺する。

「おい、揺らすな。止血中だ」

「あ、すみません！」

ハコビヤは慌ててトモグイの肩から手を離すと、持ってきたトランクから医療キットを取り出す。

「では縫合しますので、傷を見せてください」

トモグイは大人しく首を縛っていた上着を解く。

（血は……止まったみたいだな）

「麻酔は？」

「持ってきてますよ。部分麻酔ですけど」

「やってくれ」

滑り台では手術しにくいということで、ベンチに向かう。

「じゃあ、頼むわ」

トモグイが寝転ぼうとしたところで、ハコビヤがベンチとトモグイの顔の間に自分の膝を挟ませる。早い話が膝枕だ。

「どういうつもりだ？」

「この方が手術しやすいんですよ」

ハコビヤはニコニコした笑みで大嘘を吐く。

「そんなわけ——」

「医者の方が聞けないんですか？」

ハコビヤの瞳は笑っていないかった。このまま膝枕を断れば、手術をしないかもしれない。トモグイにとってそれは死を意味する。

「……分かった」

「そう。良い子ですね」

ハコビヤはご機嫌で部分麻酔をトモグイの首に注射した。

数分経って、首全体の感覚がなくなり、ジンジンとしてくる。

「効いてきた」

「はい。じゃあ縫合しますね」

ハコビヤの仕事は素人にしては中々のものだった。

「一つ聞いていいですか？」

素早く縫合を続けながらハコビヤはトモグイに問いかける。

「何だ？ 話しかけたせいでミスるなよ」

「何で闇医者に行かないんですか？」

犯罪者や極道などの闇に生きる人々は、人に言えない怪我をすることもあるため、医者に行くのを嫌がる。

「知り合いの闇医者はいないし。それに闇医者が高いからな」

基本的に闇医者は医師免許のないものがしていることが多い。そして、報酬が高額になることが多い。

加えて、情報が洩れる心配もあった。

「でも、首は危ないですね。大きい血管が破れていたら、私みたいな素人じゃ無理でしたよ」
(まだ死ぬわけにはいかないからな)

トモグイには目的がある。それを達成するまでは、死ぬわけにはいかなかった。

「はい。終わりましたよ」

ハコビヤは手術道具を片付け、トモグイを開放する。

「世話になったな」

「ところで、クビガリの死体はどこですか？」

トモグイも忘れかけていたが、クビガリの死体の回収もしなければならなかった。

「あそこだ」

トモグイが指差した先には、首が飛んでもなお刀を握ったままのクビガリの死体があった。

「中々良い刀ですね」

ハコビヤはトモグイが止血に使っていた血塗れのハンカチで刀身の血を拭う。

「首が飛んでますから頭と心臓は売れませんね。それ以外は売れると思いますよ」
そう言うハコビヤは以前も使った小型の鋸でクビガリの死体の解体を始めた。

十分ほどでクビガリの解体は終わり、残った頭は殺した証拠に新聞社にでも送り付けることになった。

「では、毎度あり」

「ああ、お疲れさん」

トモグイは今回使った刀を杖代わりに夜道を歩く。上着は首に巻いて止血していたため、血で真っ赤に濡れていたの、脱いでいる。

血が足りないせいで意識が朦朧としてくるが、それでも何とかマンションまで辿り着いた。

(今日は、もう動けんな)

血塗れのまま、シャワーも浴びずにベッドに倒れ込む。

そこで、トモグイの意識は完全に落ちた。

第三章 闇討ち

翌日の深夜にトモグイは目を覚ました。

(丸一日寝てたわけか)

吐き気はなく、むしろ空腹でまた倒れそうであったが、流石に血塗れのまま買い物に行くわけにもいかない。

トモグイはシャワーを浴びて血を洗い流し、洗濯済みの服に着替える。

(上着はどうしようもないな。気に入っていたが仕方ない)

上着はきつぱりと捨てることに決めると、トモグイは別の上着を着てコンビニに向かう。

もちろん、拳銃とナイフは持ったままで。

家からほど近いコンビニでサンドイッチと炭酸飲料を買い、家路につく。

そこで、トモグイは視線に気付いた。

（見られてる。数は……一人か）

警察か別の連続殺人鬼か。どちらにしてもこのまま家に帰るわけにはいかなかった。

トモグイは遠回りをして薄暗く人気のない路地に入る。

（さて、ここなら仕掛けてくるか？）

トモグイが警戒を強めた瞬間だった。

ブスッ！ と音がして、トモグイの太ももに何か刺さる。

「……っ!?」

トモグイは困惑した。音も、光もしなかったのだ。

銃であれ刃物を投げるのであれ、光ったり音が出たりするはずだ。それが、なにもなかった。

（改造した無光無音の武器か！）

暗闇の中で、光も音もなく人を殺す連続殺人鬼。トモグイのデータベースの中でヒット

するものが一つだけあった。

（お前か、ヤミウチ）

連続殺人鬼ヤミウチ。暗闇で暗視ゴーグルと改造ネイルガンを使い、無光無音で敵を殺す。

（だが、お前は必ず近くにいる）

改造ネイルガンの射程はそこまで長くない。少なくとも数メートル圏内にはいるはずだ。太ももに突き刺さった黒塗りされた釘を引き抜きながら、トモグイは反撃の算段を考える。

（次ヤミウチが攻撃してきたとき。そこが勝負だ）

今回は相手と同じ装備では戦えないが、それは仕方がないと割り切ることにした。逃げるくらいなら拘りを捨てた方が良い。

トモグイは上着の内ポケットから拳銃を取り出し、右手に構え、左手には折り畳みナイフを握る。

これが、本来のトモグイのスタイル。

（人気のない暗い道とはいえここは町中。撃てば発砲音ですぐに人が来るだろうな）

だが、ナイフだけで太刀打ちできる相手でもない。相手は飛び道具を使うのだから、こちらでも使わなければ倒せないだろう。

(連射で一気に叩く！)

トモグイの肩に痛みが走る。

(今だっ！)

トモグイは釘が刺さった場所と方向からヤミウチの居場所を割り出し、拳銃を構え、撃つ。

三回の発砲音が響く。

残りの弾数は二発。何故二発残したのかと言うと、止めの一発と予備だ。

「うぐっ!？」

暗闇から呻き声が響く。

(手応えはあったが……どうだ?)

様子を窺おうと拳銃を下げるが、ガシャン！ という音と走る音が聞こえてきた。

「逃がすか！」

ヤミウチがトモグイを狙っていたのであろう場所には暗視ゴーグルと改造ネイルガンが

捨ててあり、血だまりができていた。

（この傷では、もう時間の問題だろう）

ヤミウチに止めを刺すのを諦め、トモグイは現場から離れることにした。

自宅に帰ったトモグイは、肩に刺さった釘を引き抜く。

「わざわざ釘一本一本を黒塗りして、光が反射しないようにしてるのか」

トモグイは釘をゴミ箱に投げ捨てると、スマホを操作してオトサタに電話をかける。

『やあトモグイ。一昨日ぶりだね』

「オトサタ、ヤミウチを重傷にした」

オトサタはしばらく喋らず、キーボードを叩く音が電話越しに聞こえる。

『止めを刺さないとは、君にしてはハマしたね』

「向こうから襲って来たんだ。装備も拳銃とナイフだけだった」

『まあ、勝っただけでもたいしたものだよ』

オトサタはそう言つて笑うが、トモグイからしてみれば、英雄たるもの戦つて勝つのは当然といえた。

『それより、近々ハラサキが動くよ』

その言葉を聞いた瞬間、トモグイの思考が切り替わる。

机からメモとペンを取り出し、スマホは左手に持ち変える。

「いつだ？」

『二日後。場所は電車の中。詳しくはメールで送るよ』

「了解」

トモグイが電話を切ると、オトサタからメールが送られてきた。

トモグイはその内容をメモに書き写し、画鋲で壁に貼る。

トモグイは頭の中で計画を練る。

電車の中と言うのは不味い。民間人を巻き込む危険があるためだ。ハラサキが電車から降りた後で殺すことも考えたが、おそらくハラサキは電車内で犯行に及ぶだろう。被害者が出てからでは手遅れだ。

「助っ人がいるな」

ちょうど弾丸も三発撃ったことだしちょうどいいと、トモグイはハコビヤに電話をかける。

『もしもし、トモグイさん』

「ハコビヤ、悪いが二日後に一緒に電車に乗ってくれないか？」

『え、それって——』

「ハラサキが動かしにくい」

『ああ、そうですか……』

さっきまでは楽しそうに話していたのに、ハコビヤは急に沈んだ声で話し出した。

『でも私、戦闘とかはできませんよ？』

「ハラサキも素人だ。今回に限っては大丈夫なはずだ。それに、銃を撃つぐらいはできるだろう？」

『まあ、そのぐらいなら』

トモグイが頼れるのはオトサタとハコビヤしかない。そして、オトサタは銃すらも口々に撃てないほど戦闘力がなかった。

消去法的にハコビヤになるわけだ。それにハコビヤなら武器が切れた時の補充には事欠かない。

『では、二日後に駅に集合でよろしいですか？』

「ああ、じゃあよろしく頼む」

そう言ってトモグイは電話を切った。

第四章 腹裂き

二日後。トモグイは駅でハコビヤを待っていた。

「お待たせしました」

「ああ、今日はよろしくな」

トモグイは特に言及しなかったが、今日のハコビヤはいつものブカブカのコートではなく、おしゃれをしていた。

清楚な白のワンピースで、髪も綺麗に整えられていた。

「何か言うことはないんですか？」

「そんな装備で大丈夫か？」

「はあ……」

ハコビヤは溜め息を吐き、トランクを引っぱって改札へ向かう。

その後をトモグイが追う。

電車に乗ってしばらく待っていると、扉が閉まる。

トモグイとハコビヤは対面式の座席に座った。

「で、いつごろハラサキは動くんですか？」

「分かん」

ハコビヤは意味が分からなかった。

「オトサタからの情報は？」

「オトサタだつて万能じゃない。今日この列車でハラサキが犯行を起こすが、いつ頃かは

分からない」

「じゃあ終点までずっと乗ってなきやいけないじゃないですか！」

「そうだ」

ハコビヤは頭を押さえて溜め息を吐く。

「そんなことにレディを巻き込まないで下さいよ」

「レディ？」

「何故疑問形!？」

「ハハハハハハッ」

トモグイは笑う。それにつられて、ハコビヤも笑った。

(全く。何でこんな人を好きになっちゃったんでしょうね)

ハコビヤはトランクから弁当箱を取り出す。

「お弁当作って来たんですよ。食べてください」

「ああ、悪いな」

弁当箱の中身はサンドイッチだった。

(流石に難しい料理はハコビヤには無理か)

サンドイッチは弁当で言えばおにぎりと同じくらい基礎だが、武術で言えば基礎と言うのは奥義とイコールな場合が多い。

サンドイッチはパンとおかずが同時に食べられ、手も汚れず、冷めていても美味しいのだ。

気付けば、弁当箱一杯に詰められていたサンドイッチは綺麗に空っぽになっていた。

「どうでしたか？」

「……美味かった」

「よかった！」

ハコビヤはニパツと笑う。

それが妙に可愛らしくて、思わずトモグイは目を逸らす。

(飯を食ったら、なんだか眠くなってきたな)

トモグイは欠伸を噛み殺す。

「眠かったら寝てもいいですよ。ハラサキが動いたら起こします」

「そうか？ 悪いな」

トモグイは座席を倒し、目を閉じると、すぐに寢息を立て始めた。

「ふふふ。計画通り」

トモグイが眠くなつたのは、ハコビヤがサンドイッチに睡眠薬を盛っていたからだった。

今回、ハコビヤには目的があつた。それは――

(トモグイさんの寝顔写真を撮る！)

この時の為に高性能カメラまで用意しておいたのだ。

パシャリ！ とシャッター音が響き、無事にハコビヤの目的は終了する。

念のために取れた写真を確認しようとする、トモグイの首の傷が目に入った。

(この傷は痕になるだろうな。もっと私が上手く縫えていれば……)

トモグイは傷跡が残っても別段気にしないだろう。それが、余計にハコビヤを苦しめる。

（本当は、こんな危険なこと止めて欲しいんですけどね）

だが、そう言ってもトモグイは殺人鬼狩りを止めないだろう。それに、そんなトモグイはらしくない気もする。

（私はどうしたらいいんだろう……）

トモグイらしくいて欲しい。だが、危険なことはしてほしくない。だが、殺人鬼狩りを止めさせることはトモグイらしさを失わせることになるかもしれない。

堂々巡りになってきた思考を止める為、一旦ペットボトルの茶で喉を潤す。

すると、隣の車両から悲鳴が聞こえてきた。それも一人ではない、連続で老若男女何人もの人間の悲鳴が聞こえてきたのだ。

「トモグイさん！ 起きて下さい、始まりましたよ！」

自分が寝かせておいて申し訳ないとも思ったが、ハラサキが動いたら起こすという約束でもあったし、仕方がないと割り切る。

「ハラサキが動いたか！」

「隣の車両です！」

ハコビヤが言い切る前にトモグイは貫通扉へ向かう。

すると、扉が開き、隣の車両から腹部にナイフが刺さった血塗れの男が出てきた。

「大丈夫ですか!？」

トモグイが慌てて支えるが、トモグイには医療の知識がほとんどない。

「ハコビヤ、お前はここで被害者の応急手当をしてくれ」

「でも、それじゃトモグイさんが……」

「俺は負けない」

そう言つてトモグイは笑いかける。

「分かりました」

ハコビヤはトランクからトモグイが怪我をした時の為に持ってきていた医療キットを出す。

トモグイは右手に折り畳みナイフを握ると、右手で貫通扉を開け、隣の車両へ入つていった。

隣のハラサキがいる車両は酷い有様だった。

床だけでなく窓ガラスにも血が飛び散り、急所を刺された人たちは虫の息で床に倒れて

いる。

(もう手遅れな人ばかりだ。構ってられない)

トモグイはもう手遅れな人々を見捨て、ハラサキを探すことにした。

車両の端まで来たとき、トモグイは違和感を覚えた。

(ハラサキがない。それに、軽傷者が少ない?)

ハラサキは腹を狙う為、軽傷者が少ないのは分かるが、流石にこれは少なすぎる。

(ちよつと待て。おかしいぞ、ハラサキの凶器のナイフは、車両に助けを求めに来た奴の腹に刺さってたはず……!?)

トモグイの頬を冷や汗が伝う。

(ナイフを何本も用意していた可能性もある)

トモグイは震える手でスマホを操作する。

(だが、奴がハラサキだとしたら、他に車両へ逃げ込んできた奴がないのも頷ける)
トモグイはハコビヤに電話を掛けるが、出ない。

(この状況で出ないってことは、出られないってことだ)

ハコビヤは若いがそれなりに経験を積んでいる。報連相ぐらいは弁えてるはずだ。

トモグイは全速力でハコビヤの乗っている車両に戻る。

(間に合ってくれ！)

大慌てで貫通扉を開ける。そこにあったのは――

第五章 先輩

時間はトモグイが隣の車両に向かった直後まで遡る。

「すぐに診ますので、横になってください」

男は言われた通り床に横になる。

ハコビヤは男のシャツを鋏で切ろうとして気付いた。

(この人、外傷がない。血は全て返り血だ)

不思議に思ってナイフの刺さった場所を見ると、腹に雑誌が挟んであった。

この状況でこんな手の込んだことをする理由はそれほど多くない。

反射的にハコビヤは距離を取る。

「ああ、気付かれちゃったか？」

「あなたが、ハラサキですね」

「お嬢ちゃん、俺のこと知ってるんだ？ 警察官には見えないけど」

ハラサキは腹に挟んである雑誌からナイフを引き抜き、ハコビヤに舐めるような視線を向ける。

ハコビヤはトランクに目を向ける。

いつもなら拳銃をコートの内ポケットに入れておくのだが、今日はワンピースだ。

仕方なく、拳銃はトランクに入れていた。

（トモグイさんの言う通りだ。こんな装備じゃ戦えない）

「じゃ、いっくぞ〜」

そう言うとハラサキはナイフを逆手で握ってハコビヤに迫る。

ハコビヤは格闘術は使えない。拳銃がなければほとんど素人なのだ。

パン！

銃声が響き、ハラサキの足に銃弾がめり込む。

（トモグイさん？）

だが、おかしい。トモグイは貫通扉に向かった。だが、今の弾丸は貫通扉と反対側から

撃たれたのだ。つまり――

(新たな殺人鬼!?)

ハコビヤは恐る恐る後ろを振り向く。

「大丈夫かい？ お嬢ちゃん」

そこにいたのは黒髪に少し白髪の混じった初老の男性だった。服はスーツで、拳銃はトモグイやハコビヤと同じニューナンブM60だ。

わざわざそんな旧式の拳銃を好んで使う殺人鬼はトモグイしかない。つまり――

「警察……」

「よく分かったな」

男は胸ポケットから警察手帳を出し、ハコビヤに見せる。

(私がハコビヤだということはまだバレてない。このまましらばつくれれば……)

その時、貫通扉が勢いよく開いた。

「無事かハコビヤ!？」

(トモグイさん、心配してくれるのは嬉しいけど、よりによってなぜ今……)

トモグイはハコビヤと一緒にいる男を一目見ると、目を丸くした。

「センパイ？」

「……トモグイ」

センパイはトモグイを苦虫を噛み潰したような表情で見る。

「今、ハコビヤと言ったな。近くにいるのか？」

トモグイに拳銃を向けながらセンパイが問いかける。

トモグイは辺りを見回す素振りを見せると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「いいや。残念ながら、ハコビヤは逃げたみたいだな」

それがトモグイのメッセージだとハコビヤにはすぐに分かった。

「お嬢ちゃんは無事なところまで逃げろ。こいつは俺が引き受ける」

「はい。お気を付けて」

果たしてそれは、誰に言ったのか？

ハコビヤが逃げたのを確認すると、トモグイはセンパイにきさくに話しかける。

「センパイ、あんた一人か？」

それをセンパイは忌々しそうに聞いていた。

「俺がそれをお前に教えると思うのか？」

トモグイはセンパイに拳銃を向けられているにもかかわらず、ニコニコと楽しそうに会話を楽しんでいた。

「じゃあ、俺が教えてやるよ。あんたは一人だ」

「何故そう思う？」

「あんたはハラサキを抑える役。ついでに、俺とこうしてお喋りでもして、時間稼ぎをする役だ」

センパイの顔が引きつる。

「本隊は駅のホームで万全の態勢で待っているんだろう？俺を捕まえる為に」

「チッ」

センパイは唾を吐くように舌打ちをした。

「それが分かってて、何でお前は逃げないんだ？」

「逃げる？自動車よりも遥かに速いこの電車から？身一つで飛び出せば、それこそミンチだよ」

だが、センパイは納得いかないといった表情でトモグイを見る。

「それで諦めて捕まるお前じゃないだろう」

(流石センパイ。俺のことをよく分かつてる)

そんなことを話している間に、電車は減速を始めた。

「センパイ。あんたとできるだけ長く話していたくてな」

センパイは黙って聞いていた。

「俺が警察を抜けたせいで、センパイは嫌な思いをしたんじゃないのか？」

センパイは何も答えない。だが、手塩に掛けて育てた後輩が警察官を辞め、連続殺人鬼になったわけだから、当然周りからの視線は冷たかったであろう。嫌味の一つも言われていても不思議ではない。

「あんたの為に俺は——」

十分に減速したところで、トモグイは拳銃を抜き、撃つ。所謂クイックドロウだ。

狙ったのは自分に一番近い窓。撃ちながら窓へ駆け寄り、そのままぶつかるつもりで叩き割る。

「英雄になるよ」

それだけ言い残すと、トモグイは窓から逃げた。

センパイはトモグイを殺せない。何年も世話を焼き、語り合い、飯を食った後輩を殺す

ことができないくらいには、センパイも常識人だ。

故に、センパイがトモグイを撃つ際には、足元に標準を合わせる必要がある。トモグイはその隙に、十分逃げられるのだ。

トモグイを逃したセンパイはしばらく茫然としていたが次第に怒りを覚えた。

「クソッ！」

自分が仕留めなければいけないことは分かっている。自分の失態だということも分かっている。

だが、それでもセンパイの脳裏には、無邪気に笑う正義感溢れる警察官時代のトモグイの姿がこびり付いて離れなかった。

(俺が終わらせるべきなんだ……)

センパイは拳をグッと握りしめた。

トモグイは電車の窓を体当たりで割り、そのまま地面にゴロゴロと転がる。全身が軋むが、構っている時間はない。

センパイが本隊に連絡を入れれば、増援がトモグイを確保しに動くだろう。そうなる前にトモグイはここを離れなければならなかった。

線路の上を全力疾走し、町に近づいたところでレールから逸れる。これで人ごみに紛れることができる。

一息ついたトモグイはハコビヤに電話をかける。

(そういえば、ハラサキを殺すのを忘れていたな……)

最も、センパイの前では絶対に無理だろうが。

少し待つと、ハコビヤが電話に出る。

『もしもし、トモグイさんですか？』

『ああそうだ。無事か？ ハコビヤ』

『おかげさまで』

トモグイは失笑する。ハコビヤにしては珍しい皮肉だ。

要するに今のは「お前のせいで死にかけてんだぞ」という念押しだ。

『このお詫びは必ずするよ』

『では、聞きたいことがあります』

「なんだ？」

『トモグイさんの過去について』

トモグイの顔から貼り付けたような笑みが消える。

「それを聞くということが、どういふことか分かるか？」

『あなたのトラウマを抉る……ということになりますかね？』

トモグイは溜め息を吐く。そこまでの覚悟があるのなら、話しても問題ないだろう。何より、慰謝料を取られるよりはずっとマシだ。

「じゃあ、話すか——」

第六章 洗脳

小さい頃からトモグイには、正義の味方に対して強い憧れがあった。

幼稚園や小学生の頃ならまだわかるが、それは中学生、高校生になっても変わらなかつた。

結局その憧れに身を任せるまま、高校卒業後は公務員試験を受け、警察学校へ入った。

警察学校でもトモグイはそれなりの成績を残し、将来を有望視される一人として正式に警察官になった。

だが、そこからが地獄の始まりだった。

それからトモグイが見たものは人間の醜さに他ならない。

罪を認めようとせず、しらばっくれる加害者。

加害者からできるだけ多く金を搾り取ろうとする被害者。

他の警察官の汚職。

点数稼ぎにだけ全力でかかる上司。

トモグイが警察官を辞めようか悩んでいた時、トモグイに転機が訪れる。

連続殺人鬼メイカー「センノウ」を捕まえたのだ。

だが、誰一人としてセンノウと関わろうとはしなかった。

センノウはその名の通り、一般人を洗脳して連続殺人鬼にしてしまうと恐れられていたのだ。

結果的に、捕まえたトモグイが話を聞くことになった。

「君は、現状に満足していないんじゃないかい？」

センノウは開口一番にそう言った。

トモグイのことを何も知らない筈なのに、トモグイの心情をピタリと当てて見せたのだ。もちろん、捕まる前に情報を集めていた可能性はある。

だが、新人警察官であるトモグイの情報なんてかき集めてもそうそう出てはこない。

「何故そう思う？」

トモグイは興味がわいて聞き返した。

「君の目が幸せそうじゃないからさ」

センノウは心理カウンセラーを職業にしていた。

心の傷ついた者の隙間に入り込み、信頼を勝ち取り、人殺しに仕立て上げてしまうのだ。

逆に言えば、心が健康なもの、心が強い者は人殺しにならないが、心というのは常に動き、変化し続ける。心の弱いときがない人間など、一人もいなかった。

「俺は別に幸せになりたいわけじゃない」

「……何かやらなければならぬことがあるみたいだね？」

「正義の味方になりたいんだ」

気付けば、トモグイは自分のことをペラペラと話してしまっていた。

「正義の味方になるのは難しいよね。なら、逆転の発想はどうだろう」

「逆転の発想？」

「正義の味方ではなく、悪の敵になるっていうのは」

確かにそれでも結果的には一緒だ。

「悪の敵になるにはどうすればいいんだ？」

「簡単なことさ。悪人を殺して回ればいい」

確かに、それなら悪人もトモグイのことを恐れるだろう。だが、それは連続殺人鬼になるということだ。

「私から言えるのはここまでだ。このままでは正義の味方になれないのは明白。行動を起こすかどうかは君が決めるべきだ」

口ではそう言ったが、センノウには分かっていた。トモグイが必ず行動を起こすと。

その日の夜。覚悟を決めたトモグイはもう一度センノウと面会した。

「やあ、どうしたんだい？」

「……覚悟を決めたよ」

センノウはトモグイにバレないように笑みを浮かべる。

「そうか。なら、私が君を手伝おう。ここから出してくれ」

トモグイはゆつくりとセンノウの頭に銃を向け、照準を合わせる。

「何の真似だい？」

「お前に操られるかもしれないからな。ここからは俺のやり方でやる」

「なら、せめてアドバイス代わりに見逃してはくれないかな？」

トモグイは発砲した。

「記念すべき一人目だ。精々誇れ、センノウ」

騒ぎにならないうちに素早く拘置所を出る。

こうして、連続殺人鬼を殺す連続殺人鬼、トモグイは誕生した。

第七章 先読み

「——つてのが俺の警察官時代の話だ」

『それってセンノウに操られていませんか？』

「最初はそうだったかもな。だが、奴を殺しても心変わりはなかったし、俺が後悔してな

いんだ。大丈夫だろう」

電話をしながら道を歩いていると、ふと正面からやってくる男の姿が目に入った。

(あいつ、銃を隠し持つてるな)

連続殺人鬼の可能性が高いが、男の顔には見覚えがない。

(連続殺人鬼じゃないなら、銃刀法違反ぐらいは見逃してやるか)

そう思つて通り過ぎる瞬間、男は拳銃を手に取った。

トモグイも相手の動きに合わせて拳銃を手に取り、素早く頭を狙う。

それぞれの拳銃の銃口がそれぞれの頭を狙っていた。

「流石だな。トモグイ」

「何者だ？」

「ただの殺し屋さ。サキヨミつて名前を通つてる」

サキヨミという名前には聞き覚えがない。いくらトモグイと言えども、全ての連続殺人鬼の名前を憶えているわけではない。ましてや、相手は連続殺人鬼ではなく殺し屋だ。

(殺し屋と言うことはかなりの数の人間を殺しているはず。殺しても問題ないだろう)

頭の中でそう結論付けると、トモグイは動いた。フェイントで大きく動くよう見せかけ、

サキヨミの銃口を頭から外してから、少ない動作で引金を引く。

たったそれだけの筈だった。

だが、トモグイの頭にはまだ、サキヨミの銃口がぴったりとくっついている。

「無駄だ。俺に嘘フエイクは通じない」

今度はサキヨミが引き金を引こうとする。

トモグイは思い切り飛び退いて回避する。

本来ならギリギリで射線を避けて次の攻撃に持ち込みたいところだが、トモグイは今回それをするのは命取りになると直感で分かった。

しかし、目いっぱい避けたにもかかわらず、サキヨミの撃った弾丸はトモグイの左腕に命中する。

(どういうことだ？ まるで、最初から避けることを分かっていたような……)

サキヨミはまるで避けた先のトモグイの場所が分かっていたかのように弾丸を命中させた。トモグイには、それがどうにも不可解だったのである。

「腕か。まあまあだな」

「お前、未来が見えるのか？」

長い沈黙の末に、不敵な笑みを浮かべたサキヨミは答えた。

「そうだと言ったら？」

トモグイは自分の生唾を飲み込む音が聞こえた。

未来が見える相手に対抗できるのは未来が見える人間だけだ。そして、トモグイには未来が見えない。

（俺は、ここで死ぬのか……？）

トモグイの脳裏にそんな言葉がよぎった。その時だった。

「トモグイさん！ 伏せて!!」

反射的に言われた通りに地面に伏せると、無数の弾丸がサキヨミに向かって撃ち込まれる。

「ぐっ!？」

サキヨミは回避を試みたが、回避し切れなかった弾丸が左手を蜂の巣にする。

それを見て、トモグイは違和感を覚えた。

（未来が見えるのなら、回避できるはずだ）

つまり、サキヨミに未来視の能力はないということだ。

そうなると疑問が残る。先程のトモグイの攻撃をなぜ予知できたのかということと、予知できる攻撃と予知できない攻撃の差は何なのかということだ。

「トモグイさん、逃げますよ！」

熟考していると、短機関銃サブマシンガンを撃ち続けているハコビヤが叫ぶ。

(腕の傷もある。ここは退くべきか)

トモグイが最近学んだことがある。

勇敢と蛮勇は違うということだ。

ここぞという時に勇気を振り絞るのが勇敢で、勇気では絶対にどうにもできない状況に無茶をして突っ込んでいくのは蛮勇だ。

ここで戦い続けるのは蛮勇と言えた。

退くならハコビヤが牽制している今しかないだろう。

トモグイはハコビヤのいる場所までほふく前進で進んで行く。

「逃げるぞ」

「はいー！」

ハコビヤも短機関銃を撃ち続けながら後退する。

「逃がすか！」

サキヨミも拳銃を構えて撃つが、拳銃を持つ手の方向さえ分かっていたら、避けるのも難しくはない。

あとは全力で走るだけだ。だが、ハコビヤはトランクを持っていて、あまり速くは走れない。

「トランクは俺が持つ。全速力で走れ！」

「分かりました。お願いします」

ハコビヤからトランクを奪うと、小脇に抱えて走る。

（重っ！ 何が入ってるんだ!?!）

ハコビヤから受け取ったトランクは重く、トモグイの重心が揺れるぐらいの重さがあった。

全力疾走すること数分。角という角を曲がり、人気のない道を選び続けていると、小さな公園に出た。

「ここも直に見つかるだろう。反撃の用意をするぞ」

トランクを地面に置き、トモグイはハコビヤに言う。

「このまま逃げ続けるわけには行かないんですか？」

トモグイは逡巡する。

まず、このまま逃げ続けるのは不可能だろう。このトランクを持ちながらではすぐに追いつかれるだろうし目立つ。

ここから逃げられたとしても、きつとサキヨミは追いかけて続けるだろう。おそらく、トモグイの自宅もすぐに突き止められる。

「俺はここで迎え撃つ。ハコビヤ、お前は俺が今から言う物を置いて逃げろ」

ハコビヤは何となくだが、自分がこのまま言われるままに逃げれば、トモグイがここで死ぬという確信があった。

「私も残ります。何が必要なんですか？」

「ピンセットと消毒液」

ハコビヤはトランクを開くと、言われた品を取り出し、トモグイに渡す。

「短機関銃もそのトランクに入ってたのか？」

「便利なので持ち歩いてます」

会話をしながらもトモグイの手は動き続けていた。左腕の被弾箇所消毒液を流しかけ、ピンセットで弾頭を引つ張り出す。

「トモグイさん。私がやってもよかったですよ？ 麻酔もありますし、縫合だって

……」

「時間がない。縫合はしない。あくまで応急処置だ」

ピンセットで引き抜いた弾頭を地面に放り、血の付いたピンセットを消毒液で消毒する。左腕を動かしてみる。まだかなり痛むが、動くことは動く。これなら問題ないだろう。

「短機関銃の弾倉マガジンも交換しておけ」

「了解」

言われた通り弾倉を交換し、弾詰まりジャムしていないことを確認する。

トモグイはオトサタに電話をかける。

『もしもし？』

「俺だ」

『トモグイか』

「いきなりだが、サキヨミの情報くれ」

オトサタと繋がっている電話から、カタカタとキーボードを打つ音が聞こえてくる。

『サキヨミは連続殺人鬼ではなく殺し屋だ。でも、既に何人も殺しているから、君の眼鏡にも適うと思うよ』

「そいつに攻撃されてる」

『うん、知ってる』

「なに？」

『だって、サキヨミに情報を売ったのは僕だからね』

トモグイは言葉が出なかった。

これは、トモグイの落ち度だ。

オトサタとの契約では、トモグイの情報を好きに横流ししているという条件で情報をタダで買っていたのだから。

『正確には、サキヨミの雇い主の裏社会連中にだけれどね』

「つまり、裏社会が俺の命を狙ってるってことか？」

『そういうこと』

トモグイからしてみれば、ヤクザも極道もマフィアも、金儲けのために平気で人を殺し、

貶め、不幸にする憎むべき連中だ。

だが、裏社会は広く、そして深い。トモグイ一人で相手にするのは不可能だ。

裏社会を滅ぼすのは、トモグイが信者を集め、信者たちに訓練を施し、武装をさせてからにしようと思っていたのだ。

ちなみにこの話はオトサタにもしていない。

(俺が裏社会を潰そうとしてるのに、連中が勘づきやがったのか……！)

トモグイはハラサキ、センパイと戦った後だ。故にコンデイションは最悪。ここをわざと狙って来たのだとすれば、相当な策士と言えるだろう。

『僕に応援を頼みに電話したのかもしれないけど、残念ながら、俺は死ぬのはごめんなん
でね』

「ふんっ、拳銃も撃ったことのない奴なんてアテにしてねえよ」

『そっ。じゃあ、生きてたらまた会おう』

「その時はぶん殴ってやるよ」

それだけ言うと、トモグイは一方的に電話を切った。

「よかったですか？ オトサタも弾避けぐらいにはなったのに」

ハコビヤのいつも通りの毒舌に、トモグイはクスクスと笑う。

「お前も死にたくなければ逃げろ」

「お断りします。あなたを死なせたくないのです」

ハコビヤは満面の笑みで言う。まるで、トモグイが死なないことを確信しているかのようだ。

「じゃあ、付き合ってもらおうぞ、ハコビヤ」

「ええ、これからもよろしくお願いします。トモグイさん」

二人が笑い合っていると、足音が近づいてきた。

「別れの言葉は済んだか？」

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながらサキヨミが近づいてくる。

短機関銃で蜂の巣にされた左手には包帯が巻かれているが、傷口が多いため、血が滴っている。

ハコビヤは短機関銃を構え、トモグイは右手に拳銃、左手にナイフを構える。サキヨミも既に自身の拳銃を抜いていた。

空気が張り詰め、誰かが生唾を飲み込む音が聞こえる。

ハコビヤが引き金を引こうとした、その時だった。

サキヨミが飛び出し、遊具を盾に近づいてくる。

「くっ！」

ハコビヤも短機関銃を撃つが、もともと短機関銃は連射性能が高い都合上反動が大きい。遊具の影に隠れられては、そうそう命中はしない。

「ハコビヤ！ 一旦やめろ！」

「はっ」

短機関銃を連射している中ではトモグイもサキヨミに近づけない。トモグイはサキヨミに近づくためにハコビヤに短機関銃を撃つのを止めさせた。

サキヨミは左手が使えない。接近戦ならば、トモグイの方が有利なはずだ。

ガンⅡカタと呼ばれる武術がある。これは、拳銃を持った状態で近接戦闘をするという武術であり、映画の中で作られたフィクションの武術である。

だが、二人の戦闘はそんなフィクションじみたものだった。だが、トモグイの頬には冷や汗が伝う。

（何だこれ、全然当たらねえさ）

斬撃も殴打も銃撃も、何一つサキヨミには当たらない。今はトモグイにも攻撃は当たっていないが、それはトモグイが必死に回避しているからだ。それを、サキヨミは涼しい顔で行っている。

(これも未来が見えているからってことか……)

だが、トモグイはサキヨミの未来視は万能ではないと考えている。何故なら、ハコビヤの短機関銃による不意打ちにサキヨミは対応できなかった。

それには、何か理由があるはずなのだ。

(こいつ、もしかして……)

ハコビヤに視線で合図を送る。

ハコビヤが視線に気付き、短機関銃をサキヨミの背中に向けて撃つ。

「ぐあっ!」

致命傷ではないが、サキヨミの腰に命中した。

(サキヨミは、不意打ちには対応できないのか? 未来視だから、目で見えている者にか効果がない? それとも、ハコビヤが特別なのか?)

よく考えれば、サキヨミの左手を蜂の巣にしたのもハコビヤだった。

(……いや、ハコビヤが特別なわけじゃなさそうだな)

ハコビヤが特別なら、もつと被弾しているはずだ。

この公園に来てからも、ハコビヤは短機関銃を連射しまくっているが、あれ以降は普通に回避している。

(ということは、目に見えているもの以外には効果がないのか?)

「少しわかって来たぞ、お前の未来視の正体が！」

その言葉に、サキヨミはピクリと眉を動かすと、戦闘を止めた。

「聞こうじゃないか。俺の未来視のネタとやらを」

「お前の未来視は読心術による未来予測だな？」

サキヨミは答えなかった。ただ、破顔して凶悪な顔で笑う。

「だったら、どうする？」

「言葉じゃなく、行動で示してやろう」

そう言うのとトモグイはガンⅡカタを再開する。

(無駄だ。俺が何年修行したと思っっている)

だが、サキヨミは違和感を覚えていた。

先程までとは違い、トモグイの攻撃が当たるようになってきたのだ。

読心術は文字通り心を読む術だ。つまり、じゃんけんて絶対に勝てるようなものだ。

では、読心術を極めた相手にじゃんけんで勝つにはどうすればいいのか？

相手が手を出してから自分が手を出せばいい。所謂、後出しじゃんけんをすればいいのだ。

「ぐあっ!?」

ついに、トモグイの銃弾がサキヨミの腹部に命中する。

(よし、いける。このままなら勝てる!)

トモグイがそう思っていた時だった。

サキヨミがトモグイに背中を見せ、後ろのハコビヤを狙う。

「伏せろ!」

トモグイが拳銃をサキヨミの頭部に向かって撃つが、その時にはもう、サキヨミの銃弾がハコビヤに向かって発射されていた。

「がっ!?!」

銃弾はハコビヤの胸部に命中した。

「ハコビヤ！」

トモグイは念のためにサキヨミの頭部にもう一発銃弾を撃ち込んでから、ハコビヤの元へ向かう。

ハコビヤの血に染まったコートを脱がせ、服をナイフで切って銃創を見る。

(心臓には当たっていないが、深い。十分に致命傷だ……)

トモグイが諦めかけていると、ハコビヤが口を開いた。

「ト……グイ……さん……。サ……ミは？」

「サキヨミは倒した。お前のおかげだ」

ハコビヤは安心したような顔で微笑む。

「覚えて……いますか？」

第八章 運び屋

トモグイとハコビヤの出会い、まだハコビヤが半人前の運び屋だったころまで遡る。

「待て！」

「追え！ 逃がすな！」

運び屋という職業は、基本的に違法な物を扱う上、誰かにとって都合の悪いものを扱うことになる。

よって、常に誰かに命を狙われるのだ。

そして、警察にも、裏社会の人間にも相談できない。

(トランクを持ったまま逃げ切るのは無理ですかね……)

そう結論付けたハコビヤは、どこかに身を隠すことに決めた。

運び屋が雇われるのは、港の場合が多い。港で受け取った違法品を運び屋が内陸に流すのだ。

今回呼ばれたのも港だった。その為、港には沢山の船が泊めてある。

無数に泊めてある船の一隻に潜り込めば、追手を撒けるかもしれない。

そう考えたハコビヤは、手近にあった一隻の船へ潜り込んだ。

(ここでしばらく身を潜めていよう)

運び屋がそう考えていた時だった。

「おこ」

声と共に、ハコビヤの額に銃口が押し付けられる。

「俺の船に何の用だ？」

（ま、まさかまだ人が乗っていたなんて……！）

このハコビヤの額に銃口を押し付けている人物こそ、若かりし頃のトモグイであった。
「なんとか言え」

トモグイは、まるでヤクザのように額に押し当てた銃口をグリグリと捻じる。

「す、すみません。今、悪者に追われて……」

「なに？ 悪者？」

トモグイは今回、違法品の密輸入の現場を押さえる為に仕事で張っていたのだ。

（子供を保護すれば、新聞に載ったりして手早く正義の味方になれるかもしれないな）
そう考えたトモグイは、ハコビヤを匿うことにした。

「ちよつとここで大人しくしてろ」

「はい」

そう言うと、トモグイは船から降り、密輸入の取引現場に突撃していく。

「な、ナニモンだよ」

「かまうな、撃て！」

銃弾が飛び交う中、トモグイはまるで矢避けの加護でもあるかのように銃弾を避けて接近する。

（拳銃は使えねえ。殺しちゃ不味い。となれば——）

トモグイは十分に接近すると、相手の胸ぐらを掴み、柔道の要領で投げる。

「密輸入の疑いで現行犯逮捕オ!!」

大声で叫ぶ。すると、港に泊まっていた船の中から、警察官がゾロゾロと出てきた。

「逃がすな！」

「続け！」

陸からもパトカーのサイレン音が何重にも聞こえてくる。

「大人しく投降しろ！」

こうして、密輸入者たちは一人残らず捕まった。

ハコビヤは船の外に出て、トモグイの戦闘の一部始終を見ていた。

（凄い。努力だけではあそこまでは出来ない。何か天性の才能を感じる）

そこで、パトカーのサイレン音に気付く。

(私はここで捕まるわけにはいかない)

ハコビヤのトランクは防水だ。水に沈めても問題ない。

ハコビヤはトランクの持ち手を縄で梯子と結び、海へと放る。

(これで、いつでも回収に来れる)

ハコビヤは、足早にその場を後にした。

それから三日後。警察の調査が終わったことを確認してから、ハコビヤは港に訪れた。

今は昼間だ。漁師は全員沖に出ており、船は一隻もない。人目もまばらだ。

夜に来ようかとも思ったが、夜では作業がしにくい。よって、夜の次に人目に付きにくい真つ昼間に来たのである。

ハコビヤは梯子に結んであった縄を手繰り寄せ、トランクを引き上げる。

(よし、これで――)

「おい、何してる?」

ハコビヤは思わずトランクを海に落としてしまう。

振り向くと、そこにはトモグイがいた。

(この前の警察官。不味い、私じゃ勝てない)

ハコビヤはこの場を切り抜ける方法を考える。

(縄を切る？ 道具もないし、今からじゃ間に合わない。何より疑われる)

(逃げる？ 相手の方が確実に速いし、人手を使って追われたら不味い)

(戦う？ 武器は全部トランクの中。素手で勝てるとは思えない)

結果、ハコビヤが選択したのは――

(適当にはぐらかすしかない！)

ハコビヤの手に汗が滲む。少しでも怪しい台詞を言えば豚箱行きだ。

「トランクが落ちてしまったので、引き上げているんですよ」

「そうか。なら、俺も手伝うよ」

トモグイはハコビヤのところまで歩いてくると、縄を掴み、トランクを引き上げる。

(ま、不味い。トランクを開けられたら違法な物がたくさん……)

もし、トモグイが端からハコビヤのことを怪しんでいて、証拠品のトランクを確保するために動いているとしたら。

考えれば考えるほどハコビヤはどつぼにはまっっていく。

トモグイがトランクを引き上げている今なら逃げられるかもしれない。少なくとも不意打ちはできる。

ふと周りを見ると、地面には人を殴り殺せそうなコンクリートブロックがゴロゴロしている。

「よし、引き上げたぞ」

ハコビヤは自分の人生が終わったのを感じた。

(殺るしか——ない！)

ハコビヤが地面に落ちているコンクリートブロックを拾おうとすると、トモグイが縄を切り、トランクをハコビヤに渡す。

「悪い事はせず、真つ当に生きろ」

そのままトモグイは茫然とするハコビヤの横を通り過ぎて去っていく。

(……助かった?)

ハコビヤは、自身が見逃されたのだと気付くまでに、しばらくの時間を要した。心臓がドキドキと鼓動を主張し、身体が熱い。

(そうか。これが……)

ハコビヤは生まれて初めて、恋をした。

実際には、それは恋ではなく、「吊り橋効果」というものだったのかもしれない。

だが、そんなことはどうでもよかった。

ハコビヤは家へ帰ると、すぐにトモグイのことを調べ始めた。

名前、年齢、血液型、経歴、目的、住所、電話番号——ストーカーも真つ青の裏の情報網を使い、トモグイのことを徹底的に調べ上げた。

そしてハコビヤは運び屋を止め、真つ青に生きることにした。

ハコビヤには学歴がない。そのため、バイトを掛け持ちし、工場で働きながら、暇があればトモグイのことを調べる毎日を過ごしていた。

そんなある日、予想だにしていなかった事態がハコビヤを襲った。

トモグイが、連続殺人鬼になったのだ。

自分に足を洗えと忠告した上で見逃してくれたような人がだ。

有り得ない。何かの間違いだとも最初は思った。だが、調べれば調べるほど信憑性は高まっ

ていく。

だが、同時にこれはチャンスでもあった。

(裏の世界からなら、助けられる)

ハコビヤは、運び屋としての仕事を再開し、トモグイに武器を卸すようになった。

第九章 共喰い

ハコビヤは口から血を滴らせながら、微笑んだ。

「あなたの……役に立てて……良かった」

ハコビヤはトモグイの腕の中で、幸せそうな顔で眠りについた。

トモグイは泣いていた。

(俺は英雄なのに、助けられなかった……)

トモグイは自暴自棄になっていた。

英雄は、民間人を危険に晒さない。正確に言えば、ハコビヤは民間人ではないのだろう。だが、大切な仲間でもあった。英雄ならば、仲間を守るのは当然だ。

(俺が一人で戦えばよかつたんだ。ハコビヤが戦闘に向いていないのは、知っていたのに……)

トモグイがハコビヤの死体を抱えて一人考え込んでいると、センパイが走って公園へ入って来た。

「トモグイ。これ……お前がやったのか？」

おそらく、転がっているサキヨミとトモグイの腕の中で眠るハコビヤのことを言っているのだろう。

トモグイは、ハコビヤのトランクから拳銃を取り出す。その拳銃は、トモグイと同じニューナンブM90だった。

(こんなところまでお揃いにするとはな)

「動くな！」

センパイが拳銃を構えるが、トモグイは構わず拳銃の引金に指を掛ける。

「最後の戦いだ。センパイ」

トモグイが憑き物が晴れたような笑顔でそう言った。

「残念だが、お前に付き合っている暇はない」

センパイがそう言うと、ちらほらと警察官が集まり始めた。

あらかじめ、センパイの服には発信機が付けてあり、トモグイと会った時はすぐに他の警察官に分かるようになっていたのだ。

「そうか。俺と一対一タイマンは嫌か」

トモグイは空を仰ぐ。その表情は見えないが、右手でコートの内ポケットを探っていた。
「なら——」

左手にはハコビヤの拳銃。右手にはトモグイの拳銃だ。

「まとめてかかってこい」

静かで、決して声を張ったわけではない。にもかかわらず、それはよく響いた。

トモグイのその言葉を皮切りに、警察官たちがトモグイに向かって突撃していく。

ある者は警棒を持ち、ある者は刺股を構え、拳銃を構える警察官もいた。発砲許可も下りているのだ。

トモグイは、今までに培ってきた全ての技術を用いて戦った。

警察官時代に鍛えた空手、剣道、柔道だけでなく、連続殺人鬼たちと渡り合ってきた実戦経験。

その全てが、今のトモグイの糧となっていた。

トモグイの基本装備は右手に拳銃、左手にナイフだ。だが、今回は二丁拳銃だった。前述したガンⅡカタという武術がある。先程までは一丁の拳銃だったが、ガンⅡカタは本来、二丁拳銃で行うものなのだ。

トモグイはなるべく弾を温存して戦った。拳銃のグリップで敵を気絶させたり、蹴りで気絶させたりをメインで使用していたのだ。

センパイには分かった。トモグイはセンパイとの一騎打ちに備えて弾を温存している。だが、それだけではない。

トモグイは民間人を危険に晒さないという自分ルールを守り切るつもりなのだ。

致命傷を与えないように銃を撃つのは難しい。元々銃は、人を殺す為に作られた道具だからだ。

しばらくすると、何十人もいた警察官が全員倒れていた。公園内で立っているのは二人だけ、トモグイとセンパイだ。

「じゃ、殺ろうか、センパイ」

センパイも拳銃を構えて駆け出した。合わせてトモグイも駆け出す。

当たり前のことだが、銃の命中率は近づけば近づくほど上がっていく。

センパイの腕、肩、足に弾丸が命中する。

だが、センパイの勝ちだった。

トモグイの胸に弾丸が命中した。

トモグイが後ろに倒れ込む。

センパイは慎重に距離を詰めていく。

(致命傷だ。もう息はないはず……)

センパイは片手でトモグイの脈を確認する。

脈は止まっていた。

トモグイは死んだのだ。

だが、センパイは違和感を覚えた。

(こいつ、何で笑ってやがるんだ?)

トモグイ捕獲作戦。そう名付けられ、決行された作戦は、死者こそ零名だったものの、重傷者二名、軽傷者十五名と、甚大な被害をもたらした。

無事、連続殺人鬼トモグイは射殺され、世界に平和が戻った。

トモグイを射殺し、連続殺人鬼ハラサキを逮捕したセンパイは警察の英雄として持ち上げられていた。

センパイは病院の屋上で煙草を吸っていた。

トモグイを捕まえるまでは吸わないと禁煙していたのだ。

トモグイを殺してからというもの、センパイはトモグイの最後の表情のことばかり考えるようになった。

そして、最近やっと自分なりの答えが出た。

(トモグイ、お前……死にたかったのか?)

仲間に裏切られ、自分を想ってくれていた人が自分を庇って死んだ。死にたくもなるだろう。

だが、彼は英雄を謳っていた。英雄が自殺するのは格好がつかない。

だから、英雄らしい死に方を選んだのではないだろうか。

そう、討ち死にだ。

どんな英雄も必ず誰かに討たれ、英雄を討った戦士が新たな英雄となる。そうやって英雄の歴史は繰り返されてきた。

センパイは自嘲したように笑う。

「トモグイに後を任されたわけか。参ったな、そろそろ引退なんだが」

センパイが懐から拳銃を取り出す。

トモグイが愛用していたニューナンブM60だ。

センパイは煙を吐き出す。

煙は天へと昇って行った。

「聖剣と聖者の右腕」

著者 八月十五

協力 石川響、加藤舜一郎

発行 名古屋デザイン & テクノロジー専門学校
〒460-0008
名古屋市中区栄3-20-4
TEL (052) 242-0035

印刷・製本 株式会社オンデマンド

※無断転載・転記禁止